
ジャスティス

塚原宏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャステイス

【Nコード】

N7481B

【作者名】

塚原宏樹

【あらすじ】

人間が神や仏を忘れていた時代：世界には魔の手が及ぼうと
していた。そんな時代に生まれた一人の少女が好奇心から出た旅の
道中で様々な出来事や仲間との出会いを経験し、やがて世界を救う
ことになる。小説「ノスタルジア」の物語から遡ること千年、赤い
悪魔を廻る物語の原点が今ここから始まる…！

ブログ―旅立ちの時―（前書き）

はじめまして、塚原宏樹です。今回は記念すべき「ジャスティス」の一回目の物語です。二作目とゆうことで、今までの反省も含めて頑張つて執筆しましたので最後までお読み頂けると幸いです。…それでは、「ジャスティス」をどうぞお楽しみください。

プロローグ―旅立ちの時―

…ある時代、あるところに青い空と緑の大地に覆われたとても美しい世界があり、はるか昔からそこは人間と神や精霊などの様々な存在が共存するそれはそれは平和な世界でありました。しかし、いつの頃からでしょうか？人間は自らの力に溺れ、自らをこの世界の支配者だと奢り始めてしまったのです。やがて時代は強大なナタリア帝国が支配する時代になり、人間の記憶からは神や精霊の存在はほとんど消え失せてしまっていました。そしてその頃から、世界の各地で魔物が出現するようになり人々の生活に暗い影を落とすようになったのです。まさかこの時、別世界からの侵略を受けようとしていることなど誰も知らなかったのです。この時既に世界滅亡への力ウントダウンは始まっていたことを…。

…これは、そんな世界の端に生を受けた一人の少女とその仲間達の正義と勇気と希望と友情の物語であります…。

《旅立ちの時》

…ここは大陸の西の端の小さな農村。夜明け前、まだ空の暗い中で一つの家にだけ灯りがともっていた。そして、その家の中では一人の少女が何やら忙しそうにあちこち動き回っていた。

「あれー、おつかしいな…ぼくの目覚まし時計どこにやったけなあ？」

自分のことをぼくと呼ぶその少女は、どうやら自分の目覚まし時計を探しているらしい。

「あっ！あつたあつた！よかったー！…これがないと朝起きられな

いんだよね」

少女は目的の目覚まし時計を見つけると、それを手にとって満面の笑みで喜んだ。

「もうすぐ夜が明けるかな？ いよいよこの時が…長年の夢を叶える時が来たんだね…」

少女は薄明かりの差し込む小さな窓に目をやりながら独り言った。

少女の長年の夢…それはこの小さな農村から出て、広い世界に旅に出ることだった。小さな農村で育った好奇心旺盛な少女は、いつしか大きな世界に夢をはせるようになっていたのだ。

「さて、そろそろ行かないと…村長さんに見つかったら大変なことになるからね。時計も見つけたし…さっさと荷造りしないと！」

少女はそう言うのと再び荷造りを始めた。

そう、この小さな農村では彼女のような若い労働力はとても貴重な存在なのだ。だから彼女がこの村を出たいと村長やその他の村人に言った時も、誰も賛成してくれなかった。

…ただ一人を除いては。

「…どつこらしよ…ふう…重い…ちよつと荷物を詰め過ぎたかな…？」

少女は風呂敷に包んだ荷物を片手に、玄関から外へと出た。

…地平線は既に薄明かるくなり始めていた。

「よし！ いよいよ旅立ちの時だ。誰かに見られちゃう前にさっさと行こう！」

少女は村の出入口に向かってその歩を進めた…が、ちよつと歩いたところで一瞬、何故かピタリとその足を止めた。

「お別れの挨拶は…ううん、やっぱりやめよう…彼には心配かけたくないしね…」

…少女はさっきより少し速いペースで再び歩き始めた。

少女はたくさんの畑を横切り、そしていくつかの美しい小川を渡り、まだ灯りのついていない家々の前を通り過ぎた。

当分の間見ることにないであろう自分の育った場所のありふれた景色を、少女はただ黙々と進んで行った。

やがて、少女が村の出入口に差し掛かった時だった、

「…待てよイチ！」

何者かが少女の背後から彼女を呼び止めた。

「バル！なんで…」

少女は少し驚いたように振り向いた。

「なんでじゃねえよ。…お前、やっぱり村を出ていつちまうのかよ？」

少年が聞いた。

「…そうだよ」

イチが少しうつ向き加減に言った。

「どうしてだよイチ？一体この村の何が、何処に不満があるんだよ！？」

バルが少し強めの口調でイチに言った。

「え？別に不満なんて…そんなもんじゃないよ？むしろ、ぼくはこの村が本当に好きだよ。村の人はみんな親切だし、幼なじみのバルもいるし…何より、この村はぼくの古里だからね」

イチは、まるで子供のような無垢な表情でバルに言った。…もちろん、その言葉に偽りなどなかった。

「それじゃあ…なんでなんだよ…どうしてこの村をでる必要があるんだよ…！？」

バルが拳を固く握り締めながらイチに言った。

「特に理由はないよ。ただ、ぼくが外の世界を見てみたくなっただから…それだけだよ」

イチが言った。

「なんだよその理由…昔っから好奇心旺盛で純粹無垢なヤツだとは思っていたが…まさか村を出たいなんて言い出すとは夢にも思わな

かったぜ…」

バルはかなり呆れた様子でため息混じりにそう言った。

「ふふふ…バルこそ、相変わらずの心配症だね。…わざわざこんな朝早くの時間にぼくの見送りに来てくれるなんて」

イチが微笑みながらバルに言った。

「なっ…そ、それは…お前が昨日自分で言っただけから…」

バルは少し照れくさそうだ。

「でもバルは昨日は力づくでも止めてやるって言ってたよね？」

「ふん！関係ねーよ。どうせ止めても聞かないだろうし、俺にお前の行動を抑制する権利はないからな」

バルは腕組みしながら照れくさそうに言った。

「その通りだよ、流石は幼なじみだね！だけどバルには本当に感謝してるよ…ぼくが旅に出るって言い出した時、賛成してくれたのはバルだけだったから…ありがとうバル…ぼく…バルと一緒にいれてホントによかったよ」

イチが少し恥ずかしそうに顔を赤らめながら言った。

「な、なんだよ急に…そんなに気にすんなよ！俺達幼なじみじゃねえか！困った時はお互い様だ。…と、ゆうわけで、コレは俺からのせんべつだ…持ってけよ」

そう言うときバルは一本の剣をイチに手渡した。

「…これは？」

「銅の剣さ。村の小さな鍛冶職人からじゃあこんなもんしか渡せないが、木の棒よりかは役に立つと思うぜ？…最近は魔物も増えて物騒だからな。武器ぐらいは持って行けよな」

バルが言った。

「わあ！ありがとうバル！…それじゃあ…ぼくからも…」

イチはそう言うとき、バルのすぐ目の前まで来た。

「な、なんだよイチ…」

「目瞑ってよバル」

「は？」

「…いいから！」

バルはイチに言われた通りに目を瞑った。

…チュツ！

バルの頬にイチの唇が当たった。

「なっ… なななっ!？」

顔を真っ赤にしたバルがびっくりしてイチの方を見た。

「…それじゃあねっ！」

イチはその一言を言い残すと、バルに背を向けて走り出した。…やがて村の出口を通り過ぎ…そして…やがてバルの視界から消えていった…。

「…ったく… 本当に行っちゃったな… 今度はいつ会えるのだろうか… ? もしかしたら… もう二度と… いや、きつとまた会えるさ… 必ずな…」

…バルはイチが走り去って行った方向をいつまでも眺めていました。彼女の無事を祈りながら…そして、あのキスの意味を考えながら…。

《旅の始まり》

…地平線から太陽が顔を出す頃、イチは村から少し離れた丘の上にいた。

「朝かあ… 今頃は村中大変なことになってるんだろうなあー…」

イチは振り返って村の方を見てみた。改めて丘の上から見ると、自分の村が所詮は辺りの景色の一部に過ぎない小さなものだとゆうことがよくわかったようにイチには思えた…。

「…さてと… とりあえずは何処に行こうかな? やっぱり最終的には

ナタリア帝国の首都なんかに行きたいなあ―でも行き方わからないし…ま、適当に歩いてればそのうちつくよね」

イチは再び村に背を向け、ひたすら小道を進んで行った。…彼女が振り返ることは二度となかった。

…こうして、好奇心旺盛で気まぐれな少女の旅は始まったのです。

まさか、後に彼女がこの世界の救世主になることなど一体誰が予想出来たと言っのでしょうか？

―イチ―…それは千年先までその名を残すことになる少女の名前…。

ブログ―旅立ちの時―（後書き）

ブログとゆうことでほんの触りの部分でしたがいかがでしたか？
感想や評価、お待ちしております。

…さて、お気付きの方もいらっしゃると思いますが、この物語は作者のもう一つの作品「ノスタルジア」とリンクしております。今後、両方の作品を愛読して頂ければ作者としても幸いですので、ぜひ「ノスタルジア」の方も読んでみてくださいくださいね。

…それでは、次回にまたお会いしましょう。

旅立ちの章 第一部 運命の出会い（前書き）

こんにちは。塚原宏樹です。一ヶ月ぶりの更新となってしまうましたが、いよいよイチの冒険が本格的に始まります。どうぞ最後まで楽しんで読んでくださいね。ノスタルジアと平行して読んで頂けると、一層楽しめると思いますよ！

…それでは、ジャスティスの二話目をどうぞお楽しみください。

旅立ちの章 第一部 運命の出会い

… 燦々と降り注ぐ太陽の光、流れる雲…そして、森の木々の葉の間からは木漏れ日が差し込んでいた。そんな穏やかな森の中の小道を、一人の少女が歩いていった。髪は白っぽい金色で短く、黒くつづらな瞳をしており、年は十代後半ぐらいだろうか。背はあまり高くはなく、手に大きな風呂敷をぶら下げ、腰には鞘に収められた銅の剣を携えていた。

「んん〜っ！いい天気だなあ〜」

少女は小鳥のさえずりと、そよ風で木の葉が揺れる音を聞き、呑気に鼻歌を歌いながら森の中の小道をのんびりと北東に向かいながら歩いていった。

少女がこの旅に出たのは二日前のことになる。昔から夢見ていた外の世界への憧れを実行するために、彼女は自分の生まれ故郷と幼なじみに別れを告げて旅に出た。

特に行くあてなどない。ただ風のゆくまま気のむくままに行くだけだ。それは旅と言うよりも、むしろ大掛かりな散歩と言った方がよかったのかも知れない。

「さて… ぼくの歩いてきた道が間違ってなければそろそろバイーアの村に着くはずなんだけど」

当然、適当に歩いてきたとは言え村からここまで一本しか道がないので進行方向が違わない限り迷うはずもなかったが。今、彼女が向かっているバイーアの村は、小規模ながらも魔法使いを養成する魔法学校がある村である。

… この世界には、大きく分けて二つの力の存在がある。一つが「科学」もう一つが「魔術」と呼ばれるものである。科学は主に人間が

作り出したものと言われており、ナタリア帝国の中心的な機能が集中している大陸の東側で顕著に発達している。一方、魔術はその昔、異次元からもたらされたものと言われており、大陸の西側で発達している。両者は、互いに相慣れない存在として長年対立してきた。それは現在でも変わらず、科学で世界を支配するナタリア帝国は魔術の使用を極端に制限している。しかし、この辺りは大陸の最西端とゆうこともあり、ナタリア帝国の規制が行き届かなかったために、未だに魔術が人々の生活の一部として存在しているのである。無論、イチも若干だが魔法を使うことができる。

…さて、イチが小道をさらに進んで行くと、段々と開けた所に出てきた。やがて、目の前に小さな集落が見えてきた。

「ふう…どうやら無事にバイーアの村についたみたいだね。これで久々にふかふかのベッドで眠れるぞー」

流石に、イチにとっても石の枕で寝るのは心地よいことではなかったようだ。

集落の家のほとんどは、石やレンガ造りかしつくい壁でできた平屋であった。…しかし、集落の中心付近に一つだけ、妙に大きな建物が建っていた。

「あれが魔法学校か…ちょっと興味あるけど、まずは村長さんにご挨拶に行かなくちゃ」

イチは興味のあることにはすぐに飛びつくタイプの人間ではあったが、よそ者故に他の村の中で失礼があつてはいけないので、まずは村の長に顔を出しに行くことにした。

幸いにも村人は皆親切で、イチが村長の居場所を尋ねるとすぐに教えてくれた。

イチは、村人に教えてもらったように村長の家へと向かった。…その途中、彼女はあることに気が付いた。

「…おかしいなあ？畑とかはちゃんとして特別貧しい村ではなさそうなのに、なんか家の壁とかボロボロでまるで修理されてないみ

たいだよ」

畑にはたくさんの作物が実のつているのに、村の雰囲気がどこことなく貧しいように彼女は感じ取とれた。

「まあ、世の中いろんな村があるもんだな――」

しかし、この時には彼女はそれ以上そのことを気にすることはなかった。

やがて村長の家の前に着いたイチは、一度深呼吸して身なりを整えると、その家の扉を数回ノックした。村長宅はそれほど大きくはなかったが、他の家よりかは綺麗に手入れされているように見えた。――しばらく待っていると、初老の男性が中から出てきた。年は60後半ぐらいだろうか、白髪混じりの髪と髭をした、少しやつれた感じの男性だった。

「はて――見慣れないお方ですが、どちら様でしょうか？」

男性がそう言ったので、イチはなるべく丁寧こう答えた。

「はい。ぼくは隣の村から来たものでイチといいます。この村へは初めて来たのでご挨拶に参りました」

すると男性は優しくニコツと笑ってこう言った。

「おお――それはそれは。ここまで来るのは大変だったでしょうイチさん。何もありませんが、ゆつくりしてってくださいね」

「ありがとうございます村長さん。では、お言葉に甘えてゆつくりさせて頂きます」

イチは深々と村長に頭を下げた後、その家を後にした。そして、彼女は村の中心にある大きな建物の方へと歩を進めることにしたのであった。

《出会い》

「…あれ？昼間の学校ってこんなに静かなもんだっけ？てゆうか…誰もいないみたいだけれど…??」

イチは魔法学校の前に来ていた。…しかし、そこには生徒や先生はおろか人の気配すらなかった。

イチは学校には行っていなかったが、物知りなバルから話で学校のことば聞いていたので、そこがどんな雰囲気のところかよく知っていた。

「…お前、いったいそこで何をしてるんだ？」

その時突然、イチの後ろから何者かが彼女に声をかけてきた。

「わっ！？びつくりしたあ！…君は??」

イチが驚いて振り向いてみると、そこには一人の少年の姿があった。

「はあ…俺はエンドラースだが…お前は？あまり見かけない顔だな？よそ者か？」

「うん。僕はイチって言うんだ。隣の村から来たんだ。…よろしくねエンドラース！」

イチはエンドラースに笑顔でそう言った。

「お、おう…よろしくなイチ。ところで…イチはここに一体何の用件で来たんだ？」

その銀髪の少年は、イチの無邪気な態度に少し戸惑いながらも彼女にここに来た動機を尋ねた。

「ぼく？別に用事はないよ。旅の途中で、ただなんとなく面白そうだから来てみただけだよ」

イチはそう答えた。

「なんじゃそりゃ」

エンドラースは半ば呆れた様子のようにうた。

「でも…学校には誰もいないね？なんで？」

イチがそう聞くのでエンドラースはこう答えた。

「そりゃそうさ。今日は学校は休みだからな。俺はちょっと忘れ物して取りに来たんだが…普通、休みの日に学校に来るやつなんて誰

もないさ」

「へえ、そうなんだ！何かの祝日とかなの？」

イチがそう尋ねると、エンドラーズは顔を少し曇らせてこう言った。
「いや、むしろその逆かな？」

「え？」

「イチはよそ者だから知らんだろうけど…理由を知りたければ村の広場に行ってみな。…俺は家に帰って宿題をやらなきゃいけないから、また後で会えたら会おうな」

エンドラーズはそう言い残すと、イチに背を向けて村の方へと行ってしまった。…校庭に一人残されたイチはエンドラーズの言葉が気になっていた。

「広場か…ちょっと行ってみようかな」

少女は、好奇心に後押しされるようにして駆け足で村の広場へと向かって行った。

《リサーチ》

魔法学校のある所から村の広場まではそう遠くはなかった。

イチが村の広場に着いてみると、数人の男達が何やら運んでいた。ふと広場に停められたトラックの荷台を見ると、たくさんの食料やら何やらが山積みになっていた。

「なんだろう…？」

イチは不思議に思い、トラックの脇で煙草をふかしていた男性に声をかけた。

「あの、すみません。今何をしているんですか？」
すると男はこう言った。

「あ？なんだい嬢ちゃん、知らないのか？…ああ、この村の娘じゃ

ないんだな。だったら関係無えな。気にすんなよ」

男があまりにもぶっきらぼうに答えるので、イチは少しムツとした。「そんなこと言わないで教えてくれたっていいじゃないですか！…学校が休みなのと何か関係あるんでしょう？」

イチがそう言うと、男は少々不機嫌そうな顔をしたが、彼女の質問に答えてくれた。

「あんまり聞いても面白い話じゃないんだが…まあいいや。この荷物はない、グルス様への貢ぎ物なのさ」

「…グルス様？」

「そ。まあ、この村の近くに住むモンスターなんだが…俺達村人がこうやって半年に一度、村の作物なんかを買いでいる限りは危害を加えない契約になってるんだとよ」

男があまりにも他人事のように言うので、イチは正直ちよつと驚いた。

「契約って…そんな一方的な！悔しくないんですか？村の財産を勝手に持ってかれたりして！？」

すると男は鼻で笑うようにこう言った。

「ふんっ、よそ者が知った口聞くなよ。これはな、昔からのしきたりみたいなもんだ。逆らって村をめちゃくちゃにされるよりかは少しの貧乏を我慢した方がまだマシだね！」

「それじゃあ、あなた達は協力してその魔物をやっつけようとか考えないんですか？」

イチがそう聞くと、男は今度は大笑いしながら答えた。

「ハハハ！いいかい嬢ちゃん、グルス様はとっても強いらしいんだ。俺達が勝てるわけがないだろうが！」

その言葉に、イチは気になる点を見い出した。

「強いらしいって…会ったことないんですか？」

「あたりまえだ。恐くて会えたもんじゃない。この貢ぎ物だって夕方に指定された場所に置いてくるだけで、グルス様の姿を見たものはほとんどいないよ」

「それじゃあ…グルスが強いつてのは誰から聞いたんですか？」
「そんなの村長様に決まってるんだろ。…もういいだろうとお嬢ちゃん。俺達は忙しいんだ。夕方までにこの荷物を森の中の広場に運んで置かないと村の明日はないんだ。頼むからよそ者は引っ込んでてくれよ」

…広場を後にしたイチは何やら考え込んでいた。

「違う…絶対に間違ってるよこんなこと。強い者が弱い者を虐げる世の中なんて…ホントはこんなの誰も望んでいないはずなのに」
イチは、この時ある決心をしていた。

「とりあえず、グルスのことをもつとよく調べなくちゃ。もう一回村長のところに行つて聞いてみよう。きっと何か知ってるはずだよ」

イチは再び村長の家へと向かった。

イチが再び村長宅を訪れると、彼はまた感じよく出迎えてくれた。
しかし、彼女がグルスのことを尋ねると…

「さ、さあ…彼のことはよく知らんなあ…わ、私は忙しいのでこれで…」

と言つて、そそくさと家の中に逃げるようにして戻ってしまった。
イチはどちらかと言えばあまり洞察力の鋭い人間ではなかったが、村長が何かを隠しているのは彼女にもわかった。結局、イチは村長から何も聞くことはできなかった。

…その上、彼女はある重大なことに気が付いた。

「そう言えば…ぼくは今晚どこで寝泊まりすればいいんだ？確か宿屋なんてなかったし…参ったなあ…」

そう、すでに辺りは暗くなり始めていたのだ。しかしこの村には宿屋など無く、しかも来たばかりで知り合いもないので、彼女には泊まるあてなどなかった。

「はあ…まさかここまで来てまた野宿するなんて…悲しすぎるよ」
イチがため息をついてがつくり肩を落としていると…

「あれ…お前まだこんなところにいたのか？」

…聞き覚えのある声が彼女を呼んだ。

「あ、エンドラーズ！」

「なんだよお前、ため息なんかついてさ。…わかった、さては泊まる場所がなくて困ってたんだろ？」

「うっ…」

凶星だった。

「やっぱりな。お前、なんかそうゆう無鉄砲な顔してんもんな。…いいよ、俺ん家でよければ泊めてやるよ」

エンドラーズがそう言ったので、イチはびっくりして聞き返した。

「えっ！？いいの？」

「いいのって…ダメって言ったら可哀想だろ？」

「ホント？ありがとうエンドラーズ！エンドラーズって優しいんだね」

「よ、よせやい。優しいだなんて恥ずかしい」

イチに笑顔で喜ばれてエンドラーズは少々照れくさかったが、正直まんざらでもなかったようだ。こうしてイチとエンドラーズの二人は、村の外れにあるエンドラーズの自宅に行くことにしたのである。

《エンドラーズの家―姿無き魔物・グルス―》

…日が完全に暮れた頃、イチは村の外れにあるエンドラーズの家の前 にいた。質素なたたずまいで、正直ボロボロだった。

「見た通りのボロ屋敷だが…まあとりあえず中に入ってくれよ」

エンドラーズに言われて中に入ってみると、意外と綺麗で整理の行き届いた室内だった。部屋の真ん中にはきちんとされたテーブルとイスが置かれていた。

「へえ、綺麗な部屋だね！ぼくの家より百倍は綺麗だよ」

イチは部屋を見渡し、感心したように言った。

「百倍ってな、お前どんな汚い家に住んでたんだよ？」

エンドラースが呆れ顔でイチに言った。

「えへへ、ぼく、こう見えてちよつと掃除は苦手なんだよね」

イチはちよつと照れくさそうに言った。

「ま、とにかくイスに座って大人しく待っててくれよ。今ご飯にするからさ。あ、手伝わなくていいよ。お前はとにかく大人しく待っててくれればそれでいいからな。いい？大人しく、だぞ？」

エンドラースはそうイチに言うと、奥の台所に歩いて行った。

「なんだよ、人を子供扱いして！ぼくだって大人しく待つことぐらいできるよーだ！」

イチは少しムツとしたが大人しくイスに座って待つことにした。

エンドラースからすれば、イチの子供っぽさがちよつと怖かったのかも知れない。事実、彼女の精神年齢は一般論から言っても決して高いとはいいいないものだった。旺盛な好奇心からも解るように、彼女の精神年齢はもしかしたら数年前からほとんど変わっていないのかも知れない。しかし改めて言うておこう。彼女は立派な17才の女である。

しばらくして、エンドラースが出来上がった料理をテーブルに運んで来た。野菜を油で炒めただけの簡単な料理であつたが、イチはおおいに喜んでくれた。

「わあー！美味しそうだね！エンドラースって料理上手いんだね」

「そんなおおげさな、てゆーか、野菜炒めでこんなに喜んだやつ見るの始めてだよホント」

エンドラースは彼女の素晴らしくのうてんきな性格に呆れる他なかった。何はともあれ、二人は食事を開始した。質素だが、量はかなりあつた。にも関わらず、イチはあつという間にエンドラースより

も先に野菜炒めをたいらげてしまったのであった。

「ふう、お腹いっぱい。幸せ幸せ！」

イチは上機嫌で言った。

「お前さあ、華奢なくせによく食うなあ」

エンドラーズが言った。

「えへへ、何せ育ち盛りだからね！たくさん食べないと！」

「その割には子供っぽいよなあ、性格とか。…ついでに体付きも」

エンドラーズが、イチの胸の辺りを見ながら言った。

「もう！結構気にしてるんだからそんなこと言わないでよ！…バルにも言われたよソレ、お前は胸がないって」

「バル？誰だそりゃ？」

「幼なじみだよ。男の子ってやっぱりペッタンよりもボインがいいわけなの？？」

「い、いや…別にそうゆうわけでは…。そ、それよりどうだ？昼間広場に行ったんだろ？ちよつとはこの村の事情はわかったか？」

あまりこの手の話をしていると話がとんでもない方向に飛んで行きそうなので、エンドラーズは話を変えることにした。…が、結果的にこれがいけなかった。

「うん、行ったよ。グルスだっけ？」

「ああ…今日学校が休みだったのは奴に貢ぎ物をする日だったからさ。奴には誰も逆らえないよ」

すると、イチはエンドラーズの予想外の言葉を口にした。

「なんで？どうして逆らえないのさ？」

その言葉に、エンドラーズは驚いた。

「はっ！？お前何を聞いてきたんだよ！？グルスに逆らったら殺されちまうよっ！」

「…じゃあエンドラーズはグルスに会ったことあるの？」

「なっ…あるわけないだろうが！」

「じゃあどうして彼が強くて恐い奴ってわかるの？」

「えっ…そ、それは…」

「ねえ？なんで？」

イチのその問いに、エンドラーズは答えられなかった。何故ならエンドラーズ自身、グルスに会ったこともなければ、グルスに殺された人も知らなかったからだ。…事実、村人の多くはグルスのことを話の中でしか知らなかったのだ。

「…やっぱりね、村の人達も村長さんもグルスの事になると他人事のようなだもん。あなた達には本当の意味で自分の村を守ろうって気持ちはないの？」

その言葉にエンドラーズはカチンときた。

「うるさいっ！よそ者のお前に俺達の何がわかるっ！！」

「…」

エンドラーズが怒鳴ったにも関わらず、イチはそれを黙って聞いていた。…やがて、落ち着きを取り戻したエンドラーズはこんなことをイチに話始めた。

「…俺の両親は…二年前に流行病で死んだ。別に特別難病なわけじゃなかった。薬があれば助かったのかも知れない。…けど…この村にはそんな薬を買うお金はなかった…そう、グルスがいなければ…俺の両親は死なずにすんだ。…俺はグルスが憎かった。殺してやりたかった。でも…俺は怖かった。怖くて何もできなかったんだ。グルスに立ち向かって…きっと殺されるだけだろうって…ずっとそればかり考えて今まで生きてきたんだよ俺は…」

うつ向きながらエンドラーズがそう言うといちは

「ふうん…それで？結局あなたは何もしなかったんだね。バルが言ってたよ、そう言うのを腰抜とか臆病者って言うんだよね？」

…ただそう言った。

無論、別段イチはエンドラーズをのしるつもりはこれっぽっちもなく、ただ自分の思ったことを素直に言っただけであつたが、エンドラーズにはその「腰抜」「臆病者」という言葉が痛烈に心を締め付けた。…それはエンドラーズから喋る気力さえも奪い取ってしまうほどだった。

…しばらくして、流石に無邪気なイチもエンドラーズの落胆した様子を見て自分が言い過ぎたことに気が付いた。

「ご、ごめん…ちょっと言い過ぎたよ」

イチがそう謝ったが、

「いや…いいんだ。確かにお前の言う通り、村人も俺もどうしようもない臆病者さ。…もうほっといてくれよ」

そう言って、また下を向いてしまった。

イチは正直困ってしまった。どうしたらエンドラーズに元気になつてもらえるか…彼女はしばらくうんうん考えていたが、やがて何かが閃いたのか、彼女の表情がパツと明るくなった。

…そして、エンドラーズにこんなんでもないことを提案したのだ。「…ねっ！これからグルスに会いに行かない？」

その突拍子もない提案に、うつ向いていたエンドラーズはびっくりして起き上がった。

「…はあっ！？なんだって！？」

「だ・か・らっ！これからグルスに会いに行こうって言ったの！」

「おっ、お前正気なのか！？」

「失礼な！…エンドラーズは知りたくないの？グルスの正体を」

「そ、そりゃあ…確かに知りたいけど…で、でもよ、大丈夫なのかよ？」

するとイチはさりとこう言った。

「大丈夫も何も…始めて会ったからわからないよそんなの」

イチのその緊張感の無い台詞にエンドラーズは心底呆れてしまった。

…この少女には『未知への恐怖』とゆうものは果たしてないのだろうか？エンドラーズはイチを見てつくづくそう思った。…しかし、

同時にそんな彼女のイメージとは対照的な彼女に対する希望の念がエンドラーズの中に芽生えていた。そう、こんなにも純粹で勇氣ある人間を、エンドラーズは今までに見たことがなかったからだ。もっとも、それが勇氣なのか、それともただの無鉄砲なのかはエンドラーズにもわからなかったが。

「どうして…どうしてそこまでグルスにこだわるんだよイチ？別に
お前はこの村の住人でもないのに」

エンドラーズがそうイチに問うと、彼女はこう答えた。

「え？別にグルスなんかに興味はないよ？ただ、ぼくは困ってる人
達を放つてはおけないし、事の真実を知りたいだけだよ」

イチがあまりにもさりとそう言うので、エンドラーズはしばし言
葉を失ってポカンと口を開けてしまった。

「…あれ？ぼく何か変なこと言ったかな？」

「い、いや…別に。…お前ホントに不思議なやつだなあ」

「そ、そうかな？…それで？どうするの？行くの？行かないの？」

イチの質問に対して、エンドラーズはしばらく考えていたが、やが
てこう彼女に告げた。

「そんなの決まってるんだろ？…俺も行くさ。どうせ止めたつてお前
のその性格じゃあ行くだろうしな。よそ者のお前が行くのに村人の
俺が行かないのはおかしい話だろうしよ。何よりも、俺がグルスの
正体を暴いてやりたいんだ。…意外と弱い奴かも知れないしなっ！」
エンドラーズは、今までの落ち込み様がまるで嘘だったようにそう
威勢よく言い放った。

「決まりだねっ！そうこなくっちゃ！」

イチは立ち上がって嬉しそうに言った。

「ああ…グルスへの貢ぎ物は今頃、森の中の広場に運ばれているは
ずだ。今から行けば、貢ぎ物を取りに来たグルスに会えるかも知れ
ない」

「うん、わかった。それじゃあ、早く行った方がいいね」

「そうだな。…相手はおそらく魔物だ。モンスター万全の体制で挑まないとな」

「そうだね。…それじゃあ、ちゃんと準備してから出発しようエン
ドラーズ」

「了解だイチ」

…こうして二人はグルスに挑むべく、準備をすることにしたのであ

った。

《… to be…》

「準備は万端かイチ？」

エンドラースがイチに聞いた。彼の手には一本の杖が握られていた。
「もちろん。ぼくはいつだって準備万端だよ」

イチは腰に下げた銅剣カッパーソードに手をやりながら答えた。

「そうか。…それにしても綺麗な夜空だな」

エンドラースが夜空を仰ぎながら言った。

「ホントだ。綺麗…」

イチも天を仰ぎながらそれに答えた。

…二人の頭上には、何処までも続く星の平原が横たわっていた。月の無い夜空に星々の光が爛々と輝いていた…。

「…一体、この夜空にはどれだけの星があるのだろうか？それを考えると夜も眠れなくなる」

エンドラースが言った。

「どうだろうね…ぼくも毎晩頑張って星の数を数えてみるんだよ。だけどね、気が付くと結局朝になってるんだ。それでね、毎日毎日これの繰り返しなんだよ。…ぼくはね、時々こう思うんだ。きつと世の中に星の数を数えることのできる人間はいないんだって。それでね、星の数は偉い偉い神様さえも知らないんじゃないかって…だから…もし願いが一つだけ叶うのなら、ぼくはこの夜空の星の数が知りたいです…って、きつとそうお願いすると思うんだ」

イチが無邪気に、そして嬉しそうにそう話したことが、エンドラースにはとてもおかしく、そして新鮮に感じられた。

「ははっ。叶うといいな、その夢！さてと…もう夜もだいぶ更けた

頃だし…そろそろ行こうかイチ」

「…うん。そうだね」

イチとエンドラーズの二人は静かに森へと向かって歩き始めた。恐怖はなかった。…そう、彼らは独りじゃなかったから…。

星達の淡い光が二人の影を優しく照らし出していて、夜空には、雲一つない何処までも続く星々の平原が地平線の彼方まで広がっていた。

それはまるで、終わることない旅路を暗示しているかのような…。…。

…誰が、どんな気持ちで、この星の大平原を眺めていたのか…それを知るものはいない…。

旅立ちの章 第一部 運命の出会い（後書き）

いかがでしたか？

イチの性格が少しはわかりましたでしょうか？

グルスの登場は残念ながら次回に持ち越されてしまいました。次のお話もし楽しみに待っていてくださいね。

最後にイチのプロフィールを書いて、お別れの挨拶とさせて頂きま
す。

感想、評価を心よりお待ちしております。

イチ

性別：♀

身長：155cm

体格：華奢

髪：ホワイトゴールドでショートヘア

瞳：ブラック

好きなもの：美味しいものなんでも

嫌いなもの：狭いところ、じっとしていること

特技・趣味：運動、遊ぶこと

好奇心旺盛な元気な女の子。自分のことを「ぼく」と呼ぶ。優しく
てきさくな性格のため誰にでも好かれるタイプだが、精神年齢が低
く子供っぽいのがたまにキズ。ボーイッシュで、運動神経抜群であ
る。

ひよんな好奇心からふるさとの村を飛び出し、旅を始めることにな

26.

旅立ちの章 第二部 魔物の正体（前書き）

今回はいよいよ戦闘シーンが入ってきます。

まだまだ話の本筋はわからないと思いますが、段々と理解できるようになってと思います。

…そして、今回はこの物語の中でも大変重要な人物が登場します。名前はまだ伏せておりますが…皆様もそれが誰なのか予想してみてくださいね。

容姿と話言葉を見れば、きっと誰だかすぐにわかると思いますよ。

…それでは、最後までどうぞ楽しんでお読みください。

旅立ちの章 第二部 魔物の正体

「ねえ、魔法学校ではどんなことやってるのエンドラーズ？」

白金の髪をした少女と一緒にいた少年にそう聞いた。

「どんなことって…そりゃあ、魔法を勉強してるに決まってるんだろ？もちろん、他の学問もちゃんとやるぜ？要は名前だけで基本はただの学校だよ」

銀髪の少年はイチにそう答えた。

「ふうん、普通の学校と変わらないんだあ。もつと面白そうだと思うたのに…ちよつとだけがつかりかも」

「あのさ…お前が思ってるほど学校なんて面白い場所じゃないぜ？先生には怒られるし宿題だってあるしな」

「アハハ、よくわからないけど…学校って大変なんだ。ま、ぼくには関係ないけどね！」

「あつ、こいつ他人事だと思いやがって！」

「はは、冗談だよ！それよりも…村の貢ぎ物を納める場所にはあとどれくらいでつくのエンドラーズ？」

「あとどれくらいって…まだ村を出てから10分位しか経ってないだろうがよ。まだまだ先は長いよ」

「ええー！まだまだ！？…はあ、先が思いやられるよ」

「その言葉そのままお前に返すよイチ…」

エンドラーズはため息混じりにそう言った。

二人がバイーアの村を出てから間もなく10分が経とうとしていた。辺りに人影はない。星の光が照らす薄暗い林道を、イチとエンドラーズは目的であるグルスへの貢ぎ物を置く場所へと向かっていた。

「グルスってどんな奴だと思うエンドラーズ？」

イチがそうエンドラーズに聞いた。

「さあ…見たことないからわからないよ」

「えー、なんだか頼りないなあ」

「…あのなあ、姿がわからないから今こうやってグルスの正体を暴きに行ってるんだろうが！」

「あつ、そっか！」

「お前なあー…それで？イチはどんな奴だと思っただ？」

エンドラーズがイチにそう尋ねた。

「ぼく？ぼくはね……やっぱりぼくにも想像できないや！」

「あ、そう…」

今更ながら、エンドラーズはなんでイチなんかと一緒にいるのかと自分で自分を疑いたくなったのであった。

「どしたの？なんか元気ないよエンドラーズ？」

「別に…ハア…」

エンドラーズはため息をついた。

…その時だった、辺りにまるで地響きのような凄まじい轟音が響き渡ってきた。その轟音にイチとエンドラーズは驚いた。

「なな、なんだ！？」

「見てよエンドラーズ！上だよ上っ！！」

イチが上空を指差した。

二人が上空を見上げると、そこには巨大な影が轟音をたてながら浮かんていた。その影はまるで巨大な船か何かのようで、星空のように所々がチカチカと光輝いていた。

「こりゃあ、たまげた…帝国軍の戦闘飛行艇じゃねえかよ…！」

エンドラーズは天を仰ぎながらそう言った。

「バトルシップ？」

イチが不思議そうにエンドラーズに聞いた。

「なんだイチ、知らないのか？…と言っても、俺も学校の教科書でしか見たことないんだが…。あの飛行艇は帝国空軍所有のものさ。偵察任務によく使われる小型のタイプだな」

「へえ、そうなんだ！なんだかカッコイイね！」

「へへ、そうか？」

「違うよ。エンドラーズじゃなくて飛行艇がカッコイイって言ったんだよ」

「あ、そうですか…」

エンドラーズは正直ちよつとがっかりした。

「妙だな…？」

エンドラーズが、上空を過ぎ去っていく飛行艇の後ろ姿を眺めながら首を傾げた。

「何が？」

イチが聞いた。

「いくら小型艇とはいえ、こんな辺境の大地に果たしてわざわざ軍が来るのだろうか…？」

「そんなこと…なんか目的があるんでしょう？」

「それが問題なんだよ。こんな田舎になんの用事があるんだよ？」

「それは…確かに言われてみると」

「だろ？ 現在帝国が侵略中の西方諸国ならまだしも…既に支配下に置かれたこんな田舎に軍が来るのは…」

「エンドラーズ！ 船が…！！」

エンドラーズの話の途中でイチが突然前方を指差した。

エンドラーズがイチの指差さす方向を見ると、なんと飛行艇が高度を落として地面に近づいているではないか！

「…着陸する気か！？ だが、あの場所は…！」

「え？」

「あそこは俺達が目指している貢ぎ物を納める広場の辺りだ…！」

「え！？ どうゆうこと…？」

「わからん…とにかく行ってみよう！」

「う、うん！ わかったよエンドラーズ！」

イチとエンドラーズは急いで飛行艇が着陸した方向へと走り出した！

《グルスの正体―帝国の魔影―》

ここはバイーアの村から少し離れた森の中にある貢ぎ物の受け渡し地点…その広場には村からの貢ぎ物が山のように積まれていた。そして、広場の中央には帝国軍の飛行艇が凄まじいエンジン音を轟かせながら停泊していた。…やがて、船から何人かの近衛兵を引き連れた一人の男が降りてきた。

「…久しぶりだな…調子はどうだグルスよ？」

船から降りた男は、広場にいた一人の男にそう話かけた。

「はい…順調でございますヴォルガノン様。今回も人間共から物資を大量に…！」

白髪混じりの少しやつれた男は、貢ぎ物に視線をやりながらそう言った。

「ふふふ…そうか。これで俺とお前の私腹は満たされるわけだ…！近衛兵、この荷物を船に搬入しろ」

「はっ！」

ヴォルガノンが命令すると、四人の近衛兵が貢ぎ物を船に次々と積み込み始めた。

…その様子を、密かに近くの草陰から覗き見る二人の人間がいた。

「ちよつとちよつと！？どうゆうこと？グルスって誰かと思えば…バイーアの村の村長さんじゃない！」

イチが声を潜めながら、しかしかなり驚いたように言った。

「まさか…そんな…グルスの正体が村長だったなんて…！？」

どうやらエンドラーズは驚きを隠せない様子だ。

「村長がグルスなのはわかったよ…だけど…一体奴らは何者なの？」

イチがそう言った…その時だった、

「…イチ…イチ…聞こえますか…？」

イチの頭の中に誰かが問いかけてきた。

「！？…誰？」

イチが驚いて辺りを見回した。…しかし、辺りにはエンドラースを除いて誰もいない。すると、再びその優しい女性の声がイチの頭の中に問いかけてきた。

「…イチ…よかった…私の声がちゃんと聞こえるんですね…」

「…あなたは誰なの？」

イチがそう聞くと、頭の中の声はこう答えた。

「私はこの近くにある泉の精霊です…早く逃げるのですイチ…あの男達は人間ではありません…決して見つかつてはなりません…！」

「えっ！？それって…」

「おい？何さつきから一人で喋ってたんだよ？」

一人で勝手に喋るイチに、エンドラースが声をかけた。

「わっ！…なんだ…びっくりさせないでよ」

イチは急に話かけられて少し驚いたようだった。

「それはこっちのセリフだって！…一体誰と話してたんだよイチ？」

エンドラースが聞いた。

「わからないよ…急に頭の中に声が話かけてきて…近くの泉の精霊だって言ってたよ」

「お前…熱でもあるんじゃないのか？」

「失礼な！ぼくは正気だよ。…それよりどう思うエンドラース？」

「…は？」

「グルスの…村長さんのことだよ。頭の中の声があれば人間じゃないって言ってたんだ」

「おいおい…そんないい加減な話、信用できるわけないだろうが」

「そ、それはそうかも知れないけれど…」

イチがそう話していると

「しっ！…どうやら荷物の詰め込みが終わったみたいだ」

エンドラースがそう言った。

二人が広場の方に目を向けて見ると、村長と船の出入口に立った男が何やら話していた。

「…それではな、半年後もよろしく頼むぞ。わかっているだろうが、この事はくれぐれも内密にな。個人的にやってること故に、コロツサル様に見つかる厄介なんだな」

「承知しておりますヴォルガノン様。…それでは」

村長は男に一礼した。

男が船に乗り込むと、飛行艇は轟音と共に空高く舞い上がり、東の空へと消えて行った…。

「貢ぎ物…持って行かれちゃったね」

草影のイチが言った。

「ああ…だがこれでグルスが何者かがハッキリした…！」

エンドラースが拳を堅く握り締めながら言った。

「エンドラース…？」

「…お前は先に逃げろイチ…。畜生…俺はずっと親の敵の支配する村で暮らしてたのかよ！グルス！親の仇だ！覚悟しやがれっ…！」

「あっ！待ってエンドラース！」

イチの静止を振りきり、エンドラースは草影から広場に飛び出した！

「…！…お前は…！」

村長はエンドラースの突然の登場に驚いた。

「村長…いや、グルス！よくもこの俺達村人を騙したな！」

エンドラースが物凄い剣幕でグルスにそう言い放った。…が、グルスは至って冷静であった。

「おやおや…どうやら一部始終を見られてしまっていたようだな」

「グルス…お前さえいなければ…俺の両親は…！うわああっ！両親の仇だっ！」

エンドラースがグルスに突進した！

「ふん…人間めが」

バシィ！

「うわあ！」

エンドラースはいとも簡単にグルスに払い除けられてしまった。

「エンドラース！」

草影に隠れていたイチが地面に倒れ込んだエンドラースに駆け寄った。

「イテテ…畜生、思ったよりもやるな」

エンドラースが起き上がりながらそう言った。

「武器も無いのに敵に突っ込むなんて…エンドラースはバカなの？」

「お、お前に言われとうないわっ！…素手でも勝てると思ったんだよ」

「…でも勝てなかったよね？」

「う、うるさいって！」

「…どうやらもう一人仲間がいたようだな」

二人が言いあっていると、グルスがこちらに歩みよってきた。

「村長さん…あなたがグルスだったんですね」

イチがそう言った。

「ふふふ…いかにも。私がグルスだ。…まさか人間にこの場を見られるとは思わなかった」

グルスはそう答えた。

「どうして…なんでこんなことを」

「ほほう…部外者のお前がする質問とは思えんが…まあよい。…単純に言えば上官への賄賂だな。品物と引換に私の地位や生活は上官

に…ヴォルガン様によつて保証されるわけだ。くくく…楽なもんだったなあ…幸いなことにこの村の村長には家族もいなかったし、本物を殺してなりすますのは簡単だった。村人共に恐ろしい噂を流したのも私だが…まさかあんなに簡単に騙されてくれるとは…！」

「グルス…貴様あ…！」

「ふはは、何をそう怒るエンドラース？…気づかなかったお前が悪いのではないのか？」

グルスが怒りに震えるエンドラースに冷たく笑いながらそう言った。

「そんなことない！エンドラースも村人達も何も悪くなんかないよ！」

イチがそうグルスにくつてかかった。

「ふん、好きに言えばよいわ…どうせお前らはここで死ぬんだからな！秘密を知られたからには生かしては帰さんぞ人間共！！死ねい！！！」

グルスはそう捨て台詞を吐き捨てると、みるみるうちに恐ろしい獣の姿へと変わっていった…！

「…マジかよ！？」

「エンドラース…これはさすがにちよつとヤバいかもね…？」

「当たり前だろーが！どうするんだよイチ！？」

「…戦つて勝つしかないでしょ」

「…は！？お前正気なのか！？」

「さつきから何度も言うけど、ぼくはちゃんと正気だよっ！それとも…エンドラースはあんな危険なのを放って逃げられるの？」

イチがグルスの方に視線をやりながら言った。二人の視線の先には牙を剥き出しにした巨大な獣が唸り声を上げて身構えていた。

「とにかく…ここでグルスに勝たない限り村の未来はおるか、ぼく達の命すら危ういよ。それに…ぼくはグルスを易々と許すわけにはいかない…！」

イチは腰の鞘から銅の剣を抜きながら言った。

「無茶だイチ！勝てるわけない！…死んじゃうぞ…！？」

エンドローズがイチにそう叫んだ。…するとイチは笑顔でこう答えた。

「最初から勝敗の分かる戦いなんて…きつと存在しないんだろうね」

「イチ…」

エンドローズを背に、イチは剣を一振りすると静かにグルスの前に立ちはだかった…！

「さあ…勝負だ…！」

《グルスvsイチ&エンドローズ》

夜も深くなり月が夜空の真上にくる頃…獣と化したグルスが白い牙を剥き出しにしてジリジリと二人に迫ってきていた。

「さあ！こいグルス！」

イチがグルスに向かってそう叫んだ。

「グルアアアッ…！」

次の瞬間、グルスは唸り声をあげてイチに飛びかかってきた…！

「わあっ！」

イチはとっさにグルスの攻撃から身をかわした！それから慌ててバツクステップを踏んでグルスから離れた。

「うっ…危ない危ない…あんな牙に噛まれたらひとたまりもないよ」
イチは額の冷や汗を左腕で拭いながら言った。

「大丈夫かイチ！？」

エンドローズがイチにそう聞いた。

「ぼくは大丈夫だよ！…だけど…正直なところグルスを倒せるかどうかはわからないかも…」

「…心配するなよ。俺が奴を倒す！」

エンドラーズはそう言つと、何やら呪文を唱え始めた。

「…闇を照らす炎の神よ…汝…ぶつぶつ…これでも喰らえっ！ファ
イアボールッ！！」

エンドラーズが手をグルスに向かってかざすと、手の平から小さな
炎の球が放たれた！小さな炎の球は燃え盛りながらグルスに向かっ
て一直線に飛んでいく！！

「グルアッ！！」

しかし、グルスは素早く身を翻して炎の球をかわした！外れた炎の
球は近くにあつた木の幹に命中し、木は一瞬にして赤く燃えあがつ
た。そして、炎はあつという間に木を薙ぎ倒してしまった。

「ちっ…外したか…！」

エンドラーズが悔しそうに舌打ちをしながらそう呟いた。

「ほえ…あんなすごい魔法使えるんだエンドラーズ」

「そんな悠長なこと言つてる場合かよイチ！くっそ…動きが速す
ぎて攻撃が当たらねえ！」

「そっ、それじゃあさ、もつと近づいてから魔法で攻撃すればいい
んじゃないかな？」

イチがそう提案すると、

「あほか！俺を殺す気かよ！」

と、エンドラーズは真っ向から否定した。

「う…で、でもじゃあどうするの！？」

「そんなの知るかよ！くっそ…化物め…動きが速すぎて攻撃が当
たらねえ！あれが近所のバカ野良犬みたいに餌に釣られてくれれば
…そうすりゃ動きを止められるのに！」

エンドラーズが悔しそうにそう言つた。その瞬間、それを聞いてい
たイチが何かを閃いたように急にエンドラーズの話に食い付いた。

「い、今なんて言つたのエンドラーズ！？」

「は？いや、だからグルスが近所の野良犬みたいだったらいいなあ
つて」

「ち・が・うつ！その後だよその後！」

「あ？だから…餌に釣られて動きが止まればいいのにつて」

エンドラーズがそう言うのと、イチはにーっと笑ってこう言った。

「そうだよ！グルスの動きを止められれば…そうすればエンドラーズの魔法攻撃できつとグルスを倒せるよ！」

「た、確かにそうかも知れんが…どうやってグルスの動きを止めるつもりだよイチ？」

「だからさっきエンドラーズが自分で言ってたじゃん！…餌を使うんだよ」

「餌つて…まさか肉でもやるつもりかよイチ」

エンドラーズが半ば呆れ顔でそう言うのと、イチは自分を指差しながらこんなことを言い出した。

「肉はあげないよ。…ぼくがグルスの餌になる！」

そのイチのとてもない言葉に、エンドラーズは我が耳を疑った。

「はあっ！？お前本気なのかっ！？そんなの死に行くようなものだぞ！？？」

「もちろん本気だよ。ぼくがグルスの気を引き付けて彼の動きを止めている間に、エンドラーズはタイミングよくグルスを攻撃してくればそれでいいんだ」

イチの瞳は本気だった。彼女からは少しの恐怖も感じられなかった。

彼女がどうしてそこまで頑張るのか、エンドラーズには正直なところ理解できなかった。別にここでグルスを倒したところで彼女には何の利益もない。むしろだ、ここで戦えば彼女自身の命を落とすかも知れないのに…彼女はあえてグルスと対峙する道を選んだのだ。

…とにかくイチが正気であり、かつ本気であることは紛れもない事実であった。

「…わかった…お前がそこまで言うなら…俺も最善を尽くすよ。だが、頼むからくれぐれも無茶だけはしないでくれよ？…目の前でお

前に死なれるのだけは本当にご免だからな」

エンドラーズはイチの気持ちに根負けしたのか、彼女の作戦をしぶしぶ承諾した。

「わかってるよ。大丈夫、ぼくはそんなに弱い人間じゃあないからイチはそう言った。」

「…そうか。魔法攻撃するには呪文を唱えなくちゃならん。だから、最低でも数秒程、^{グルス}奴の動きを止めてもらいたい。…できるかイチ？」

「そんなの愚問だよエンドラーズ。ぼくはエンドラーズのこと信じてるから…！」

「ああ…俺もお前のこと信用するよ」

そう言っているとエンドラーズは一步下がり、逆にイチは一步前に出た。

「さあ来いグルス！ぼくが相手だっ…！」

イチが剣を振り回しながらグルスを挑発した。

「グルル…ギシャア！」

当然、イチの挑発に乗ったグルスは怒り狂ってイチに突進してきた！

グワアッ！

ガキイーンッ！！

グルスの鋭い爪のついた腕がイチに振り下ろされた！！…間一髪、それをイチが剣でなんとか受け止めた。爪と剣からは激しく赤い火花が散る！

「うっ…ぐう…」

グルスの物凄い力がイチの両腕に襲いかかった。あまりの力にイチは思わず大地に片膝をついてしまった。そしてジリジリとグルスと彼女の距離は近付いた。グルスの鋭い牙が彼女の喉元からわずか十数cmのところまで迫っているのだ。

…しかし、この僅かな間にグルスの動きが止まっていたのをエンドラーズは見逃さなかった。

「今だよっエンドラースっ！！！」

イチが最後の力を振り絞って力一杯叫んだ！

「ああ！！喰らえっ！ファイアフラッシュ！！！」

次の瞬間エンドラースの手から凄まじい光と熱を放つ炎の塊が放たれた！炎は物凄いスピードでグルスに飛んでいく！

「わっ！？やばい！」

それを見たイチは慌てて剣から手を離すと、うまく身を捻ってグルスから離れた地面に転がり込んだ！その次の瞬間、光と炎の塊は寸分の狂いもなくグルスに命中した！

バガアッ！！

ゴオオオオオッ！！！！

「グギヤアアアッ！！」

凄まじい光と炎が辺りを包み込むと同じに、グルスの断末魔が辺りに響き渡った。

「バ…バカな…人間なんか…に……」

グルスはそう最期の言葉を呟きやがて事切れた。

「か、勝った…」

エンドラースはその場に座り込んでしまった。するとそこにイチが駆け付けて来て突然エンドラースに抱きついた！

「わあっ！？？な、なんだよイチ！？」

「やった！やったよエンドラース！ばく達グルスをやっつけたんだよ！」

「わかった！わかってるからとりあえず放してくれよっ！苦しいって！」

「あー！ごめんごめん！」

イチはエンドラーズを放すと、大きく深呼吸してから改めてこう言った。

「…勝ったね」

「ああ…勝ったな」

「ホントにぼく達…勝っちゃったんだね」

「そうだな…本当に勝っちゃったんだな」

「…クスクス…」

「…クククク…」

「…アハハ、アハハハハ！」

「…フフ、フハハハハハ！」

二人は喜びのあまり顔を見合わせ満面の笑みを浮かべ大声で笑いあった。

…それからしばらくして、エンドラーズがまだ僅かに燃えているグルスの亡骸を見つめながら冷静にこう言った。

「しかし…魔物グルスが何故、西側のこんな辺境の村に…？そこの雑魚モンスターならまだしも…人間に化けられるような高等なモンスターが何故…？」

「そうだね…グルスのことも気になるけど、あの飛行艇に乗っていた男の人も気になるね。」

「なんだか偉そうな人に見えたけど」

イチがそう言った。

「ああ、そうだな。…いずれにしても、ナタリア帝国が一枚噛んでいるのは確かだよだな」

「ナタリア帝国…世界の七割を支配する東方の強国…なんだか話が大きくなっちゃったねエンドラーズ」

イチが無邪気に言った。

「確かにな。…ま、とにかくグルスは倒したんだ。話はややこしくなりそうだが…村に帰ってみんなに報告しないとな」

「そうだね。きつとみんなびっくりするよ！あ…見てよエンドラー

ズ、地平線が…！」

イチが地平線を静かに指差した。見ると地平線はうつすらと明るくなり始めていた。二人が静かに見つめる中、淡い青い光が段々と赤味を帯び、やがて太陽が地平線から顔を出した。…朝日が二人を照らす。

「あー…もう朝かよ」

「そうだね…ちょっと眠たいけど」

「けど？」

「…なんだかとてもすがすがしい朝だねエンドラズ…！」

「…ふっ…ああ、そうだなイチ」

イチとエンドラズの二人はしばらくの間、勝利の余韻に浸りながら朝日を眺めていました。

朝日がまるで惜し気もなく二人を祝福するかのように照らすのでした…。

《赤い瞳の女》

ここはとある場所、とある建物のバルコニー…イチとエンドラズが朝日を眺めている頃、時を同じくして一人の女性がバルコニーから見える朝の太陽を眺めていた…。

「もう朝か…またしばらく太陽の姿を拝まなくちゃなんのか」
女性は少し残念そうに言った。

その美しい女性は漆黒の長い髪を持ち、赤い瞳をしていた。朝日を浴びた瞳はその赤味をより鮮明に醸し出していた…。

「さて、今日もまた退屈な一日が始まるのか…憂鬱な限りだな。…
しかし…昨晚、西方から感じた力は果たして何だったのだろうか？
確かに微弱ではあったが…何か特別な力を感じたような気がする。
…もしかしたら…退屈な日々^{ベリオド}に終止符を打つことができるかも知れ
んなぁ…これから果たして何が起るのか…実に楽しみだ…！」
女性は薄笑いを浮かべながらそう言った。

そして彼女はバルコニーを去る際に静かにこう呟いた。

「人間はまだ知らない…明日も今日と同じ太陽を拝める保証はない
とゆうことをな…」

旅立ちの章 第二部 魔物の正体（後書き）

最後に意味深な人物が登場しましたが…誰だかわかりましたでしょうか？

…小説「ノスタルジア」を熟読されている方にはちよつと簡単過ぎたかも知れませんか。

この後、段々と物語の大筋が明らかになってきますので、楽しみにしていただくと大変嬉しいです。

ここで、エンドラースのプロフィールを紹介して、お別れの挨拶とさせていただきます。

感想、評価、お待ちしております。

エンドラース

性別：♂

身長：167cm

職業：魔法使い（未熟…）

髪色：シルバー

見習い魔法使いの少年。

歳はイチと同じくらいだが、彼女と比べるとかなり精神年齢は高い。魔法攻撃が得意だが、まだまだ未熟であるようだ。

暴走しがちなイチにブレーキをかける冷静な一面を持つが、時には感情的になったりもする。

イチとは意外にも気が合うようだ。

旅立ちの章 第三部 泉の精霊（前書き）

人生とは人それぞれで違うものです。

同時に、人生とは自分自身で決めるものだと思います。

世の中には運命とゆう言葉もありますが、運命とは自ら切り開くものであり必ずしも最初から決まっているものではないと思います。

この作品を通してそんなことを考えてもらえると、作者として幸いです。

旅立ちの章 第三部 泉の精霊

「えーと…今はここににいるから…うーん…次は何処に行くべきかな？…ダメだ、まったく決まらないよ。ぼくって予定立てるのとか苦手だからなあ」

昼下がり、イチはエンドラースの家で世界地図とにらめっこしながら何やら独り言を呟いていた。

イチとエンドラースがグルスを退治してから2日が過ぎていた。二人は知らせを受けた村人から大いに感謝され、一躍村のヒーローになっていた。村人からはイチにこの村の新しい村長になって欲しいとゆうお願いもあったのだが、もちろんイチはそれを断った。彼女の目的は旅を続けることだったし、何よりめんどくさそうなことはしない性分だからだ。

「それにしても…ぼくに語りかけてきたあの声は何だったのかな？とつても綺麗な声だったけれど…いくら地図で調べてみても泉なんか無いよねえ…」

イチは世界地図とは別に、バイーア周辺の地図も広げていた。先日、グルスとの戦闘前に頭の中に聞こえてきた声の主に会ったためだ。声の主は泉の精霊と名乗っていた…が、いくら彼女が地図を見返しても泉など何処にもなかった。

「うーん…やつぱり泉なんて無いよなあ…。あれは聞き間違い？…それとも夢？？」

イチが頭を抱えてそんなことを考えていると…

「…なんだよイチ？地図とにらめっこなんかしちゃってよ」

エンドラースが外出先から戻ってきた。

「あ、エンドラース！学校の方はどうなの？」

「どーもこーも…クラスのみんなに色々聞かれて大変だったさ！つ

いでに先生にはなんて無茶するんだって怒られたしな。そうそう、今回の騒ぎの真相がわかるまで魔法学校は当分休校だよ」

エンドラースがイチにそう今までの経緯を説明した。

「えっ、学校閉鎖！？それじゃあ、エンドラースはこれからどうするの？」

イチがエンドラースにそう尋ねた。

「さあな。まだ決めていないよ」

エンドラースがそう答えた。

「そうだ、ねえねえエンドラース、この辺りに泉なんて無いよね？」
イチはエンドラースに泉のことについて聞いてみた。

「泉？…さあ、そんなものの存在は聞いたことがないが？」

「そう…やっぱり気のせいだったのかなあ…」

イチはがつくり肩を落とした。

…すると突然エンドラースが何かを思い出したかのように、

「…そうだ！ちょっと待ってな」

家の奥にある本棚の前に行くと、何やら探し始めたのだ。

「えーと…あれでもないこれでもない…あつた！確かこの本のはずだ」

エンドラースは本棚から一冊の古びた本を探し出すと、それをイチの座るテーブルの上に開いた。

「何、その本？」

「こいつはなあ、大昔に書かれた世界地図だよ…えーと…あつた、このページだ！」

エンドラースは本のとあるページを開いた。ページの上には「バイーア地方」と書き記されていた。ページの紙はかなり色あせていたが、バイーア周辺の地図がはつきりと書かれていた。

「えーとだな、小さい時に読んだ記憶だと確か村の北側に泉が…あつた、ここだ」

エンドラースはそう言って地図上の村の北側の一点を指で示した。そこには確かにはつきりと泉の印が記されていた。

「ホントに泉だ！あれ？でもなんでさっきの地図には記載されてなかったんだろう？」

イチが首を捻った。

「そんなの俺にはわからないよ。泉が干からびちゃったのかも知れないが…詳しくは行ってみないとほんととも…」

「ふうーん…まあいいや、泉があるらしいってことはわかったし。じゃ、ぼくはこれから行ってくるから！」

「は！？行くって…泉にか？」

「そうだよ？」

「はあ…ホントに行動派なやつだなあ。いいよ、どうせ暇なんだし俺も一緒に行つてやるよ」

エンドラースがそうイチに言った。

「ホントに？それじゃあ、一緒に行こっかエンドラース！」

イチが嬉しそうに笑いながら言った。

こうしてイチとエンドラースの二人は、村の北にあるとゆう泉を探しに行くことになったのであった。

《帝都・インベリス》

イチ達のいるバイーアから遙か東の地…そこにはこの世界を支配するナタリア帝国の首都、インベリスが存在していた。街は多くの建物が立ち並び、人々が行き交う豊かな大都会である。そして、街の中心部にはこの世界の中心とも言われる帝国の中枢を担う政治・軍事関係の複合施設が密集していた。

…その施設内のある建物の会議室で、軍の上層部による会議が開かれていた…。

「…どうだ？西側諸国の制圧の進行具合は？」

「はい、順調でございますコロツサル將軍。もはや西側で注意すべき敵はアラカイトだけとなりました」

「…そうか」

「それと、最近活発になっているテロリストの問題なんです…」

「ああ…その問題なら心配いらん。…既にこちらから手は打っている」

「…と、言いますと？」

「最強の刺客を送り込む予定だ…間もなく奴らのアジトは血の海になるだろう…クク…フハハ！」

会議室に、コロツサル將軍の不気味な笑い声が響き渡った…。

《泉の精霊》

バイーアの村からそう遠くない昼下がりの北の森の中…二人の少年少女が細い小道を歩いていた。

「まさかこんな森の中に道があるとは…」

「あれ？地元のエンドラーズでも知らなかったの？」

「知らないよ。こっち側は何もないんだから誰も行かないしな。そう言えば…まだお前の旅の目的を聞いてなかったよな？」

エンドラーズがイチに旅の目的を聞いてみた。

「目的って言われてもなあ…そんなのただ旅に出たくなったから出ただけだし…」

「はあ?!目的もなしに旅に出るなんて…よくもまあ親御さんが許

してくれたもんだなあ」

「心配いらないよ。ぼくには両親がいないから」

…イチのその言葉に二人の会話は一瞬途切れた。

「…ごめんイチ。そうとは知らずに…」

「別に謝る必要はないよエンドラース。ぼくはエンドラースと違って両親の顔を知らないんだから。ぼくにとっては両親がいないのは最初から当たり前のことで、なんの感情すらないんだよ」

エンドラースの謝罪にイチは淡々とそう応えた。

「…」

エンドラースは次に何とイチに話せばよいのかわからず、ただ呆然とするしかなかった…。

エンドラースは時々、イチの異常なまでの蛋白さに恐怖すら覚えた。その蛋白さがイチの純粹な心由来なのか、それとも隠された冷酷さの表れなのかはわからなかったが…少なくとも普通の人間の器では到底計れないのは彼にもわかった。

…その時、イチが何かに反応した。

「…くんくん…これは…水の匂い？」

「おいおい…この辺りには川なんてないぜ？」

「でも確かにするんだ…しかも近いよ」

まさにイチの言った通りだった。間もなく二人の前に青く澄んだ泉が姿を現したのだ。

泉はとても静かで、波一つ立っていないかった…まるでそれは巨大な鏡のように青い空と白い雲を映し出していた…。

「うわぁ…綺麗…！」

「すげえ…こんなところに泉があるなんてな」

二人が少し感動気味に泉を眺めていると…

「…またお会いしましたね…」

先日イチに語りかけてきた声が、今度はエンドローズにもハッキリ聞こえてきた。

「あなたは…！」

「はじめまして、私はこの泉に住む精霊です。先日はあの魔物をよく倒しましたね。とても素晴らしいことです」

「えへへ…」

姿なき精霊に褒められて、イチは照れ笑いだした。

「素晴らしいことですって…見てたんだったら助けてくださいよ。」

…ついでに、客人に姿を見せないのは失礼じゃないツスか？」

エンドローズが声の主にぶっきらぼうに言った。

「…申し訳ございません…確かにあなたの言う通りです。しかし…私にはもうあなた達を助ける力も、姿形を具現化する力すら残ってはいないので…」

精霊は悲しげな声でそのように答えた。

「どうして精霊さん？」

イチが心配そうに聞くと…泉の精霊は静かにこう語り始めました。

「…遙か昔、我々精霊達と人間は共に助け合って生きてきました。

世界中で…あらゆる精霊と人々はお互いに尊重し合ってきたのです。

精霊達は人々に豊かな生活を授けました。火の精霊は火を…大地の

精霊は豊かな土地を…そして、私のような水属性の精霊は綺麗な水

を…各々が能力を駆使して人々に協力したのです。しかし…生活が

豊かになるにつれて人々は我々の存在を軽視するようになったので

す。人類の発展は全て自分達のおかげだと…。やがて人々は森を切

り開き、河川を汚染し…戦争で多くの仲間を殺すようになりました。

精霊達は生活の場を奪われ次々に姿を消し…今や私も含めてわずか

に生き残っているだけとなってしまいました…。その生き残り達も

昔のような強大な力はありませんし…おそらくもう人間とも会

いたくはないでしょう…人間に裏切られたのですから」

…泉の精霊の話を聞いて、イチとエンドラースの二人はしばらく黙ってしまいました…。

「我々精霊があなた方人間を恨んでいるのは紛れもない事実です。ですが、同時に我々精霊は全ての人間が悪いわけではないとゆうこともわかっています。…そうでなければ、私があなた方お二人に会っている説明がつきませんからね…」

泉の精霊はそう付け足して言った。

「そっか…人間って精霊さん達に酷いことしてきたんだね」
イチが呟いた。

「…話が変わってすまないんだが…精霊さん、ちょっと聞きたいことがあるんですが？」

エンドラースがそう精霊に言った。

「なんででしょうか…？」

「魔物のことなんだが…魔物グルスが帝国軍と纏るんでいたのはどうゆうことなんだ？」

…泉の精霊はしばらく黙っていたが、やがて重い口を開いた。

「…私達精霊にも詳しくはわからないのですが…この世界の住民ではない『誰か』が魔物を操っているようなのです」

「…誰かって??」

イチが尋ねた。

「…それはわかりません…ただ…何か嫌な感じがしてならないのです…それはきつとどの精霊も感じているでしょう…」

泉の精霊はそう答えた。

「…さあ、もう日が暮れます…夜の森は危険ですから…もうお帰りなさい…私はいつでも泉こゝにいます…困ったことがあったらいつでも来てくださいね…！」

泉の精霊がそう言つと、泉の周りを風が通り抜けた。…同時に、泉の精霊の気配はどこかに消えたのであった…。

「…帰ろっかエンドローズ？」
「ああ…そうだな」

…二人は夕暮れの中、複雑な心境のまま村への帰路につくのでした…。

《マートレーの砦》

バイーアの東方には、ナタリア帝国最西方を監視するマートレーの砦が存在している。さほど大きな要塞ではないが、それでも三隻の小型飛行艇と百人以上の兵士を有していた。そして、ヴォルガノンとゆう男がマートレーの最高指揮官であつた…。

「…それは真か？」

「はい、ヴォルガノン様…先日、グルス様がバイーアにて何者かによつて殺害されたと…」

砦の一室で、ヴォルガノンが部下と何やら会話をしていた…。

「ぐっ…まさかあのグルスが殺られるとは…犯人は特定できたのか？」

「いえ、それが…どうやら村の住民でないのは確かなようですが…」

「よいか、一刻も早く犯人を見つけだし…そして始末するのだ。…」

このことが公になるとマズイからな」

「承知しております。それからもう一つ報告がありますヴォルガノン様」

「なんだ？」

「アラカイトの件なんですが…どうやらこの近辺にアラカイトのスパイらしき人物が潜伏しているとゆう報告を受けております」

「…アラカイトめ…このナタリア帝国に齒向かうとはな。わかった、スパイの搜索チームを編成しろ。何も捕えられておく必要もあるまい…秘密を吐かせたらその場で殺せ」
「…承知しました」

まさかこの時、軍に指名手配されていることなどイチは知るはずもなかった…。

《…別れ…》

イチがバイーアの村に来てから4日目の朝…旅支度を整えたイチとエンドラーズの二人は村の東側の出入口に来ていた…。

「…本当に行つちまうんだよなイチ」

エンドラーズがそうイチに言った。

「うん。今までありがとねエンドラーズ！」

イチは元気よくエンドラーズに礼を言った。

「何も村長になれとは言わないよ。お前がこの村に住んでくれればきつとみんな喜ぶぜ？もうこの村は安全だし…わざわざ理由もないのに危険な旅に出る必要はないよイチ。…それでもお前は旅に出ちまうのかよ？」

「もちろんだよ。自分自身で決めたことだからね、そう簡単にはやめられないし…何よりこれが長年のぼくの夢であり望みだからね」
エンドラーズの問いかけに、イチは無邪気な笑顔でそう答えた。

「…そうか…じゃあな、気をつけて行けよイチ。またいつでも村に来てくれよな。歓迎するよ」

「うん、じゃあねエンドラーズ。ちゃんと立派な魔法使いになって

ね！」

イチはそう言つとゆつくりと歩き始め、朝日が差し込む森の小道の奥へと消えて行きました。

…彼女が振り向くことはありませんでした…。

「今思えば不思議なやつだったなあ…。きっと俺が彼女に教えてもらったことは数えきれないだろう。だけれども…もう少し一緒に居たかった…そんな気がする…」

エンドローズは彼女が去って行った方向を見つめながら、独り静かにそう呟いた。

…バイーアの村に、再びいつもと変わらない日常が訪れるのでした…。

旅立ちの章 第三部 泉の精霊（後書き）

今回は広く浅い視点で書いたので、様々なキャラクターの名前や国の名称などが出てきましたが… 各々の詳細が書かれるのはもう少し先になりそうです。

この小説は同作者執筆の『ノスタルジア』とリンクしてますので、地名や世界観、キャラクターが重複することもありますので、ぜひ比べながら読んでみてくださいね。

それでは、また次回もよろしくお願い致します。

出会いの章 第一部 謎の少女（前書き）

ここから新しい章に入ります。章ごとにキーワードが決まっていますが、今回のキーワードは『出会い』です。どんな登場人物が出てくるか…必見です。

出会いの章 第一部 謎の少女

《インベリス郊外・ロゼリアーヌ邸》

インベリス郊外のとある静かな森の中…そこに広大な敷地を持つ豪華で巨大な屋敷があった。その屋敷の二階にあるバルコニーのテールで、男女二人が何やら紅茶とクッキーでティータイムを興じながら会話をしていた。

「今度、マキシの近くにあるアラカイトのゲリラのアジトに派遣されるそうですね姉さん？」

金髪の美しい顔立ちをした少年が、テーブルの向かいに座る黒髪の女性にそう話かけた。

「そうだよカエサル。…全く、テロリストなんぞの討伐に何故このわたしが狩りだされなくてはなんなのだ？」

女性は、不満そうに紅茶をすすりながらそう愚痴をこぼした。

「ハハハ、まあまあ…これもお父様直直のご命令なんですから仕方ないですよ」

「だからこそ気に入わんのだよ。あやつは自分自身では全く動かないくせに人使いだけは荒いときた。…もつとも、わたしが今ここにいるのはそんな奴の性格のおかげなんだがな」

「そうですよ。前向きに考えましょう前向きに！」

「…やれやれ、わたしにはお前ら人間の考えることはどうも理解できないよ」

黒髪の女性はため息をつく、カップに残っていた紅茶を飲み干すのであった…。

「ロ、ロゼリアーヌ様あつ！」

その時、屋敷の中からバルコニーにメイド服を着た小さな妖精が飛んで来た。身長は30cmくらい、青い長髪と緑色の瞳で、ちよつと高価なお人形のような感じにも見えるような容姿をしていた。

「なんだ…騒がしいぞサジ。こっちは来客中だ」

ロゼリアー又はそう言った。

「も、申し訳ありません…でも…守秘回線で緊急のお電話が…」

「守秘回線だと?…誰からだ?」

「ヴォルガノン様からでございますロゼリアー又様」

それを聞いたロゼリアー又は眉を寄せてこう言った。

「…わかった、すぐに行く。カエサルに紅茶のおかわりを持って来てやれサジ」

「は、はい。かしこまりました…」

そう言うとき女性は席から立ち上がり、バルコニーから屋敷の中へと消えていった。サジも、それについて行くように屋敷の中へと紅茶を取りに行くのであった…。

「やれやれ…なんだかんだ言っ、姉さんも結構人使い荒いんだから」

カエサルは独り苦笑いしながら呟いた。

《マキシの町》

「ほえ、ここがマキシの町かあ!ばくの村やバイーアの村とはだいぶ雰囲気が違うなあ」

バイーアの村を出てから2日目のお昼…イチはバイーアから東に行ったところにあるマキシの町に来ていた。

「うわあ…人がいっぱいいて賑やかな所だなあ!お店もたくさん並

んでいるし…なんだか楽しそうだな！」

イチが今歩いているのはマキシの町のメインストリートだ。道の両脇には様々な店舗が立ち並び、多くの人々が行き交っていた。人々は買い物をしたり、立ち話をしたりして各々楽しんでいた。

「待てえっ！この女！」^{アマ}

イチがそんな町のメインストリートをのんびり歩いている時だった、後方から男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「なんだろう…？」

イチが声のした方を見ると、こちらに向かって走ってくる少女の姿が目に入った。歳はイチと同じ十代後半で、美しいブロンドの髪と茶色の瞳をしていた。そして、その少女の後ろから二人の兵隊風の男達が追いかけてきていた。

「ええい！道を開けるんだ！」

逃げる少女とそれを追いかける男達はいよいよイチが立っているすぐ近くにまで迫ってきていた。人々が驚いて道を空ける中、イチはその様子をジッと観察していた。…その時だった、

ドサッ！

「きゃあっ！」

イチが見守るすぐ目の前で少女が転んだ。少女はすぐに立ち上がろうとしたが転んだ拍子に足を捻ったのだろうか、上手く立ち上がれないようだった。そこへすかさず男達が駆け寄り、少女を取り囲んだ。

「へっへっ、軍の倉庫に勝手に入った上に番兵をぶん殴るたぁいい度胸だな譲ちゃん。だがもう遊びは終わりだ！」

男の一人がそう言っつて拳を大きく振り上げた！

「待ってよ！」

見かねたイチが男達に歩み寄りそう叫んだ。彼女としては、やはり少女を放つてはおけなかったようだ。もっとも、彼女がこの騒動の

一部始終を観察していたのも少女に救いの手をさしのべようとしたのも、彼女が育った村にはこんな騒動もそれを助けるヒーローもいなかったために、彼女がそれに興味を持ち懂れていただけなのかも知れなかったが…。

「なんだお前はっ？」

男達はイチの方をギロリと睨みつけた。

「それはこっちの台詞だよ！大の大人が二人がかりで女の子一人に暴力振るうなんて卑怯だよ！」

イチは屈強な男達にも怯むどころか、怒ってくっつかかった。

「なんだと〜！生意気な小娘め！まずはお前からだっ！」

男達はいきりたってイチに真正面から飛びかかってきた！そして一人がイチに向かって思いつきり拳を振り下ろした！…しかし、ヒョイツとイチはその攻撃をいとも簡単にかわしてしまった。そしてそのまま相手の腕の隙間を潜り抜け下顎にアッパーを一撃くらわした！

「ガッ…」

アッパーをくらった男はバランスを崩してそのまま倒れてしまった。

「なっ…」

イチは素早く身をひるがえすと、今度は驚くもう一人の顔面に裏拳を叩き込んだ！

「オブッ…」

裏拳を叩き込まれた男は顔面から大量の血液を流しながら気を失ってしまい、そのまま地面に仰向けに倒れこんだ。

「ふう…ずうたいばかりでたいしたことなかったなあ」

イチは相手の鼻血で汚れた左手を服の裾で拭いながらそう呟いた。

…が、次の瞬間に今まで静かだった観衆から拍手喝采が巻き起った。

「え、あ、いやあ…そんなに喜ばれても」

イチは照れながらも、一応民衆に手を降って応えてみた。

「…ちよつと、アンタ私のこと忘れてない？」

イチが民衆に手を降っていると、足元から声がした。

「え？あ、ごめんなさい、大丈夫ですか？」

「ええ、私は大丈夫だけど…まさか本当に忘れてたのね…」

男達に追われていた女性は少し呆れたようにそうイチに言った。

「すいません、何せ忙しかったから…」

イチはそう弁明には程遠い弁明をした。

「いいよ別に。それより早くここを離れましょう？騒ぎを聞き付けた他の兵隊が来ると厄介だから」

ブロンドの少女はそう言った。

「えっ、でもこの人達はどうするの？」

イチが倒れている二人の男達を指差した。

「そんなの放っておきなさいよ！てゆーか、そもそもアンタがボコしたんでしょーが！」

「あ、確かに」

「とにかく何処か目立たない所に行かないと…悪いけどちょっと肩貸してくれる？転んだ時に捻うちやったみたいで…」

「う、うん！わ、わかったよ。と、とりあえず裏路地にでも…」

イチにはいまいち状況が飲み込めなかったが、とにかく彼女は少女の言う通りにすることにした。…と、ゆうわけでイチは少女に肩を貸しながら、そそくさとメインストリートから遠ざかって行った…。

《イチ&リリア》

「ここをこう巻いて…つと、はいおしまい！」

メインストリートでの騒動の後、イチと少女は裏路地に身を潜めていた。裏路地に積まれた木箱に腰掛け、イチは持っていた包帯で少女の捻挫した右足首にテーピングをしてあげていた。

「ありがとう。えっと…名前は？」

少女がそうイチに聞いてきた。

「ぼくはイチ！君は？」

「私はリリア、よろしくね！イチはこの町の人なの？」

「うっん、ぼくは西の端の方からこの町に来たんだよ」

「へえ、旅人なんだ！」

「リリアは？えっと…なんでさっき兵隊さんに追われてたの？」

イチがそう聞くと、リリアは少し間を置いてからこう答えた。

「職業柄、他国の軍隊とは対立することも多くてね。…イチは旅の目的とかあるの？」

リリアはどうやら話の話題を自分のことからそらしたかったようだったが…イチはそれに気付くこともなく、素直にリリアの質問に答えた。

「特には無いかな？昔から世界の色々なことを見るのが夢なんだ」
イチが無邪気に答えた。

「ふふふ、アナタなかなか変わった人ね？メインストリートで兵隊をボコボコにしてたから、もっと武闘家みたいに堅い人かと思ってたけど全然違うんだもん」

リリアが笑いながらそうイチに言った。

「そ、そうかな？確かに運動神経はいいってよく言われてたけど。別に喧嘩が好きなわけじゃないよ」

「わかってるよ。だってアナタそんなに野蛮そうじゃないもの。…ちなみに何歳なの？」

リリアが興味津々にそうイチに聞いた。

「１７歳くらいかなあ？」

イチはそう答えた。

「なんだ、私とあんまり変わらない歳なんだ。てつきりもつと歳下かと思ってたよ」

「それって、ぼくがチビでペツタンってこと？」

「ま、ぶっちゃけそうゆうことになるわね」

リリアが笑いながらサラリとそう言った。

「むむ…これでも牛乳は毎日欠かさず飲んでるのになあ」

イチが少しばかり不服そうに言った。

「アハハ、ごめんごめん！…それより…イチは剣には自信はあるの

？」

リリアはイチの腰にあった剣を指差しながらそう言った。

「え？ああ、これね。旅に出る時に幼なじみがくれたんだ。本当は護身用なんだけど…こないだバィーア村で魔物を倒した時にはこれのおかげで助かつちやったよ」

「…バィーア村の！？それってこないだの村長が魔物だったてやつ？」

「えっ、知ってるの？」

イチが少し驚いたように聞いた。

「え、ええまあね。…そうか…この娘が例の…どつりで強いわけだ…」

…リリアはそう呟いた。

「え？何か言った？」

イチが聞いた。

「えっ、あ、ああ、何でもないよ。こつちの話だからさ」

リリアはそう答えた。

「…そうだ！アナタ私達のアジト…じゃなかった、キャンプに来ない？」

リリアが何かを閃いたかのような表情でそうイチに言い出した。

「キャンプ？」

「そ！実は私達は武器商人の一座でさ、近くに仲間のキャラバンが来てるんだ。助けてくれたお礼もしたいし…来てくれるよね？」

リリアがそう笑顔でイチに言った。

「うーん…特に行くあても無いし、いいよ。ぜひ行かせてもらおうよ！」

イチはそう答えた。

「決まりね！私達のキャンプはここから北にあつてそんなに遠くはないんだけど、今から行ったら夜になっちゃうから今日はこの町に泊まっていきましょ？…もちろん、宿泊代は私が払うからね」

「え？いいの？やった！ありがとう！」

「うふふ、大げさなんだから。さて、もうほとぼりも冷めた頃だし…行こつか？」

「うん！」

こうして、二人は宿を探すために再び町中へと繰り出して行きました…。

「うふふ…単純な娘。これなら仲間に取り入れるのも楽勝ね…」
裏路地から出る際にリリアがそう呟いた…。

《悪夢の前兆》

その後、イチとリリアの二人は特にいざこざに巻き込まれることなく、無事に宿を見つけることができた。イチはそこで久々にシャワーを浴び、暖かく美味しい食事になりつくことができた。イチとリリアは世間話や他愛もない話に花を咲かせたあと、朝早い明日のために早々にベッドに入ったのであった。…しかし、何故かイチは寝付けない。

「…なんだろう…眠れないや」

イチが横に目をやると、リリアは既にスヤスヤと寝息を立てて眠りに付いていた。イチが眠れずにいたのは、別に彼女が何かを悩んでいたからでもなければ不眠症だからでもなかった。…ただ、この時イチは何か不吉な胸騒ぎを覚えていた。イチはベッドから起き上がると窓の所まで歩いて行つた。…窓の外には相変わらず静かな夜の世界が広がっているだけだ。

「なんだろう…何だか物凄く嫌な感じがする…」

イチは自分の胸に手を当てながらそう呟いた。

…北の空がなんだかいつもより明るく見えた…。

出会いの章 第一部 謎の少女（後書き）

こんにちは、塚原宏樹です。

今回の物語を読んで様々な疑問が生まれたことだろうと思います。段々と複雑になっていきますが、わかりやすくするように努力します。

それでは、次話でまたお会いしましょう。

出会の章 第二部 赤い瞳の女（前書き）

今回は、少々残酷な描写もありますので注意してください。
それでは、どうぞ最後まで楽しんでお読みくださいね。

出会いの章 第二部 赤い瞳の女

「うーん！今日もいい天気だなあー！」

早朝、宿屋の前で白金色の髪をした少女が大きく伸びをしながらそう気持ちよさそうに言った。

「うーん…眠い…ホント朝から元気ねえイチ」

ブロンドの髪の少女は眠そうに目を擦りながらそう言った。

「そうかな？リリアも昨日は良く寝てたのに」

「良く寝ようが寝まいが朝は普通誰だってテンション下がるわよ」

リリアは相変わらず眠そうに、イチにそう言うのであった。

イチとリリアが出会ってから始めての朝、二人が宿を出ると空はすがすがしく晴れ渡っていた。これから二人は数時間をかけて、北にあるリリアとその一座のキャンプに向かう予定なのだ。

「天候も良好だし、この調子なら二、三時間で着きそうね」

リリアがそう言った。

「うん…そだね」

「どしたの？」

「え…ううん、何でもないんだ」

イチは作り笑顔でそう言うのだった。彼女の脳裏には、何故だか昨日の胸騒ぎのことがずっと居座っていた。この時、好奇心旺盛なイチにしては珍しくリリアと一緒にいくことにあまり気が乗らなかった。別にリリアが嫌いなわけじゃない。ただ、自分の中にある何かが行くなと警告する。無論、今更断るわけにもいかない。

「…よし、それじゃあ行こうかリリア」

イチはそう言った。

「それもそうね。それじゃ、出発しましょ」

リリアもイチのその言葉に賛同した。こうして、二人の少女は宿を

後に北を目指した。

…そう、この後に想像を絶する惨劇を目撃することになるとも知らず…。

《血の惨劇》

「ねえリリア、キャンプにいるリリアの仲間達ってどんな人達なの？」

「そうねえ…まあ色々なのがいるよ」

「ふうん」

「イチは？旅の仲間とかはいないの？」

「いないよ。だって一人旅だもん。道中で色んな人には出会ったけど」

「たくましいねえ、私には一人旅なんて考えられないよ」

「確かに、一人で兵隊さん二人に追いかけられるようなトラブルを起こす人には無理かもね！」

「…悪かったわね」

二人がマキシの町を出発してから二時間余りが経過していた。イチとリリアの二人の少女は他愛もない話をしながら森の中の小道を歩いていた。

「もうすぐ着くんだけど…おかしいわね」

リリアがそう呟いた。

「え？」

「私の気のせいかも知れないけど…なんだか静か過ぎるような…」
リリアが不安そうな表情でそう言った。確かに彼女の言う通り昼間の森の中だとゆづのに小鳥のさえずりすら聞こえないのだ。そして、いつの間にか風も止み空には灰色の雲が広がりつつあった。

「なんだろう…この不気味な感じは…」

あまりにも不気味な静けさに、イチは思わず身震いした。

「ええ…嫌な感じだわ…とにかく急ぎましょう」

不穏な空気の中、二人はとにかく先を急ぐことにした。しかし、イチの鼻が辺りの異変を捕えた。

「なんか鉄臭いなあ…まさか、この匂いは…」

その時、急に開けた所に二人は出た。…そして二人の瞳には戦慄の光景が映し出された…！

「え…これは…！」

イチは我が目を疑わずにはいられなかった。

「う…そ…みんな…」

リリアは、あまりの衝撃にその場に膝をついた。二人が見た光景…それは真に地獄絵図だった。辺りは一面の血の海であった。かろうじて人間の原型をとどめた死体がいくつも転がり、何とも言えない死臭を放っていた。衣服やテントは無惨に引き裂かれ、地面のいたるところに千切れた肉片や内蔵が無造作に落ちていた。…あまりの惨劇に、二人はしばし言葉を失った。

「…いったい何があったのリリア？」

イチが声を絞り出すようにそう聞いた。

「たぶんナタリア帝国の仕業よ。…畜生、なんて酷いことを」

リリアが拳を地面に叩きつけながら答えた。

「え…でもなんでナタリア帝国が商人のキャラバンを…？」

「…実はね…私達本当は武器商人なんかじゃないのよ」

「え!？」

リリアの言葉にイチは驚いた。

「…私達はナタリア帝国の強引な支配体制に反発する反抗勢力なのよ。アナタを連れて来たのは…その強さを見込んで仲間に加わってもらおうと思ったからなの」

「そんな…」

「ごめんなさいね…騙すつもりはこれっぽっちもなかったの。…まさか…こんな形で仲間と会わせちゃうなんて…」

リリアはそう言った後、うつ向いて何も喋らなかった…。イチはしばらく黙ってリリアの様子を見ていたのだが…やがて、近くにあった石を使って何やら穴を掘り始めた。

「イチ？何を…」

リリアが聞くと…

「この人達をこのまま野晒しにするわけには行かないよ。慰めにはならないかも知れないけれど…せめて安らかに眠れるようにお墓くらはいは作らないと…」

イチはそう答えた。

「…そうね…ありがとうイチ。私も手伝うよ」

こうしてイチとリリアは、引き裂かれた骸達のために墓を作り始めたのであった。その間、二人が会話を交わすことはなかった…。

《墓前の女》

「…眠れないや」

惨劇のあった場所からそう遠くない大木の下で、イチは眠れぬ夜を過ごしていた。墓穴を掘る作業で体は疲れきっているはずなのに、何故か全くそれを感じなかった。そんなイチとは対照的に、リリアはイチの隣で既に眠りにについていた。…しかし、その寝顔はどこか悲しげに見える。

昼間、墓穴を掘って死体を埋める作業は困難なものだった。バラバラになった死体を誰のものを知ることすら難しいのに、それが広範囲に散らばっていたなら尚更だ。…結局、夕方まで搜索したにも関わらずリリアが言う24人のメンバー全員の亡骸を見つけることはできなかった。見つかったのは、五人の首とせいぜい10人分の腕や足だけ。あとは全て粉々の肉片で、もはやそれが元々何なのかすらわからない。仕方なく、二人は木の枝などで24人分の十字架を作り惨劇のあったアジトの端にそれらを立てた。そして、全ての

残骸は近くに穴を掘ってそこに埋めたのだった。

二人としては、一刻も早くこの悪夢のような場所から離れたかった。しかし、ここは暗い森の中…日が暮れてしまつては帰るすべはない。二人は野宿を余儀なくされ今にいたるのである。

眠れないイチはふと立ち上がり天を仰いだ。昼の間空を覆っていた灰色の雲は嘘のように消え失せ、天上には満天の星空が広がっていた。

「綺麗な星空…今頃バルやエンドラーズは何してるのかな？」

イチはそんなことを考えるのであった。その時、イチは大事なことを思い出す。

「…いけない、お墓に添える花を忘れてた」

イチは辺りを見回した。すると運良く、近くの木の根本に小さな青い花がたくさん咲いていた。イチはその花をそつと摘み取ると、急いで24個の墓がある場所へと走っていった。

「…あれれ？」

墓前に着いたイチは思わず驚く。無理もない、墓前には見知らぬ女性立っていたからだ。

「まさかこんな所で生きた人間に出会うとは…お前はなんだ？」

女性はイチの方を向くとそう聞いてきた。その女性は暗闇と同じ漆黒のドレスを身につけている。美しく長い黒髪を風になびかせ、まるで血のように赤い瞳がこちらを見つめていた。…イチはなんだか今までに経験のしたことない不思議な感覚を彼女に覚えた。

「ぼ、ぼくはイチと言います。えつと…あなたはここで何を…」

イチはそう言いながらふと墓を見た。…墓には小さな黄色い花がたむけてあった。

「あれ？この花は…あなたが？」

「…そうだが」

女性はそう答えた。

「もつとも、あまりにも意味のない偽善行為に過ぎないがな」
女性はさらにそう続けてイチに言った。

「そ、そんなことはないですよ！きつとこの人達の成仏にも貢献してると思います」

イチは言った。

「成仏に貢献するか…わたしはただ単に自分の犯した諸行を見に來ただけなのだな」

女性はそのけなくそう言うと、おもむろに近くにあつた切株に腰を降ろし天を仰いだ。そしてこう呟いた。

「実に美しい空だ…爛々と輝く星空を見てると嫌なことも忘れられるよ」

「ええ、本当に…」

イチも女性の言うことに納得する。彼女は女性の腰かけている切株のすぐ隣に座つた。

「…あなたはこの空にはいくつの星があると思います？…えつと…」
「…アゲハだ。何故そんなことを聞く？」

アゲハがイチに聞くと、

「特に意味はありませんよ。ただ、ぼくは昔から星を数えるのが好きで…その答えを知りたいだけなんです」

彼女はそう答えた。

「ふはは、面白いやつだねイチは。…実はな、わたしも子供の頃はよく同じことを考えていたものだよ」

「えっ、そうなんですかアゲハさん？」

「そうだよ。今から考えたら嘘みたいだけどね」

アゲハは若干笑いながらそう言った。

その後、しばらくイチとアゲハの二人は黙つて星空を眺めていた。

…やがて東の空がわずかに明るくなってきた頃、アゲハは切株から立ち上がる。

「さて…私はそろそろ帰るとするよ。お前とはまたいつか会いたいものだな」

「会えますよきつと。地球（チキ）にいる限りは」

「ふふ…そうだな」

アゲハはそう答えるとゆつくりと歩き出した。そして最後に、イチから少し離れた所で背を向けたままこう言った。

「ああ…そうそう、一つだけ言い忘れてた。…グルスを倒したことについては褒めておく。だが奴は所詮、駒の一つに過ぎない。背後にはもつと強大な力が動めいていることを忘れてはならない。あまり深く関わらない方が身のためだぞ？もつとも、旅を自分の理想通りの退屈な独り旅にするか、それとも血と死に満ちた戦いの旅にするのかは…イチ、全てはお前次第だな…」

アゲハはそう意味深な台詞を残すと、静かに暗闇の中に消えていきました…。

「行っちゃった…なんだかちよつと不思議な人だったなあ。…ん？なんである人ぼくが旅をしていることやグルスを倒したこと知ってるんだろ？…ん…ま、いつか」

イチは立ち上げると大きくのびをした。…ちょうどその時、東の空から太陽が顔を出した。オレンジ色の光が辺り一帯を照らす。

「もう朝か…最近ろくに寝てないなあ…」

イチはしみじみとそう呟いた。…そして、こうも呟くのであった。

「この旅路の先には…一体何があると言っのだらうか…？」

いつもと変わらない朝のはずなのに、イチはなんだか不思議な気持ちでいっぱいだった。

…小鳥がさえずり、風が優しく木々の葉を揺らす…森にはいつもの平和でゆつくりとした時間が流れていました…。

出会いの章 第二部 赤い瞳の女（後書き）

少し意味深で理解しにくかったと思いますが、いかがでしたか？
かなり長い物語になる予定ですが、最後まで見守っていただければ
幸いです。

それでは、また次回にお会いしましょう。

出合いの章 第三部 再会の罫（前書き）

ようやくこの物語もここまでできましたが、シリーズの基盤となる小説『ノスタルジア』が完結するまでは更新はゆっくりと行うつもりです。作者としては『ノスタルジア』を読んでいただいてからこの物語を読んで欲しいとゆう考えなので、なにとぞ読者の皆様のご理解をお願い致します。

出合いの章 第三部 再会の罫

「…イチ、イチってば！もうお昼よ？そろそろ起きてよ」

リリアは寝ているイチをそう言つて揺する。

「ん…あ、おはようリリア」

すると、イチは眠そうに目を擦りながらリリアにそう挨拶した。

「あ、おはよう…じゃないわよ！今何時だと思つてるの？」

「えへへ…ごめんごめん、最近あまりよく寝れてないから…」

呆れるリリアにイチは照れくさそうに弁明するのであった。

悪夢から一夜明けた今日、辺りにまだ僅かに死臭が漂っているのを除けばいつもと何ら変わらない快晴の空の下の日常がそこにあった。今思えばイチが旅に出てからまだ一ヶ月も経っていないにも関わらず、彼女には色々なことがあった。バイーアの村で知り合った見習い魔法使いエンドラズと共に魔物グルスを倒し、次にマキシの町で兵隊に追われていたリリアを偶然助けた。そして今回、リリアの仲間が皆殺しになっている現場に遭遇…謎の女・アゲハとも出会った。

…おかげで、イチは何かと考える時間が増えた。これからの旅の予定、グルスや魔物のこと、精霊のこと、リリアのこと、虐殺の犯人そして…アゲハのこと…考えれば考えるほどわからないことだらけだ。無論、イチはあまり賢い人間ではないから考え事は苦手だ。しかし、そんな彼女でさえも考えなくてはならないほどにあらゆる事柄が複雑に絡み合っているのも事実である。つまりだ、考える時間が増えただけ寝る時間が減ったのだから彼女が今日のように朝寝坊するのも当たり前と言えは当たり前なのかも知れない。

…とりあえず、イチがようやく起床したところで二人は昨日作った

墓の所に行くことにした。

「…あれ？花がたむけてある…イチがお供えしてくれたの？」

墓前についてみると、黄色と青色の花がたむけてあったのでリリアがイチにそう尋ねた。

「う、うん。そうだよ。昨日の夜リリアが寝ている間にちよつとね…」

この時、イチはあえて黄色い花をたむけてくれたアゲハについては語らなかった。…なんだか黙っていた方がいいような気がしたからだ。

「…ありがとうね」

リリアはそう少しだけ笑顔で言う。

「…これからリリアはどうするつもりなの？」

「そうね…今はとりあえずバイーアに行こうと思うの。ちよつと会って話をしなくちゃいけない人がいるから」

「ふーん…」

「イチは？もうこれからどうするのか決めたのかしら？」

そつりリアに尋ねられたイチはしばらく考えているようだったが、何かを決めたようにこう言い出した。

「ぼくもリリアと一緒にバイーアに行くよ。…どうせ他にやることもないしね！」

「さすがイチ！そう言ってくれると思ってた！」

リリアはそう嬉しげにイチの手を握った。

「あはは…でも…バイーアまでは結構な距離があるよ？大丈夫かなあ？」

「ああ、それなら心配ないと思うよ」

リリアはそう言って何かを指差した。…その先には昨夜の惨劇を逃れた一台の迷彩柄のバギーがあった。

「もしかして…あれに乗ってくの？」

「そつよイチ。たぶん夜にはバイーアに到着できるはずだから。…大丈夫よ、私がちゃんと運転するから！それとも？何かご不満でも

？」

「いや…ちゃんと自賠責入ってるのになって」

「…イチって意外とリアルなんだね」

イチの言葉を聞いたリリアが苦笑いしたのは言うまでもない。

《マキシの宿屋》

「ロゼリアーヌ様！起きてくださいよロゼリアーヌ様ってば！」

「ん…あと10分だけ寝かせてくれよサジ」

ベッドの上を飛び回って起床の催促をするサジに、ロゼリアーヌはかけ布団の中からそう言う。

「も…ダメですよロゼリアーヌ様！あと30分でヴォルガノン様の迎えが来ちゃうんですから！」

「あ…わかったわかったよ、起きればいいんでしょ起きれば…」

そう言っただけでロゼリアーヌはしぶしぶベッドから起き上がった。彼女は寝起きが悪いようで、目は虚ろな上に自慢のロングヘアもボサボサで見る影もない。

「あら…だいぶお疲れのようですねロゼリアーヌ様。ご朝食…と言ってももうお昼ですが、準備は出来ていますのでとりあえずシャワーを浴びて来てはいかがでしょうか？」

「そうするよサジ。」

…さすがに人を20人以上殺すと体にこたえる」

ロゼリアーヌはそう愚痴をこぼしながら静かにバスルームへと消えて行った。

…思えば2日前、ロゼリアーヌはコロツサルの命令でこのマキシの町に来た。そしてその日の夜中、近くにキャンプを構えていたナタリア帝国に反抗する勢力のメンバー24人を皆殺しにしたのである。無論、彼女からすれば殺人と言うよりはむしろ一方的に蹴散らした

と言ったところだが。とりあえず次の日の昼間は町をぶらついたりして過ごしたのだが…何を思ったのかその日の夜、つまり昨晚にもう一度キャンプのあった場所に向かったのだ。そして、そこでイチとゆう名の少女と出会ったのである。ロゼリアー又は彼女に不思議な力を感じていた。彼女には真名を明かさずに、コードネームに相当する名のアゲハと名乗っておいたが、いずれまた会いたいとも考えているほどである。

「イチ…か。不思議なオーラの持ち主だったな」

ロゼリアー又は熱いシャワーを浴びながらそう呟いた。しかし、どんなに洗っても彼女から血の臭いが消えることはない。

「血の臭い…別段嫌いなわけじゃないんだが…なんだか虚しくなる」
ロゼリアー又はシャワーを浴び終わると、バスローブ姿のままにサジの用意した朝食を済ませ、よそ行き用の濃い青色をしたドレスに着替えた。

「わあー、とつてもよくお似合いですよロゼリアー又様！」

「そ、そうかな？…ちよつと派手じゃないか？」

鏡の前で、サジに褒められたロゼリアー又は少し照れくさそう。

…その後、身支度を整えたロゼリアー又とサジが宿屋から出てみると一台の高級車とスーツを着た運転手が宿屋の前の通りで二人を待っていた。

「お待ちしておりましたロゼリアー又様」

運転手はそう言つて車の後部ドアを開けた。

「ささ、行きましょうロゼリアー又様」

「…ああ、そうだね」

二人はそう言つて車に乗り込んだ。そして、二人を乗せた車はマートレーの砦を目指して走って行くのでした…。

《バイーアの村》

「あーあ…すっかり日が暮れちゃったよ。バイーアの村はまだかなあ？」

「うう…まさかガス欠になるとは…最悪だ」

すっかり暗くなった森の小道を歩きながらイチとリリアは揃ってため息をつくのであった。

実は一時間ほど前、二人を乗せていた車がガス欠で動かなくなってしまうていた。仕方なく、車を捨ててここまで歩いて来たのだが…なかなか村は見えて来ない。

「そう言えば…エンドラーズは元気にしてるのかな？」

「…誰よそれ？」

「友達の魔法使い…と言っても、ついこないだ知り合ったばかりなんだけどね」

「ふーん、やっぱり旅人って知り合いが多いものなのかしらね？」

「あつ、見てよイチ！」

リリアがそう言って前方を指差した。その先にはかすかだが灯かりが転々と輝いていた。

「…バイーアの村だ！ちゃんと着いたみたいでよかったねリリア！イチはそう嬉しそうにリリアに言った。

…10分ほど歩いて行くと二人はバイーアの村の入口にたどり着いた。夜間とゆうこともあり、辺りは静寂に包まれていた。

「さて、どうしようかしら…ファロウエラ先生がこの村に住んでいるのは確かなんだけど」

リリアが腕組みをして考えていると、

「リリアはその人に会いたいの？…だったら良い方法があるよ！」
そうイチが言い出した。

「良い方法…？」

「まあ、とにかくぼくに着いて来てよ」

不思議がるリリアを後目に、イチは速歩きで村の奥へと進んで行った。…やがて、二人は少々年期の入った家の前でピタリと止まった。
「ここは…？」

「エンドラーズの家だよりリア。…ちよつとボロボロだけれどね」
「可愛い顔してずいぶん言うわねイチ。ところでその人物は信用できるやつなの？」

「…半分くらいかな？」

「半分くらいって…ホント大丈夫なの？」

二人が家の前でそんな会話をしていると…

「…おいおい、人ん家の前でずいぶん言ってくれるじゃないか」
家の中から主の銀髪の少年が不機嫌そうに玄関から出てきた。

「あ、エンドラーズ！」

「なんだよイチ、せつかく戻って来たのかと思えば随分なご挨拶だな」

「えへへ…ごめんごめん、少し言い過ぎたよ」

イチは笑って手を頭にあてながらそう言った。

「…で、そちらのお嬢様はどちら様で？」

エンドラーズはリアを見ながらそう聞く。

「私はリアよ、はじめましてエンドラーズ」

「あ、ああ…はじめましてリア」

エンドラーズは少し照れながらリアに挨拶を返した。

「…ゴホン…えーと、それで？こんな夜分に俺に何の用だ？」

エンドラーズは改まってイチとリアの二人にそう聞く。

「私、ファロウエラって人を探しているの」
リアが言った。

「ファロウエラ？」

「エンドラーズなら何か知ってると思って訪ねただけど…知らない？」

イチがそう言うと、

「ファロウエラ…ちよつと待てよ？確かどつかで聞いたような…？」

エンドラーズはしばらく腕組みして考えていたのだが…急に手を叩いてこう言い出した。

「思い出した！ファロウエラってこの村の魔法学校を創った創始者

で初代校長だよ！」

「それで！？ファロウエラ先生は今何処にいるの？」

リリアがそうエンドラーズに聞くと、リリアの予想とは異なる回答が返ってきた。

「数年前まではこのバイーアの村に住んでいたみたいだがな、サルパって港町に海に見える最高の物件があるとか何とかで引越しまったよ」

「えっ！？それじゃあもうココにはいないの？」

「残念だが真にその通りだよイチ」

エンドラーズはそう静かにうなずく。

「そ、そんなあ…せっかく先生に助言してもらおうと思ってたのに、リリアはそう言ってがっくりと肩を落とした。

「それはそうと…お前らこれからどうするつもりなんだ？」

エンドラーズが聞いた。

「どうするって…特には決めてないけど？」

リリアがそう答えると…

「それならよかった。

…どうせ予定を立てたところで無意味だからな」

エンドラーズがそう言った瞬間、突然エンドラーズの家の中や裏から大勢のナタリア帝国軍の兵隊達が飛び出して来た！！

「……！！？」

イチとリリアが驚く間もなく、三人はあっという間に機関銃を構えた兵隊達に囲まれホルドアップされてしまった！

「…すまない。お前らが来る少し前にコイツらに捕まっちゃったんだよ」

エンドラーズがすまなそうに言った。

「あはは…つまりぼく達がココに来ることは予測済みでエンドラーズを餌に釣られたわけだ」

イチは苦笑いしながらそう無邪気に言った。

「笑ってる場合じゃないってイチ！…もう…最悪のパターンね」

リリアはそう大きなため息をつくしかなかった。

…こうして、帝国軍に捕えられた三人は軍のトラックに乘せられ、バイーアの村から最も近くにある砦、マートレーの砦へと連行されることになったのである…。

《マートレーの砦》

月が高く昇るその頃…マートレーの砦の一室ではヴォルガノンと彼に招かれたロゼリアーヌが何やら話をしていた。

「…それで？バイーアの村長殺しの犯人は捕まったのかい？」

「ああ…さっきバイーアで捕えられたと部下から連絡があつたばかりだブラッディコアよ。…明日の昼にはこのマートレーの砦に収容予定だ」

「そいつはよかった。何せバイーアから取り寄せていたお前の密輸品の中にはわたしの大好きな紅茶もあつたからな。…それを台無しにした代償は大きい」

「ふはは…お前らしい考え方だな。…それよりどうなんだ？首都での計画の進み具合は？」

「順調そのものだよ。もはや議会は愚か国王までもがコロツサルと言いなりだからな…奴が政権を握るのも時間の問題さ」

「ククク…コロツサル様が政権を握れば我々魔物がこの世界の支配者になるのも時間の問題…人間とは愚かなものだ」

「…そうかもね」

ロゼリアーヌはただそうとだけ答えた。

…ヴォルガノンとの対談を終えたロゼリアー又は、今晚泊まる皆の一室へと戻ることにした。

「魔物の支配する世界…か…。アーティファクトクリーチャー人工生命体のわたしとしては素直には喜べんがな…」

…彼女は戻り際にそんなことを呟くのだった。

やがて彼女が部屋に戻ってみると…よほど疲れていたのだろう、サジが大きなベッドの上でその小さな体を横たえてスヤスヤと眠っていた。

「…やれやれ、なんとも世話のかかる妖精だな」

そう言いつつも、ロゼリアー又はポケットから取り出した白いハンカチを優しくサジの小さな体に掛けてあげた。…そしてサジの頭を優しく撫でながら、彼女はちよつと嬉しそうにこう言うのであった。
「…サジ、いつもお疲れさま。お前の前では恥ずかしくて素直には言えないけれども…お前と一緒に居てくれてわたしはとても嬉しいよ。いつもありがとうなサジ…これからもずっと一緒に居ようなたし達…！」

…もしかしたら、その言葉の奥底には彼女にしかわからない何かの意味が込められていたのかも知れない…
ロゼリアーヌ・ブラッディコア

出会いの章 第三部 再会の罌（後書き）

作中では主に主人公イチとロゼリアーヌの二人からの視点を中心に書かせていただいています。性格も種族も置かれた状況も異なる二人の視点からは世界がどのように映っているのか…そこに重点を置いて読んでいただければこの物語をより一層楽しめると思います。

…さて、今回はこの物語初の番外編を書かせていただこうと思っております。内容はちよつと不思議な世界とイチとの関わりの物語です。

それでは、次回以降の物語も楽しみにしててくださいね。

番外編 幻住庵（前書き）

《ぼくの世界》

…ジリリリリ！

「ん…うるさいなあ」

少女はそう言って目覚まし時計を切る。

「ここは…そうか…戻って来ちゃったんだね…」

少女はそう言って布団から起き上がるとおもむろに玄関から外へと出た。朝日がようやく顔を出したばかりの、薄暗い空にまだ僅かに星の光が点在していた。

「…今思えば…あれが夢だったのか現実だったのかぼくにはわからない。けれども…あの世界での出会いと約束だけは紛れも無い事実なんだよねきつと…」

早朝の清んだ空気の中、少女は一人静かにそう呟いた…。

番外編 幻住庵

…とある世界、とある辺境の小さな村にとても元気で活発な女の子が住んでいました。

彼女の名前はイチ。元々は小さい頃に村の近くに捨てられていたのを村人によって拾われた捨子でしたが、村人達に大切に育てられ今では独立して、小さいながら自分の家と畑を持って生活しています。親切な村人達や幼なじみのバルに囲まれ、イチは幸せで平凡な毎日を過ごしていました。

…でも彼女には一ただけ悩みがありました。彼女にとっては平凡な毎日とはとても退屈でした。どうにかしてこの退屈な現状を打開しようとする毎日のように考えていましたが…その答えを見つけられずでした。

「…ふう…種まきの前の畑の手入れは疲れるなあ…今日はここまでにしよう」と

…少女は今日もいつも通り農作業に励んでいました。気がつけば既に日は傾き、辺りは闇に包まれつつありました。

「今日も特に何も無かった…毎日が同じことの繰り返し…ぼくはこんな退屈な人生を延々と送り続けるのかなあ…？」
沈み行く太陽を見送りながら少女はそう呟いた。

家に帰った彼女は汚れた体を濡れたタオルでよく拭いた後、夕食の準備を始めた。畑で収穫した野菜に山で採った山菜、川で捕まえた川魚…毎日のメニューはたいして変わらないものだった。そんな単調な夕食を、毎日のように少女はさつさと胃袋に収めてしまうのである。

「…ごちそうさま！今度はもう少し濃い味付けにしようかな、うん」

夕食を済ませた少女は特にすることもないので、畑の端に寝転んで満天の星空を眺めるのが日課となっている。

「…綺麗だなあ…この星空はいつたい何処まで続いているのだろう…」

少女は星空を見る度にそんなことを考えるのであった。

「…オリオン座…そうか…ぼくが村に来てからもう16年も経つかあ…」

彼女は自分の誕生日も正確な年齢も知らなかったが、拾われた時に空の真上にオリオン座があったことは聞いていたので大雑把な年月はわかった。

「星座は一年を掛けて空を巡るけれど…ぼくは一年中この村の中だなあ」

そう少女は呟いた。

…やがて夜も深くなってきたので少女は家に帰り眠ることにした。歯を磨き、寝間着に着替え、いつものように床に布団を敷いてそこに横になる。薄い掛布団を首まで被ると、やがて少女を緩やかな睡眠が襲う。

「明日も早起きして畑の世話をしなくちゃ…でも、ちゃんと起きれるか心配だな…早起きはあまり得意じゃ…ない…し…」
そんな不安を考えながらも、彼女は静かに眠りについた。

…そして、この日の出会いが少女の運命を変えることになる…

《幻夢の世界》

「…ん…あれ…ここは…どこ…?」

…ふと気がつくと、イチは見知らぬ景色の中に独りたたずんでいた。辺りには赤茶色のレンガ造りの家々が立ち並び、イチが立っている道は髣髴できていた。…そこは何処かの町のようにであった。

「町…？見たことの無いような景色だけ…？」

イチはふと空を見上げてみる。…青い空を白い雲がゆっくりと流れるだけの、別に普通のよく晴れた日の空だ。

「なんでぼくはこんなところにいるのだろうか？…確か布団に入って寝てたはずじゃあ…？あつ、そうか！これはきつと夢なんだ！」
そう言つてイチは自分のほっぺをつねってみる。

「いででっ！」

…痛かった。

「夢じゃあないの？じゃあ…ここはいつたい？」

彼女はヒリヒリと痛むほっぺを擦りながらしばらく考えていたが…
「うーん…こうしていても仕方ない。とりあえず色々と探索しよう
と」

そう言つてとりあえず町の中を歩いてまわってみることにした。

…とても静かだった。昼間にも関わらず町中には人影が全くない。
家の中には灯りがとまり、店には様々な商品が並んでいて人々が生活している様子が容易に伺えるのにも関わらず、人間はおるか動物の気配すらしない。

…それはまるで、ついさっきまでこの町に人がいたと言つよりはむしろ最初から誰もいない…そんな気がした。

「おかしいなあ…なんで誰もいないんだろう？」

さすがに単純で気楽な性格のイチも、誰の気配も感じられないので段々怖くなってきた様子。とりあえず、ふと目についたパン屋へと入ってみることにした。

「すいませーん！誰かいませんかー？」

…返事はない。

店の中には様々な種類の焼きたてのパンがところせましと並べられ、何とも言い難い良い香りが漂っていた。

「うわあ、いい匂い…美味しそうだなあ…誰もいないし…ちょっとだけ食べちゃえ！」

イチは誰もいないのをいいことに、近くに置いてあった丸くて小さなパンを手にとると一口かじってみた。

「もぐもぐ…うん、香ばしくて美味しい！」

まだかすかに温かなパンの旨味が口いっぱいに広がる。…彼女には、それがこの静かな世界では不自然なくらいに美味しく感じられた。

「そうだ、今更だけど…もしかして店の奥に誰かいたりして」

イチはそう言つて、残りのパンを口に頬張ると店の奥にあるパン工房へと足を踏み入れた。工房にはまるでついさっきまで職人がパンを作っていたかのように、パン生地や麵棒が無造作に置かれていた。そして、パンを焼きあげるための釜戸には火すら焚いたままであった。

「…やっぱり誰もいない…ホント、どうなってるんだこの町は？」
イチにはただ首を傾げることしかできなかった。

…その後もイチは町中をさまよい歩いたが、やはり誰もいない。犬も猫も鳥も人も…命ある物の存在は一切感じられなかった。ただ、静寂と無生物的な物だけがそこに転がっていた。

「…なぜだろう…知らない場所のはずなのに…なんだかずっと前から知っていたような…そんな気がする…」

そんなイチの髪を不思議なほど優しく柔かなそよ風が撫でてゆく…。

…もうどのくらいの時間ときが過ぎたのだろうか？本当に静かな町だった。イチの住む村もそれほど賑やかなところではなかったが、それでも小鳥のさえずりくらいは聞こえる。しかし、この町にはまるで『無』しかない…そんな気がした。

「ふう…さすがに足が疲れちゃったよ」

イチはそう言つて空を仰いだ。…相変わらず空はきれいに晴れわたっている。

「あれ…もうだいたい歩いたつもりなのに…あんまり太陽の位置が変わらない気が…ま、気のせいかな」

とりあえず、落ち着いて休憩できる場所を探すためイチは再び歩出す。

「それにしても…誰にも会わないのはともかく、こんだけ歩き回って町の出入口にすらたどり着かないなんて…」

そう、普通これだけ歩き回れば町の端、つまりは出入口に遭遇してもよいはずなのに…全くそれが見えない。

それに、イチにはもう一つ気になることが…

「気のせいかも知れないけれど…なんだかぼく、さつきから同じような場所ばかりぐるぐる回っているような気が…」

まるで巨大な迷路の中に閉じ込められた…そんな気すらしてきた。

…しばらく歩き回っていると、やがて広場のような場所にたどり着いた。円形に作られたその広場はとても広くて直径は200m以上あるだろうか。中央には彫刻で装飾され、何段にも重なり合った立派な噴水が絶えず大量の水を美しく吹き出していた。

「うわぁ…すごい…初めて見る景色だよ」

初めて見る噴水の姿にイチは自分の置かれた状況も忘れて、しばらくその美しい装飾と躍動する水に見入っていた。

「あれ、誰がいる…？」

噴水を眺めていたイチがふと気がつく、噴水の縁に誰かが腰掛けているのが目に入った。

「誰だろう？今まで誰もいなかったのに…」

イチは不思議に思いながらも、この町に人がいたことに少しだけ安心して噴水の方へと歩みを進めた。

「…あら…この世界に人間が来るなんて…珍しいこともあるんだね」
噴水に腰掛けていた人物はそう近づいて来たイチに言った。

身長は小柄なイチよりもさらに少し低く、顔付きから判断するにイチと同じ女の子で歳も同じくらいだろうか。髪はあまり長くなく鮮やかなオレンジ色、瞳は透き通った美しい桃色をしていた。服装は

パーカーにジーンズとゆう比較のカジュアル…と言うかむしろラフな格好で、頭には何故か不自然に黒い角帽をかぶっている。そして、手には何やら分厚い一冊の本が開かれていた。

「え…君は？」

「私は…ヴァイシエーシカ・デイスヴァイス・ディアボロス・ニル・アドミラリイ…だよ」

「…?????」

「…ニルでいいよ。あなたの名前は？」

あまりに長い名前を聞いて目が点のイチに、自らをニルと名乗るその少女はそう言った。

「ぼくはイチだけど…ニルはこの町の人なの？」

イチはそう聞いてみる。

「そうだね…半分くらいは正解かな？」

ニルは少々不適な笑みを浮かべながらそうイチに答えた。

「半分？」

イチはそう首を傾げた。

「確かに私はこの町の住人。でも、そもそもこの世界にはこの町しかない。この町にはこの私しかないから…」

「…え？」

「この世界はあなたの創造よりずっと小さくて…そして複雑なの。この町がこの世界の全てであり…私がこの世界唯一の存在なんだよ」ニルはそうイチに言う。

「つ、つまり…この町にはニルしかないってこと？」

「そうだよイチ」

「それって、他の人は何処に行っちゃったの？」

「何処にも行っていないよ。…最初からいないんだ、この町に人間なんて」

「…????」

「なかなか理解に苦しんでいるみたいねイチ、無理もないけど。いわ、私もいくつか聞きたいことがあるし…ついて来て、私の家で

話しましょう?」

頭の中が混乱しそうなイチの様子を見て、ニルはそう提案した。

…こうして、イチはニルと並んで広場を後にして町の中を北へと歩き出す。ニルの歩幅は小柄なイチのそれよりもさらに小さかったので、イチもニルに合わせてゆっくり歩いた。

「そう言えば、その本は何なのニル?」

イチはどうやらニルが手にしている分厚い本のことが気になる様子。

「ああ、コレ?ラスト・プレリユードって小説だよ。読んでみる?」

「え、あ、いや、ぼくはいいや…」

…イチは文字だらけの本が大の苦手である。

「そう?面白いと思うんだけどなあ」

「はは…ニルは本は好きなの?」

「好きと言つか…読書くらいしかやることないし」

「そつか…そうなんだ」

「ところで…イチはどうやってこの世界に?」

ニルが少々不思議そうにイチに聞く。

「さあ…ぼくにもよくわからないんだ。自分の部屋の布団で眠ってたのに、気がついたらこの町にいたんだよ」

「なるほど…多分、イチの睡眠中の意識の波長とこの世界の波長が同調して一時的に亜空間の歪みがうんぬんかんぬん…」

「は?え??」

「…要はここはあなたの夢の中の世界ってこと」

「でも、さっき自分のほっぺをつねってみたけど普通に痛かったよ?」

「だから…厳密に言えば夢の中とは違うんだって」

「ふゝん…ところで、ゲンミツって何?ハチミツの親戚?」

「…」

ニルがこの時、イチがどんな人間なのかを悟ったのは言うまでもないだろう。

「ニルはさつき他の人はいないって言つてたけど…それじゃあパン屋さんのパンとかは誰が作っているの？」

「さあ…知らないよ。だけど、いつでも生活に必要なものは揃っているから独りでも私が困ることは無いんだよ」

「そうなんだ…ホントに不思議な世界ところなんだね」

「まあ、私にとってはこれが当たり前なんだけどね。…着いたよ、ここが私のお家」

そう言つてニルは一つの建物の前で足を止めた。その建物は一階建てのレンガ造りの小さなもので、まるで周りの風景に溶け込むようにして建つていた。

「こんなところにこんな建物があるなんて…全然気がつかなかった」
「さつき言つたでしょ、この世界は小さいけど複雑だつてね。とりあえず中に入りましょうか」

家の中に入つてみると意外と中は広く見えた。部屋の壁に沿つて本棚がずらりと並び、その中には様々な書籍が大きさも色も不揃いに並べられている。読みかけなのかそれとも本棚に入りきらないのだろうが、部屋の端の床にはいくつかの本が無造作に山積みになっていた。大きな窓が奥に一つあつて、他には部屋の真ん中辺りに小さなちゃぶ台が置いてあるだけのシンプルな家であつた。

「ほえ…本がいっぱい！」

「だから、読書くらいしかやることないのよ私。ちょっと待つて、今お茶とか出すから」

そうイチに言つと、ニルは部屋の一番奥へと入つていった。

「読書くらいしかやることない…か。なんだかぼく…今までものすごく贅沢なことを望んできていたのかも」

今までの自分の生活とこの世界を比べながら、イチはそんなことを考えるのであつた。自分の育つた村での生活は確かに退屈なものなのかも知れない。けれども、誰かと会おうと思えばいつでも会えたし色々楽しく会話だつてできた。そんな当たり前だとばかり思つて

いた他人の暖かさ、優しさを感じることがこの世界ではできない……
だとしたら、彼女は^{ニル}いつたい今までどんな気持ちで過^スごしてきたの
だろう？ そう思うと、イチは自分のあまりにも身勝手な考えがな
んだか恥ずかしくなるのであった。

「……お待たせ。ささ、座った座った」

やがてニルが部屋の奥から戻ってきた。すると彼女はそう言って、
何やら緑色の飲み物と黒くて四角い食べ物をちゃぶ台の上に置いた。
「……なにこれ？」

「ただの緑茶とただのようかんだよ。……大丈夫、毒なんか入ってな
いから」

ニルが座りながらそう言う。

「それはそうだろうけど……どれどれ……？」

イチはちゃぶ台の前に座ると、刺さっていた楊枝でようかんを一口
食べてみる。それから緑茶をゆつくりとすすってみた。

「……どう？ 口に合うかしら？」

ニルが聞くと、

「うん！ 初めて食べたけど、すっごく美味しいね」

イチは満面の笑みで答えた。

「そう……それはよかったわ」

満足そうなイチを見て、ニルは出会ってから初めてそれらしい笑顔
を見せた。

「ニルは毎日こんなに美味しいもの食べてるの？」

「まさか、これはそもそもお菓子の類だよ。普段は……そうだなあ、
何を食べてるんだろうか？」

「え？ 覚えてないの？」

「覚えてないと言うか……食事なんて気の向いた時に適当にしか食べ
ないから」

ニルはようかんを口に運びながらイチにそう言う。

「ふーん、じゃあぼくと同じだ。ぼくもお腹が空いたら我慢しない
ですぐに何か食べちゃうもん」

「それとはちよつと違うような気が…」

イチの発言を聞いてニルは苦笑いした。

「緑茶にようかん…世の中には色んな食べ物があるんだね」

ようかんをまじまじと見つめながらイチが感心するように言う。

「そうだよイチ、世界はとても広いし知らないことだらけなんだ」

「それって…どうゆうこと？」

「まあ…簡単に言えば人間なんて小さくてちつぽけな存在ってこと。例えば人生の全てを捧げたとしても、世界の全てを見ることがなんて到底できないし世界の全てを知ることもしないだろうね」

「ふん…」

ニルはさらにこう続ける。

「世界の数なんて誰も知らない。イチが普段生活してる世界も私のいるこの世界も…星の数ほどもある世界のほんの一つに過ぎないんだよ」

彼女はそう語った。

「つまり、世界は無数に存在してぼくの知らないことがたくさんあるわけだ？」

「…ま、要訳するとね」

イチの問いにニルは茶をすすりながらそう答えた。

「そうか…よし！決めた！」

突然、何かを思いついたかのようにイチが言った。

「決めたって何を？」

ニルがそう質問する。

「前々から思ってたんだけど…向こうの世界に帰ったら、ぼくは旅にでることにするよ」

「別に構わないけど、また何故？」

「なんだかぼくは村で一生農作業するのには向いていない気がするんだ。もつと色んな世界を見て感じて…とにかくもつと色々知りたいたいんだ」

「色々知りたいんだったらそれこそ本なり何なり読めば済むんじゃない」

なくて？」

「それはそうかも知れないけど…実際に経験しなかったら本当の価値ってわからないんじゃないかとぼくは思っただよ。正直、本を読んで感じられるものって実はそんなに無いんじゃないかって時々感じるんだ」

イチはそう真剣な眼差しで語る。

「…そうね…確かにどんな優れた文献でも所詮は薄っぺらな二次元の世界…ニル・アドミラリイ空虚な虚像…そう、この世界の…この私のように…」

ニルはそう呟く。イチの話聞いていて、彼女はなんだかとても虚しい気持ちになった。自分の生きている世界には何も感じるものが無い。だとしたら自我を持つ意味が果たしてあるのだろうか？本の中でしか自らの感性を発見できない自分に生きている価値があるのだろうか？…普段からそんなことを考えていたニルにとってはイチの言葉が痛烈に心に突き刺さった。

「あ…ごめん、別にそんなつもりで言ったんじゃない…」

「…ううん、気にしないでイチ。あなたの言う通りなんだから。」

もし、あなた自身が納得するなら旅に出てみるのも悪くないと思うわ」

ニルはそうイチに言った。

「うん、とにかくよく考えてからにするよ。…でも…その前に大事なことを聞き忘れてた」

「何？」

「この世界からはどうやって帰ればいいのかな？とりあえず帰らないとみんな心配するだろうし旅にも出れないし…あ、別にぼくはニルとずっと一緒に楽しいからいいんだけどね」

「…だめよイチ、あなたはちゃんと自分の世界に帰らないと。この世界は本来あなたのいるべき場所じゃないんだから…」

「そっか…」

「…私についてきてイチ、この世界から唯一出られる場所に案内するから…」

「うん…わかったよニル」

こうして、心になんだか言葉では表現できない曇りを残したまま二人はニルの自宅を後にしたのでした…。

《空間赤化》

ニルの自宅を出た二人は町中をさらに北へと進んでいきました。さつきまで青かった空も夕日に照らされて真っ赤に染まっていた。それでも、辺りは相変わらず不気味なほどの静寂に包まれている。

「ねえ、ニル？」

「何？」

「ぼくは今まで自分が不幸な人間だとばかり思ってた。…だけど、ニルと出会ってそれが間違いだったって気がついたんだ。当たり前だと思ってた村人みんなの存在がどれだけぼくにとって大事だったかの、それがどれだけ幸せなことだったのか…この世界に来て初めて解かったよ」

イチはそう言った。

「…そうだね、人間ってなかなか当たり前であることの幸せには気づかないものなのよね。私も…ううん、なんでもない。でも旅には出るんでしょ？」

ニルはイチに何か言いかけたが、あえてそれ以上言わなかった。代わりにイチに旅に出るか否かを質問した。

「もちろん。でもね、世界の全てを見たらちゃんと故郷の村に帰るつもりなんだ。やっぱり、ぼくがいるべき本当の場所だと思うから…」

「私もそれが良いと思うよ。旅は大変な重労働だけど、終わった後に何かが残るような良い旅路になるといいわね」

「うん！ぼく、ニルの分まで頑張るよ」

「うふふ、ありがとうねイチ。…さあ、着いたよ。ここがこの世界

で唯一無二の出入口だよ」

二人が辿り着いたのは小さな駅だった。プラットホームにはベンチが一つあるだけで閑散としている。…そして、単線の線路が真っ直ぐ何処までも伸びていた。

「ここが？」

「そうだよ、待ってればいずれ汽車が来るだろうからそれに乗れば元来た世界に戻るよ」

ニルはそう言った。とりあえず二人はベンチに腰掛けて列車を待つことにした。目の前には、沈み行く大きな夕日が赤々と輝き世界をオレンジ色に染めている。

「…綺麗な夕日ね。もう数え切れないくらい見てきてるはずなのに…今日の夕日はいつもと何だか違う気がするよ」
ニルがそう言う。

「そうだね」

「帰ったら旅に出るんだろうから私から一つアドバイス。世界は常に中立的な存在なの…『正義』とか『悪』みたいに二極化できないってことだけは絶対に忘れないでね」

「うん…難しいけどちゃんと覚えてるよ」

「きつとイチにもそのうちわかるようになるわよ」

「それもそうだね!…ところで、今度はいつ遊びに来てもいいのニル？」

「…それはできないわ。おそらく永久にね…」

「…え…？」

一瞬、沈黙の時間が流れた…。

「…この路線は一方通行、つまりこの世界からは出られるけどこの世界に再び来ることはできないの」

ニルがそう説明する。

「そ、そんな…で、でもぼくが寝ればまた…」

「それも無理ね。そう毎度同調なんかしないから。…そもそもあなたがこの世界に来たこと自体が奇跡に等しいんだよ?」

「そんな…それじゃあニルは…」

「そうだよイチ。私はまた独りぼっちになる」

ニルは淡々と言った。

「独りぼっちになるって…どうしてもっと早く言ってくれなかったの!？」

「言っただって何もならないし、それが私にとっては当たり前のことだから…」

「ダメだよ！独りぼっちだなんて…そうだ！ニルもぼくと一緒に来ればいいんだ！そうすれば…」

「残念だけどそれは出来ない。…私はこの世界の中だけの存在…この世界の中だけでしか生きられないのよ」

「それならば…」

「あなたもこの世界には長くはいられない。24時間も経てばあなた自身が消滅することになっちゃうから…」

…夕日で世界がよりいっそう赤味を帯びる頃、強い風が二人の髪を撫でていく…そして、間もなく小さな無人の蒸気機関車に客車が2両だけついた粗末な列車が到着した。…それは二人の別れの時を意味していた。

「…さあ、お別れの時間だよイチ。短い時間だったけど…本当にありがとう。私、こんなに楽しかったの初めてだった…こんなに嬉しかったの今までなかった…ずっとずっとイチのことは忘れないよ…!」

ニルはその桃色の瞳に涙をいっばいに溜めてそう言った。

「そんなこと言わないでよ！ぼくは帰らない！ずっとニルと一緒にだもん！」

「ありがとうイチ。…でもその言葉だけで十分よ。あなたには自分の世界に帰ってやらなくちゃいけないことがきつとたくさんあるはずなんだから…」

「ニル…」

…イチとニルは静かにお互いを抱きしめあった。それはまるで、こ

れで最後になるかも知れない友人の温もりを惜しみ感じているようでもあった。

「…さあ、もう汽車が出るわ。忘れないで、自分が何をするべきなのか…」

「うん…ありがとうニル。ぼくもとっても楽しかった。…絶対に約束する、何があってもぼくはまた必ずこの世界に来る」

「私もずっとイチのこと待ってる…何があっても…」

…二人はそう言って再び熱い抱擁を交わした。

やがてイチが客車に乗り込むと、まるでそれを待っていたかのように列車はゆっくりと動き出した。列車は徐々に速度を上げて、ホームから遠ざかって行く。

「ありがとうニル！だけでもさよならは言わない…また必ず会えるから…！！」

イチが客車の窓から身を乗り出して力いっぱいホームのニルに叫んだ。

「元気でねイチ！私、ずっとずっといつまでもイチのこと待ってるからー！」

ニルもホームの端から精一杯列車に向かって叫んだ。

…やがて、列車は遙か遠くの地平線にその姿を消していきました…そして、再び世界には独りの少女と静寂だけが残されました…。

「…さよならイチ…あなたは私の宝物だよ…」

ホームの上の少女はそう涙ながらに呟いた…。

番外編 幻住庵（後書き）

《私の世界》

静寂が支配する夜空の星々を独りの少女が眺めていた。

「…静かだなあ…いや、きっとこれが普通なんだよね。今までがにぎやか過ぎたんだ」

少女はそう言つて、掌を夜空にかざしてみる。

「あなたは私に色々教えてくれたね。楽しいこと、嬉しいこと…そして誰かを愛すること…数えればきりがないうねきつと。また会えるのだろうか？…ううん、それまで私はずっと待ってる。だからきつとまた来てくれるに違いないんだ。…あなたは今、何処で何をしているの？もう…あなたのことしか考えなれないよ…」

…少女の瞳から、一筋の大粒の透き通った涙が零れ落ちるのでした…。

出会いの章 第四部 マートレーの砦（前書き）

前回の番外編から話が本編に戻ります。比較的現時点ではわからないことも出てきますが、後々重要になってくる表現も多数登場しますのでお見逃しなく。

出合いの章 第四部 マートレーの誓

「あー…腹減ったなあ…」

エンドラーズがそう愚痴をもらす。

「もう！こんな時になに呑気なこと言ってるのよ。イチも何か言つてやってよ」

リリアが少々怒りながら言った。

「うー…ごめん、ぼくもエンドラーズと同じ意見だよ。ご飯ないのここ？」

「はあ、何だか一緒にいる私が一番ばかばかしいわ」

…イチとエンドラーズの能天気ぶりにリリアはため息をつくしかなかった。三人がバイーアの村で拘束されてから半日が経過していた。三人は何やら砦らしき建物に軍のトラックで連れてこられ、そのまま地下牢に入れられたのだ。ほとんど明かりも無く、まるで時間の感覚が麻痺しそうである。

「それにしても、いつまでここに閉じ込めているつもりなんだ？」

エンドラーズが言った。

「さあね、そんなことわからないわよ」

リリアがぶっきらぼうにそう答える。

「なんだよりリア、そんなに怒らなくてもいいじゃないか」

「よく言うわねエンドラーズ、元々こうなったのは誰のせいなの？」

「そつ、それは…」

「まあまあ、しょうがないよりリア。あんなにたくさんの兵隊さんに脅されたら誰だって逆らえないよきつと」

イチがそうリリアをなだめる。

「そりゃそうだけど…」

リリアはしぶしぶエンドラーズへの罵声をやめた。…しばらくの間、沈黙が続く。

「…これからどうなるのかしら私達？」

リリアが言った。

「畜生…俺がもつとしつかりしてれば…」

エンドラーズは唇を噛む。

「ぼくは諦めないよ。別にまだ終わったわけじゃないもん」

イチはそうサラリと言う。

「じゃあどうするんだよイチ？何か策でもあるのかよ？」

「う…それは…えーと…」

「二人とも、もうやめましょう？…話してもお腹が減るだけだから」
リリアのその一言で三人は再び黙ってしまった。…長い長い沈黙の時間だけが過ぎ去ってゆく…。

《意外な接点》

…夕日がマートレーの砦を赤く染める頃、前日からこの砦に滞在しているロゼリアー又は自分の宿泊部屋で、机の上に両肘をつきながら退屈を紛らわせていた。

「やれやれ…退屈なのはどうもいかん。なんだかイライラしてくる」

ロゼリアー又はそう指で机を撫でながらそう言う。

「そんなこと言わないでくださいよ。昼間に散々ヴォルガンン様が砦の中を案内してくれたじゃありませんか」

机の縁に腰掛けたサジがそう言った。

「ふん、案内だと？奴はただ単に自らが治めるこの要塞の素晴らしさを自慢しただけさ。戦争のことしか頭にないミリタリーオタクの考えなんぞわたしにはとても理解できんね」

「はは…」

ロゼリアー又はそんな言葉を聞いてサジは苦笑いした。

「まあそんなくだらないことはどうでもいいとしてだ、グルス殺しの犯人とアラカイトの姫君が一緒に捕まったと聞いたのだから？」
ロゼリアー又はそうサジに聞く。

「あ、はい。仕入れた情報によると、捕まったのは三人で…」
すると何故か、サジは少しばかりその先を言うのをためらった。

「…どうしたサジ？」

ロゼリアーヌがそう尋ねると、サジは重い口を開いた。

「…その中に以前私が助けた人物がいます」

「…まさか、かつてのお前が妖精の村を出た理由の…それは本当か？」

「はい、間違えありません。10年以来ですがこの面影は絶対に彼女です。昨日の収容時に撮影された写真の中に…」

そう言つて、サジは昨日撮られた一枚の写真を取り出した。その写真には白金色の髪をした無邪気そうな感じの少女が写っていた。

「！」

ロゼリアーヌにはその写真の人物が誰だかすぐにわかった。

「あの…イチを知つておられるのですかロゼリアーヌ様？」

「ああ…間違いないよ。こないだマキシの郊外で会った娘に違いない」

「え！？」

「まさかな、こんな形で我々と彼女が点と線で結イチばれるとは…世の中とはつくづく不思議なものよ」

ロゼリアーヌがそう感心しながら言った。

「そうですね…私もまさかこんな形で彼女と再開できるとは思っていませんでしたよ。でも…元氣そうでとても嬉しいです。初めて会った時と比べるとだいぶ大きくなっちゃいましたけど」

サジはそう笑みをこぼした。

「喜んでばかりもいられんぞサジ。あのミリタリーオタクのことだ、明日にでも死刑になっちまう可能性がある」

ロゼリアーヌがそうサジに言つと、

「わかつてます。…でも仕方ないんです。もう過去のことですし…何より国の意向という優先すべき事柄がありますから…それでイチが死んでも何も私に言う権利なんて無いんです」

そうサジはうつむきながら答えた。…それを聞いていたロゼリアー
又はしばらく黙っていたが、やがてこう優しくサジに語り掛けた。
「…そうだな、確かにお前の言う通りかも知れんな。だがな、国家
とゆうものは人が作ったものだ。人の意向が最優先されるべきであ
って国家の意向に踊らされてはならないし、国家に人を操る根本的
な力は存在しない。もし、物事全てに優先順位があるとすればそれ
を決めるのは国家ではなく人自身の決断力だ。決して権力に屈して
はならないんだよサジ…お前なら今自分が本当は何をするべきかき
つとわかつているはずなんだから」

…そう言ってロゼリアー又は一つの鍵を取り出すと、そつとサジの
小さな手にそれを手渡した。

「これは…」

「何も言うな。地下牢へは警備の手薄になる夜中に行くがよい。…
わたしも彼女には個人的な興味があつてな、ここで死なれては退屈
しのぎの大事な娯楽を失うようで納得いかないからな。…べ、別に
お前のためではないぞ？わたしはそんなに部下に対して寛大ではな
いからな」

ロゼリアー又は少々照れくさそうに顔を赤くして言った。

「…ありがとうございます。でも…相変わらずホントに素直じゃな
いんですからロゼリアー又様は」

サジはその綺麗な緑色の瞳を嬉涙で潤ませながら、精一杯の感謝の
意を自らの主人に述べるのであった…。

《地下牢からの脱出》

…どれだけの時間が経過したのだろうか？暗く冷たい地下牢の中で
心身ともに疲労困憊したエンドラースとリリアが、互いに反対側の
壁に向き合いうずくまるようにして眠っていた。しかし、こんな状

況下においてもイチだけは相変わらず元気に起きていた。

「もう、エンドラースもリリアもよくこんな堅くて冷たいところで寝られるなあ。…それにしても、ぼく達はこれからどうなるんだろうか？例によって死刑かな？だったら銃殺刑がいいな、あれならすぐに楽になるだろうし。でも絞首刑とかギロチンは嫌だなあ、なんか首を絞められたり切られたりするのって好きじゃないんだよね。」

ああ、どこかの国では貼り付けとか火炙りの刑ってゆうのもあったな。でもやっぱり島流しが一番いいや、だって死にたくないもん」そんなことを独り自分に問いかねながらイチは暇を弄ぶ。彼女は最近まであまり本を読む人間ではなかったが、ある出来事をきっかけに本に興味を持つようになっていた。元々、物覚えは良いので過去に読んだであろう世界の死刑について書かれた本の内容を彼女は思い出していたのかも知れない。…しかし、この状況下でこんな内容を楽しげに呟く人間は彼女くらいのもだろう。もしかしたら、彼女には本来全ての人間が持つ『死に対する恐怖』とゆう感情が無いのかも知れない。あるいは所詮死も自らの生の一部に過ぎないと、そう考えているのかも知れない。いずれにしろ、彼女の思考は常人には理解し難いものでありながらも極限にまで洗練された『生きるものとしての根源かつ根本的な』考え方であることだけは間違いないと言えるだろう。…当然、本人に自覚などあるはずもないであろうが。

「…まあいいや。ぼくもそろそろ寝ようかな？何にもやることないし」

イチがそう大あくびをしていると…

「あつ、いたいた！こんなところにいたんですね」

すぐ近くから何者かが話しかけてきた。

「えっ？誰？何処から？」

「ここですよ、ここ！」

イチがちよつとだけ視線を上上げると、そこには小さな妖精がフワフワと飛んでいた。

「わっ、妖精さんだ!」

「うふふ、お久しぶりですねイチ。体だけは大きくなりましたが、その性格は相変わらずみたいです。…多分私のことなんてもう覚えていないでしょうが」

「えっ!? どうしてぼくの名前を…でも…その声、なんだかとても懐かしいような…」

「残念ですが、説明している時間はありません。…とにかくここからお逃げください」

そう言っサジは牢屋の鍵穴に鍵を差込み、そして牢屋の扉を開けた。

「えっ、いいの? こんなことしちゃって」

「構いません。これは私と…ロゼリアーヌ様、つまりはアゲ八様のご意思ですから」

「あのアゲ八さんの…?」

「…私にできるのはここまでです。後はご自分達の力でなんとかしてください。…大丈夫、あなたにならこの皆を脱出できると信じています」

…そうイチに言い残して、サジは何処かに飛び去ってしまった。

「あの妖精さんは何だったのかな…? って、こんなことしてる場合じゃないや!」

イチは急いでエンドラースとリリアを揺すって起こした。

「んん…何よイチ? 何かあったの?」

「なんだよ、人が気持ちよく寝てたのに…」

イチのただならぬ様子にリリアとエンドラースはようやく目を覚ました。

「ほら! みてみて!」

そう言っイチは開かれた牢屋の扉を指差した。

「え!?!」

「は!?! なんで!?!」

それを見た二人は驚きと嬉しさで飛び上がった。

「え」と…なんか知らないけど開いたんだ。と、とにかくはやくここから出ようよ!」

イチが言うと、

「言われなくてもそうするつもりよ。こんなところさっさとおさらばなんだから!」

「ようやく俺達にも運が向いてきたか。閉じ込められた分、倍にして返してやるぜ畜生」

そつりリアとエンドラズは威勢よく答えた。

「さっきまであんなに気持ちよさそうに寝てたのに…ま、いっか、元気が何よりだよね」

やる気満々の二人を見て、イチは苦笑いする。

…こうして、三人によるマートレー脱出作戦の火蓋は切って落とされた…!!

出会いの章 第四部 マートルの砦（後書き）

《コラム：イチは天才？》

この物語の主人公としてお馴染みの少女イチ。比較的、純粹でおバカなキャラクターとして描かれることの多い人物ですが、果たして彼女は本当にバカなのでしょうか？

彼女は田舎育ちで世間知らずです。また、單純でお人よしな性格のため他人や物事を疑う術を知りません。だから一般常識のある人から見れば相当バカな人間に映るはずですが、しかし、物語を見ればわかるように時に近代哲学に通ずるような深い内容のことを言ったり考えたりすることもあります。彼女はほとんど何も知らない人間です。だからこそ先入観に囚われず、物事の本質を見抜くことができます。だからこそ先入観に囚われず、物事の本質を見抜くことができるのかも知れません。すなわちその單純さ、純粹さ故に物事の本当の姿を見る能力にかけては天才と言っても過言ではないでしょう。だからと言って、彼女が天才かと言えばそれも違うでしょう。なぜならば、彼女は世界を表面的にしか見ていないからです。様々な現象や理論の奥深くは見ておらず、表面的なところだけからその本質を見抜こうとするのです。ですから、彼女が言う「本質」と我々の思う「本質」は全く異なるものになるのです。よって、これから総合的な結論を言えば彼女が天才かバカかは我々の「天才」「バカ」という概念では計れず、彼女はそのどちらでもないとなってしまうのです。

…もしかしたら、彼女は我々とは全く違った次元を生活している人物なのかも知れませんか。

出会いの章 第五部 闇の発端（前書き）

執筆一周年にしてようやく10話目です。更新が遅くて数少ない読者の皆様には大変申し訳なく思っておりますが、ノスタルジアが完結するまではもう少しこのペースにお付き合いくださいませ。…お願いだから見捨てるなんていわないで（苦笑）

出合いの章 第五部 闇の発端

「いたぞっ！あそこだ！とまれその…」

「やかましい！喰らえっサnderボール！！」

バチバチバチー！！

「うぎゃあ！」

エンドラーズの放った電気の球が、走っていた3人の目の前に現れた4人の兵士を吹き飛ばした！

「さすがエンドラーズ！派手にやるね」

イチが走りながらそう手を叩いて言った。

「学校では人間相手に使うなって言われてたからな。一度やってみたかったんだよな」

エンドラーズは上機嫌にそう笑う。

「何呑気な会話してんの！早く出口を見つけて脱出しないといけないつてのにもう！」

リリアが能天気な二人にそう激を飛ばした。

三人が地下牢を脱出してから十分が経過しようとしていた。石造りの薄暗い廊下の中、三人はエンドラーズの魔法攻撃で敵側の兵士達を蹴散らしながら砦の出口を探す。幸い、深夜であつたため警備は手薄のようである。正直、この時は三人ともこのまま順調に砦から脱出できると考えていたのかも知れない。しかし、そんなに甘いものではなかったことを三人の少年少女は後々知ることになるのである…！

《ヴォルガノンの部屋》

「ええい、ただかガキ3人に何を手間取っている！さっさと捕らえんか！」

イチ達の脱獄の知らせを受けてヴォルガノンは兵士達に彼女らを捕らえるように命令していたが、うまく捕らえられない現状にイライラしていた。

「そ、それが…魔法使いらしき人物がおりまして我々はことごとく…」

報告に来た兵士がそうヴォルガノンに言った。

「この役立たず共め！もうよい、この俺様が直接出向く！」

ヴォルガノンはそう乱暴に吐き捨てると部屋を早足で後にする。

「…おのれ、下等生物共め。我々との力の差を思い知るがよい…！」

《ロゼリアーヌの部屋》

「…起きていますかロゼリアーヌ様？」

「…当たり前だ。うるさくて眠れやしない」

サジの問いかけにロゼリアーヌはそう答えた。

…ここは砦の客室。ロゼリアーヌは下着姿に薄い掛布団を身にまといベッドの上に横たわっていた。そして、サジは近くの机の上いつもの持ち運び式の可愛いベッドを置いてその上に寝ている。部屋の照明は全て消されていたが、窓から差し込む星と月の光で部屋の中はお互いの姿が目視できる程度に薄明るくなっていた。砦の中が妙に騒がしくて寝られない2人ではあったがその理由を知っていたので特別驚きはしなかったし、別段起き上がるつもりもないようである。

「…なあ、サジ」

「はい？」

「運命って信じるか？」

「そうですね…半分半分と言ったところでしょうか？運命はあると思います、それを形作るのは本人だとそう思います。何故そんな

ことをお聞きに？」

「…いや、なんでもないんだ。もう寝よう」

「そうですか…おやすみなさいロゼリアーヌ様」

「おやすみ」

そう言つてサジは首まで布団を被ると蚊の鳴くような小さな可愛らしい寝息を立てて眠りについた。…しかし、ロゼリアーヌは相変わらず眠れなかった。そして、別にそれは皆が騒がしいからではなかった。彼女には考えることが多過ぎた。元々考え事の好きな彼女ではあつたが、夜寝る前に考え事をして眠れないこともしょっちゅうあつた。昨日のこと、今日のこと、明日のこと…考えることは山ほどあつたが、今彼女が一番気にしているのはイチのことであつた。彼女は出会つた当初からその白金色の髪をした少女に違和感を感じていた。別にそれは彼女の容姿や性格が変わつていたからではない。彼女自身にもよくわからない、何かもつと深いところで曖昧で複雑なものを感じたのである。それがどんな感情なのかはよくわからない。しかし、彼女がイチにかまけているのは確かであつた。何故か彼女はイチを失いたくなかつた。だから、今回も従者^{サジ}を通してではあるが脱獄の手引をしたのである。それはもしかしたら、人間誰しもが心に持つ『興味感心』に近い感情がイチに対して芽生えたのかも知れない。どうしてそんな感情が芽生えたのかはわからない。でも、イチがそれだけ普通の人間とは『何処か』違うことだけは確かなようであつた。彼女はイチが何者なのか…それを見定めたいと思つているのだ。

「…わたしはどうかしている。たかが人間の小娘に振り回されるなんてな…」

…そう呟くと、彼女は静かにその深紅の瞳を閉じるのであつた…。

「ねえねえエンドラース」

「ん？なんだ？」

「ぼく達さつきからここに連れられて来た道とは違う道を走っているけど…なんで？」

「あのな、正面の出口から出るバカが何処にいるんだよ？こうゆう場合は裏口を探して出るのが常識なんだよ」

エンドラースがそう呆れて言った。

「あつ、なるほど」

「でも…肝心の裏口が何処にあるか分かるのエンドラース」

リリアがそう聞くと、

「…知らん」

エンドラースはそうキツパリと答えた。

「はー…絶望的ね」

リリアはそうため息をつく。

三人は相変わらず薄暗い通路を駆け足で進んでいた。幸い、兵士達にはあまり遭遇しなくなってきた。通路自体も狭く作りが乱雑になりつつあり、あからさまに砦の裏側であることには間違いはなさそうである。

「それよりもさリリア、ちょっと聞いていいか？」

「何よエンドラース、こんな時に？」

「さつき捕らえられた時に何人かの兵士がお前のこと姫だとか何とか言ってたけど…何でだ？」

「ああ、言ってなかったっけ？私実は…」

リリアがそう言いかけた時だった、先頭を走っていたエンドラースが急に止まった。後続を走っていたイチとリリアが慌てて急ブレーキをかける。

「え？どしたのエンドラース？」

イチがそう聞くと、

「…まずったな」

エンドラースが眼光鋭くそう答える。…その視線の先には漆黒の鎧

で身を固めた大男が立っていた。

「ほほう…まさかここまで無傷でたどり着くとはな。人間ながら素晴らしいことよ」

大男はそう人間のものとは思えないような不気味な声で語りかける。まるでフルフェイスの兜から覗く赤い瞳が、こちらを見下すように。

「ヴォルガノン…」

「知っているのかリリア？」

「ええ…この辺り一帯の侵略と管理を帝国政府から任されている奴よ。…そして人間じゃない」

「は！？」

その言葉にエンドラーズは驚く。

「ふはは、これはこれはアラカイトの姫君。よく知っているな」

ヴォルガノンは笑いながらそう言う。

「ねえねえ、ぼく達裏口を探してんだけど…知らない？」

イチがそうヴォルガノンに聞く。…どうやら、彼女にとっては相手が誰であろうとあんまり関係無いらしい。

「…ほう、そうかこいつが例の…裏口ならこの先だ。だがそこにお前達がたどり着くことはない。ここで死ぬのだからな」

ヴォルガノンはそう吐き捨てる。

「野郎！魔法使いをなめんなよ！サンダーボール！！」

怒ったエンドラーズが呪文を唱えると、黄色い電気を帯びた弾がヴォルガノンに向かって一直線に飛んで行く！

「…やれやれ、なんと醜い悪あがきを」

そう言っただけヴォルガノンが右手をかざすと、なんと弾は軌道を180度変えてエンドラーズに向かってきた！！

バリバリバリー！！！！

「うわぁー！！」

エンドラーズの体には物凄い電撃が通り、彼は地面に叩きつけられ

てしまった。

「エンドローズ！」

イチとリリアが慌てて彼の元に駆け寄る。

「だ、大丈夫？」

イチがそう心配そうに聞くと、

「へ、へえきへえき。だいしょうぶあよ」

と、しびれて呂律が回らないながらも左手の親指を立ててそう言った。

「この！よくもエンドローズを！」

イチはそう剣を抜くとヴォルガノンに思い切り切りかかる！

「ふん、愚かな…」

ガキイイイン！！！！

「うわあ！」

勢い良く切りかかったイチではあったが、ヴォルガノンの右手にいつも簡単に跳ね飛ばされてしまった。

「いてて…むー、あいつ強いなあ」

イチが頭を撫でながらそう言う。

「バカ！あいつはそんじょそこの連中とはわけが違うの！」

リリアがそう言った。

「ふはは！その通り。俺はお前ら下等な人間とは違うのだよ。…さて、遊びは終わりだ…死ね！！」

そう言うて呪文を唱えると、ヴォルガノンの左手から三人に向かって炎の弾幕が無数に飛び散る！！

「そうはさせないわ！」

リリアがそう言うて両手をかざすと、淡い光の壁が三人の目の前に現れた！炎の弾幕は全てその光の壁に当たって碎け散る！

「ちっ…」

ヴォルガノンが舌打ちする。

「あんまり一国の姫をなめない方が良いわよヴォルガノン？」

リリアがそう挑戦的な笑みを浮かべながら言った。

「ほざけ！人間風情がこの俺に勝てると思ってるのか」

ヴォルガノンがそう怒鳴る。

「…なんだか言っている事がちんぷんかんぷんだよ」

「ああ、俺にもさっぱりだ」

リリアとヴォルガノンのやり取りの後ろで、イチとエンドラースは首を傾げる。

「悪いわねヴォルガノン、今あなたと殺り合っても勝ち目は確かにないわ。だからここは一度引かせてもらうよ」

そう言って、彼女はスカートのポケットから何か丸いものを取り出した。

「イチ！エンドラース！走って！！」

そう叫ぶとリリアはその丸いものを地面に投げつけた！その瞬間、薄暗かった廊下を凄まじい閃光が迸る！！

「ぐわあ！閃光弾か！！」

物凄い光のせいでヴォルガノンの視覚は一瞬奪われてしまった。：

誰かが慌しく走り去る音が廊下を木霊する。

「ぐおお…おのれ、小癪な真似を…！！」

ヴォルガノンがようやく視力を取り戻す頃にはもう誰もいなかった。悔しさのあまり彼は思い切り壁を殴りつける。壁は抉られ、瓦礫が崩れるような音が砦中に響き渡った。

「おのれえ人間共の分際で…奴ら、絶対にとっ捕まえて腸を抉り出してくれる…！」

禍々しいオーラを放ち、ヴォルガノンはそう齒を食い縛り拳を地面に叩きつけながら言うのであった…。

出会いの章 第五部 闇の発端（後書き）

小説を書き始めてから一年半が経とうとしております作者ではありませんが、相変わらず難しい作業ですね執筆は。特に未だに情景描写が書けない。戦闘シーンとか頭抱えちゃいます。後で自分で読み返してみても明らかに地の文章が少なくて説明不足だなあとつくづく感じます。人気作を読んでもとやっぱりそこところが桁外れに上手いです。ストーリーやキャラクターがよくてもなかなか人気出ないもんですよねやっぱり（泣）日々精進です。

出会いの章 第六部 動き始めた歯車（前書き）

今回はこれからの物語の導入部分とゆうことでやや短く抽象的な話となっておりますが、重要な表現もたくさんあると思いますのでぜひ最後までお読みいただければ幸いです。相変わらず更新のスピードは遅いですが、なにとぞノスタルジアが完結するまでにご辛抱くださいませ。

出会いの章 第六部 動き始めた齒車

「…全て正常値。特に問題は無いようだな」

口髭を生やした軍服の男がそう言う。

「当たり前だ、わたしを誰だと思っている？」

腕や頭に様々な計測用の機器をつけ、診療台の上に寝ているロゼリアーヌがそう答えた。

ここはナタリア帝国の首都インベリス郊外にあるコロツサル直轄の研究所。主に生物を扱った研究がされている。表向きは新たな遺伝子治療などの開発をする国家機関だが…実は裏では秘密裏に違法な人体実験や合成獣^{キメラ}の作成、生物兵器の研究などが行われているのである。今は月に一度行われるロゼリアーヌの健康診断の最中である。

「いつもは嫌がる検査の日だとゆうのに今日は妙に機嫌が良いなアゲハ。何か良い事でもあったのか？」

「いや、最近ちよつと面白い玩具を見つけてね…こないだもそいつがやらかしてくれたんでね。それよりも、まずはクーデターの成功と政権を掌中に収めたことおめでとう」

そう、先日コロツサルが起こしたクーデターにより国王は殺され新たな軍事政権が誕生していたのだ。無論、軍部相手に誰も批判をすることはなかった。

「ふふ、人間から主導権を得ることなど造作もないこと。明日からはこの俺がこの国^{ナタリア}の最高指導者だ。…お前の玩具、イチとか言ってたな、2日前のマートレーの脱走の件か…ヴォルガノンも追っ手を出している頃だが」

「だろうね、奴とどこまで対等できるか…見物だとは思わないかコロツサル？」

「そんなことに興味は無いさ。それよりも、一緒にいたアラカイトの姫がどう行動するのか…気になるところだ」

「…また仕事か？」

「ふふ、まあ近くな。…いいか、何のために俺がお前を創ってやったのか…それを忘れるなよアゲハ」

「はいはい、覚えておきますよお父様…なんて」

ロゼリアー又はそう少し皮肉を込めて言うのであった…。

《アラカイト南側国境付近》

「うゝ、なんだかだいぶ寒くなってきたよう」

バギーの後部座席でイチが手の平に息を吹きかけながらそう言う。彼女の白金色の髪を枯草色の平原の乾いた冷たい風が撫でていく。

「マートレーからもうだいぶ北へと進んできたからなー…で、アラカイトまではあとどれ位なんだよりリア？」

助手席のエンドラースが、隣の運転席でバギーを運転するリアにそう尋ねる。

「もう少しよ。この平原を越えたらアラカイトの領土だから…幸い、この辺りはナタリア帝国の支配もまだ曖昧だから比較的安全なの」
リアがハンドルを動かしながらそう答えた。

三人がマートレーの砦を脱走してから3日が経とうとしていた。脱走の際に運良く見つけたバギーに乗った三人は北方の大国、アラカイトを目指して一面の枯草が広がる寂しい荒野を北へと走っていた。
「…にしてもなあ、まさかリアがアラカイトのお姫様だったなんてな。初めて聞いた時には驚いたぜ正直。なんでもっと早く教えてくれなかったんだよ？」

「ごめんね、隠すつもりはなかったんだけど…色々あって話しそびれちゃったのよ」

「でもさ、リアあって全然お姫様って雰囲気じゃないよね。ぼくのイメージだともっと可憐と言うかなんと言うか…」

「ふふ、そうね。でも私みたいに親の言うこと無視してテロ活動するようなお姫様も中にはいるのよイチ」

リリアが苦笑いしながらそう言う。

「親って…要は国王とその妃だろ？大丈夫なんかい一国のお姫様が勝手に国外にテロ活動なんかに行っちゃって」

「そうね…お父様はお怒りになるでしょうね当然。でもね、死んだ母さんが言ってたの。人のために生きなさいって…これはこれで母さんの、つまりは私の意志を実行しただけ。後悔はしない」

「…そっか、お気楽魔法使いと違って姫君ってのは大変なんだな」
エンドラースが今にも雪が降り出しそうな薄明るい曇り空を見上げながら言った。

「…そう言えばさ、昨日からラジオが変な事言ってるけど…どうゆうこと??」

イチが話題を変えるようにそう質問する。どうやら、鈍感な彼女とて暗い空気を察する能力くらいはあるようだ。

「それな、なんだかナタリア帝国でクーデターが起きたらしいぜ？ホントかどうかは知らんが」

エンドラースがカーラジオのチャンネルをいじってみる。…が、もうだいぶ町から離れてしまっていて電波が入らないようだ。雑音だけが虚しく響く。

「…きつと大変なことが起こるよ。私にもまだわからないけど、アラカイトに着いたら詳しく説明できると思う」

リリアが厳しい表情でそう言う。

「泉の精霊さんも同じようなこと言ってた、何か嫌な予感がするって。あと…この世界の住民ではない『誰か』が魔物を操っている…みたいなことも」

イチが泉の精霊の言葉を思い出しながらそう口にする。

「もしかしたら、俺達は何かとんでもない事に巻き込まれかけているのかも…いや、既にその環の中に入ってしまったているのかも知れないな…」

エンドラースが神妙な面持ちで言う。

…いつしか、空から小さな粉雪が静かに降り始めていた。乾いた風が粉雪を躍らせる幻想的な荒野の中をバギーはただ黙々と北の大地に向けて進んでいくのであった…。

出会いの章 第六部 動き始めた齒車（後書き）

《この世界の環境条件》

この世界には大きな大陸が一つ存在するだけで、他の島などはほとんどありません。陸地は全体の30%ほどで、海と陸が完全に二分化した極端な世界だとも差し支えないと思います。赤道付近、中緯度付近には豊かな森が広がっていて安定した気候が保たれています。四季はあまりハッキリとはしておらず、植物や動物の種類は土地の違いによって異なることが多いようです。中緯度、高緯度には草原や荒野が広がり、極地には僅かですが氷河が存在しています。比較的安定した生物にとっては暮らしやすい環境がこの時代には広がっていたのです。

出会いの章 第七部 檻の中の獣（前書き）

前回からだいぶ空いてしまいましたが一と更新できました…すい
ませんorz

それでは早速どうぞ！

出会いの章 第七部 檻の中の獣

「うーむ…国政が切羽詰っているこんな時にリリアはいつたい何処をほつつき歩いておるのだ！？城を勝手に抜け出しておいて一週間も帰らないとは！」

…ここはアラカイト国の中心、城下町ポリーを見渡す丘に建つフアルト城の謁見の間である。そこにある玉座の前を、金の王冠クラウンをかぶった中肉中背の男が怒ったような心配したような、何とも複雑な表情を浮かべながらウロウロ歩き回っていた。

「まあまあ、カタル様。姫様のことですじゃ。そのうちひょっこり帰って来ますよきつと」

脇に居た小太りの大臣らしき人物がそう宥める。

「それと昨日捕らえられた獣人の件ですが…」

大臣が続けて言うと、

「ああ、昨日のか。それは相手の言い訳を聞いてから適切な処分を下すことにする」

別にどうでもいいような素っ気無い返事を大臣に返す。カタルはどつやら今は愛娘リリアのことで頭がいっぱいで、地下牢に閉じ込められている獣人のことなど考えている暇はないようである。

「はあ…リリアは死んだ妻とは違って、えらいおてんば娘に育ってしまったものだ。もう少し一国の姫としての自覚を持ってもらわなければ困るのだな…」

カタル王がついついそんな愚痴を漏らしている時であった。突然謁見の間に一人の若い兵士が息を切らせて飛び込んできた。

「で、伝令！ポリーで姫様を発見したとの情報が！現在こちらに向かっているそうです！」

「何！？そうか、ようやく帰ってきたかあのバカ娘が！わかった、わしもすぐに下に降りる」

兵士の知らせを聞いたカタルは顔色を変えて駆け足で二階にある謁

見の間を抜け出し、城の正面玄関へと向かって行つた。

《ファルト城の地下牢》

「……コラー！昨日から水も飯も抜きとはどーゆーことだー！おーい、あたいの言う事が聞こえないのかー!?」

……返事は無い。その高くて澄んだ叫び声がただ単に虚しく暗い空間に木霊するだけだ。

「う……くっそー、二足歩行の猿共め……！出せっ、今すぐここからあたいを出せ……！」

狐のようなその人物は飛び跳ねて喚いてみるが、当然その言葉に答えるのは相変わらずぼやけた木霊だけである。

ここは城の地下牢、石で作られた壁がむき出しの暗くて冷たい牢屋には一匹の小さな獣人が捕らえられていた。身長は100cmあるかないかで半ば金色に近い薄い茶色のショートヘアー、同じく薄い茶色をした大きな三角形の耳は顔よりも大きくフサフサとした尻尾はまるで狐のそれを思わせる。鉄格子のはめられた小さな窓から差し込む光を受けた瞳は金色に輝き瞳孔は比較的細長い。八重歯は鋭く尖って少し大きく爪も短いが鋭い、まるで肉食獣のようである。何処かの民族衣装のような変わった服を着ているが、少し砂や泥でついた汚れが目だっていた。

「ハー、ハー……だ、ダメだ。呼べど叫べど誰も相手にしてくれない。これじゃあ、腹が減る一方だよ」

さすがに疲れ果てたのだろう、彼女はその場に座り込んでしまった。「白馬の王子様でもロバに乗ったジジイでも誰でも良いからここから出してくれないかな……そうでなきゃ野蛮な人間共に毛皮にされちゃうよきつと」

そう言つて彼女は天上を見上げる。……虚しい暗闇だけが彼女を見下ろしていた。

《姫の帰還》

「ほえ、あれがリリアの家？大きいというか何と云うかお城だね」
大きな馬車の荷台に揺られながらイチが目の前に見えてきた城を見て言う。

「そう？私には普通の実家にしか見えないんだけど」
「よく言っぜ。これだから姫様つてのは…」

リリアの発言に貧乏性のエンドラーズがそう愚痴をもらす。

アラカイト国内に入った三人はいくつかの小さな村や町を経由してこのポーリーの町にやってきた。そして、町で非番をしていた兵士にリリアが城までの送迎を頼んで今に至っているわけである。

「…で、きつとカンカンに怒っているだろう王様になんて良いわけすんだよりリリア？まさか俺達が土下座しろなんて言うんじゃないかな？」

「何よ、そんなことさせるわけないでしょエンドラーズ。城を抜け出した理由はゲリラの活動に参加することだったけど、そんなことを言う訳にもいかないし適当に私が誤魔化すわよ」

「ぼく達のこととはどう説明するの？」

「心配いらないわ、とにかくあなた達は黙ってて。余計なこと喋ると話が拗れるから」

「なんだよその言い方…お姫様は俺達に喋るなって言ってるぜイチ？」

「え、いいんじゃないの？楽だし」

「…あ、そ…」

「ふふ、どうやらイチは貴方^{エンドラーズ}と違って素直なみたいね」

「ちえっ、面白くないの！」

そう舌打ちをすると、不機嫌になったエンドラーズは荷台の積荷に

もたれ掛かって不貞寝を始めた。

「あらら…エンドラースって意外と子供っぽいんだね」

「はははっ、それを聞いたらさぞかし怒ると思うよイチ」

イチの一言にリリアが思わずそう笑ってしまったのは言うまでもない。

やがて三人を乗せた馬車は城の門までたどり着いた。既に連絡を受けていたのだろうか、普段は固く閉ざされているはずの防護門が口を空けて待っていた。そこを潜って花壇と噴水で飾られた前庭をしばらく進んでいくと、そこには数人の兵士と共に王冠をかぶった人物が立っていた。

「リリア！このバカ娘が、今まで何処に行っておったのだ！？」

「お父様…。ど、何処に行ってただろうが私の勝手でしょ！？私だってもう子供じゃないんだから！」

憤慨した様子のカタルに対して、リリアが馬車の荷台から飛び降りてそう反撃する。

「なんじゃと、それが父親に対して言う台詞か！？」

「何よ、今まで国のことばかり考えてるくに家族のことなんか考えたこと無いくせに！今までに私に父親らしいことしてくれたの？…イエスとは言わせないわよ」

「ぐ…」

さすがのカタルも、リリアの物凄い剣幕にタジタジのようである。どうやら彼女の言う事が正しくて、自分でもこれ以上釈明の余地がないと思ったのだろうか。

「ま、まあまあ二人共。よかったではないですか王様、姫様が無事に帰ってきてくださって。それだけで何よりではないですか」

険悪な雰囲気をなんとか和ませようと、そばにいた護衛長らしき兵士が仲介に入る。

「そ、そうだよ二人共！こうゆうのって後の祭りっていうじゃん？

…、あれ、ばく何か変なこと言った…のかな？？」

…同じく場を和ませようとして荷台から降りてきたイチの会心の珍

回答に一瞬周囲がしらけた後、

「えーと…リリア？こちらの方はどなたかな？」

カタルがそうリリアに聞いた。

「え、ああ、この人はイチ…で、そっちの荷台で寝ているのがエンドラーズよ。二人共私がここまで来るのをサポートしてくれたんだから歓迎してあげて」

「おお、そうかそうかあなた方がリリアを…ようこそファルト城へ、私は国王でリリアの父親のカタルと言います。歓迎しますぞ。ささ、この方達も一緒に城の中へご案内するのじゃ」
カタルがそう言った。

「…というわけだから、イチはエンドラーズを起こして先に行つてよ。お父様のお説教受け手から夕食までにはまた会えると思うから」

「リリア…お姫様つてのはみんなこんな嘘つきで臨機応変なの？」

…イチがリリアの立ち振る舞いに苦笑いしたのは言うまでもない。

《純水無垢と天邪鬼》

「あーあ…退屈だな。こんな広い部屋にフカフカのベッドじゃ落ちて着いて眠れないよ」

時計が午前二時を指す頃、イチは半袖短パンとゆう軽装でベッドの上に仰向けになって天上を何を考えるわけでもなく眺めていた。

ファルト城でのイチ達に対する持成しは凄かった。イチとエンドラーズには豪華な部屋を一人一部屋ずつ用意され、お付のメイドさんまでいた。だから夕食までの時間、何一つ不自由なく二人は快適に過ごすことが出来た。ちなみにイチは部屋に置かれた珍しい時計やら置物やらを不思議そうにひたすら眺め、エンドラーズは可愛いメ

イドさんと話して満足した後に昼寝を楽しんでいたようだ。夕食は別室の大きなテーブルを王様やリリアと囲んで一緒に食べた。その席で王様は上機嫌でこのアラカイトの歴史について語ってくれた。意外と博識なエンドラーズはその話を熱心に聴いているようだったが、歴史に興味の無いイチには何を言っているのかさっぱり解からなかった。それよりも、カタルに説教されたであろうリリアが不機嫌な様子で一言も喋らなかったのがイチにはとても印象に残ったようである。食後のイチは再び部屋に戻って置物をいじってみたり窓から望む城下町^{ボリー}の夜景を楽しんでいたが、やがてそれにも飽きてしまつて今に至っているわけである。

何とか眠ろうと彼女も目を閉じてはみるがやはり頭が冴える。…こ
うなるとイチの悪い癖が出る。

「エンドラーズは人の家だからあんまり出歩くなつて言つてたけど…
ちよつとくらいなら問題ないよね、誰かに見つかつてもしトイレの
一言で解決だもんね」

イチは興味で動く人間だから、初めての場所を探検せずにはいられないタイプ。こうなるのは当然と言えば当然かも知れない。彼女はベッドから飛び起き、おやつ代わりにテーブルの上にあつた美味し
そうなりんごを一つ手に持つと足取り軽く部屋の外へと繰り出して
いった。

「ほえ、何と言つても広いね。…ちゃんと部屋に戻るか不安になつてきたよ」

当然、多くの人は就寝している時間だから人影も無く廊下も消灯され薄暗かった。所々部屋から明かりが漏れていて、イチはそのわずかな明かりを頼りに進んで行つた。部屋の立ち並ぶ二階から階段を下り、一階もウロウロしてみたが特に彼女の興味を引くものは見つからなかった様子。

「うーん…別に変わった所はないなあ…そうだ、あそこは？昼間から気になっていたんだよね」

彼女の言うあそこ、それは地下へと続く階段のことであつた。実は

昼間、城の中を案内されている時に一階の裏口近くに怪しい階段があるのをイチはしっかり見つけていたのである。彼女の観察力には何処か人間離れた才能があることは彼女自身も含めて誰も知らないようだが…。とにかくその存在が無性に気になった。

「さすがにあそこは入っちゃいけないような気がするんだけど…まあ、誰も見張りがいなかったら入っても良いってことにしようか、うん」

そう都合の良い解釈をして、彼女は目的の場所に向かった。幸いと言うかなんと言うか、そこには誰もおらず地下へと続く石の階段がポツカリと暗い口を空けていた。

「…暗い…けど全く見えないってわけでもなさそう」

そう、今宵は満月の日。だから妙に月が明るくそれが彼女の視覚を助けてくれた。そんな窓から差し込む月光を頼りに、彼女はその階段を一步一步慎重に下りていく。そして、階段を下った先では不思議な光景が彼女を待っていた。

「なんだろうここは…牢屋…？」

半分地下に埋まった感じで設置されている牢獄の高い所にある窓からは月の光が差し込み、牢獄内にいくつもの光の帯を形成していた。一見すると、それはまるで神々しい光が差し込む神聖な神殿のようにも見えるほどイチの瞳にはそれが美しく移った。

「…おい！そこに誰がいるのか！？」

イチが差し込む月光の美しさに見惚れていると、誰かがそう呼びかける。

「へっ！？見つかったかな…」

彼女が驚いてキョロキョロしてみると、一番奥の牢屋から小さな肉球のついた猫のような犬のような手が手招きしているではないか。

「あ、あれ？何だろう…？？」

イチが恐る恐るその檻の前まで行ってみると…そこには小柄な獣人がいた。

「わ！犬だ！」

「だつ、誰が犬だよこのマヌケな猿めっ！ちゃんと見るちゃんと！フエネックって知らないのかよ…」って、お前誰だ？城の人間じゃなさそうだけど？」

イチを見て獣人はそう問いかけた。

「ぼくはイチだけど…えっと、今日はいちおうリリアのお友達として城に…」

「はいはい、長い説明はいらないよ。要は客人ってわけか、気楽で良いねえ人間は」

「え、まあそうゆうことだけど…君は？」

「あたいかい？あたいはオニクス、見たまんまの獣人さ」

「獣人？獣人ってあの…」

「そうさ、この世界の真の住人。人間や魔物がこの世界にやってくる前からこの世界に君臨する誇り高い民族さ」

「いや、まだぼく何も言って…」

「それが今じゃこのザマだよ！ちよつと店先の鶏に手を出したらこんな所に放り込みやがって、畜生め。人間のくせに生意気なんだよ、キッッ！」

オニクスはそう地団駄踏んで悔しがる。

「とにかく落ち着いてよオニクス。歴史的に見て獣人が人間嫌いなのはわかるけど、人の物を勝手に取ったりしたらダメでしょ？」

「だー、気安く名前を呼ぶな人間！そもそもだ、あたい達の家である森や草原を開拓するからいけないのであってあたいは何も悪く…」
「そこまで熱弁したところで、オニクスの視線があるものに釘付けになった。…視線の先にはイチの手に握られた一個のリンゴが。」

「…え、リンゴがどうかしたの？」

「そ、それを…いや、相手は人間だしいくらなんでもそれはあたいのプライドが許さな…」

「食べたいならあげるよ。はい、どーぞ！」

「はい食べますっ！ぜひいただきますっ！」

もはやオニクスのプライドは何処へやら。鉄格子越しにイチからリ

ンゴを奪うように受け取ると貪るようにそのリンゴを食べる。

「バリバリムシャムシャクシャク…ゴックン…ぷはー！ありがとうな人間、おかげで生き返ったよ」

「いえいえ、どういたしまして」

「…って、勘違いすんなよ。あたいは決して人間にお礼など言わないから！」

「え、今ありがとうって言ってなかった？」

「う、うるさい…気のせいだ、うんきつとそうに違う」

オニキスが恥ずかしそうに勝手に自問自答して頷く。

「ねえねえ、尻尾触らせてよ！なんかフサフサで気持ち良さそう」突然、イチがそう言いだしたのでオニキスは驚いて尻尾を自ら抱えてこう言い放った。

「はあ！？急になんてこと言うんだこの毛皮らしい…じゃなくて、汚らわしい人間め！お前らに触らせる尻尾なんてあるかつ」

それでも、どうしてもそのフサフサとした尻尾が触りたいイチは…「えゝ、ケチだなもゝ…せっかくリンゴあげたのに恩知らずな人だなあ」

と、意外と良心的だと見たオニキスにカマを掛けてみる。

「け、ケチ…恩知らず…！？そんな風に言われるとあたいの良心が揺らぐじゃあないか」

案の定イチの言葉がよっぱど気に触ったのか、オニキスはこんな事を提案した。

「よ、よしじゃあこうしようよ。あたいをここから出してくれたら尻尾触らせてあげるよ」

「出すって…どうやって？罪人として捕まっているのに？」

「それは何とか考えてよ…とにかく、出してくれないことにはあたいは人間じゃないしどんな仕打ちを受けることが…」

先程とはうって変わって深刻な表情を浮べるオニキスを見て、

「うゝん…わかった。何とかリリアに相談してみるよ」

イチも彼女の解放に協力することにしたようだ。

「さっすがイチ！やっぱり普通の人間とは違って見所がある奴だと思っっていたよ！」

オニキスはイチを煽てるつもりでそう言ったのだが、イチの口からは思いもよらない言葉が返ってきた。

「…ああ、やっぱりそうなんだね。みんなぼくのことを『普通』とは言わないんだ…」

「え？」

「あ、ごめん。何でもないんだ、独り言だよ独り言！じゃね、また明日できたら会おうねオニキス。…おやすみ！」

そう言っただけイチは笑顔で元来た道をやや駆け足で戻って行った。

「なんだろう…あたし何か傷つくこと言ったのかなイチに…」

…その夜、オニキスはさっきイチが一瞬だけ見せた悲しげな表情と『誰もぼくのことを普通とは言わない』とゆう言葉が気になって眠ることができなかった。

彼女が言ったその言葉に、一体どんな意味が込められているのだろうか…？

出会いの章 第七部 檻の中の獣（後書き）

いかがでしたか？

今回も意味深な感じで終わってしまいました。次回は波乱に満ちた展開を予定しておりますのでお楽しみに。最後にリリアの簡単なプロフィールを添えて終わりにさせていただきますと思います。今回も本作品を読んでくださってありがとうございました。

リリア

性別：♀

身長：160cm

職業：アラカイト国の王妃

髪色：ブロンド

少々気の強いところはあるが基本的には優しく気も利く良い娘である。多少の魔力を持ち初級レベルの簡単な魔法なら使える。武器の扱いにも長け、意外と戦闘能力は高いようだ。常識や歴史などに精通する文化人でもある。

出合いの章 第八部 悲哀の奇襲（前書き）

前作の更新から何日経っているんだよって感じですが、何とか更新することができました。本当に更新が亀ですいません…諸事情諸々ありまして（見苦しい言い訳ですね）。その分、長めの文章となっておりますのでじっくりと時間をかけてお楽しみくださいませ。今回もこの小説を読んでくださる読者の皆様には感謝の意をお伝えしたいと思います。いつも本当にありがとうございます、そしてこれからも末永くお付き合いください。

出会いの章 第八部 悲哀の奇襲

…夜明けまで数時間、雲の上をアラカイトを目指して飛行する一隻の飛行艇の姿があった。その大きな船体には無数の武器が装備され、中には多くの兵士と飼い慣らされた魔物モンスターが乗っていた。…そう、これからナタリア帝国によるアラカイト国奇襲作戦が実行されるのである。奇襲の対象は首都ポリーリーの王城である。無論、奇襲であるから大部隊ではなく小規模な部隊で挑むわけだが、圧倒的な科学力を持つ帝国側には勝算があった。

…そんな船の展望室で何やら話をする人物達がいた。

「間もなくポリーリーの上空に到着する。作戦は夜明けまでには終わらせたいからな、爆撃で町中を混乱させてから城の近くに着陸して兵と魔物を投入して終了さ」

ヴォルガノンがそう得意気に言う。西方の軍事戦略は広く彼が担当しているのだ。

「おいおい、わたしを忘れるなよ。アラカイト王の抹殺はわたしが直接殺るようにコロッサルから支持を受けている」

ロゼリアーヌが鋭く指摘する。

「はは、人妻がご苦労なこつたなロゼリアーヌ。どうやら俺は信用されて無いらしい」

「黙れヴォルガノン、確かにカエサルは軍の関連施設でデスクワークしているがわたしがこんなことをしているってのは知らんのだよ」
ロゼリアーヌは少し不機嫌そうに舌打ちした。

「そう言えばロゼリアーヌ様は最近お忙しいですし…本当はカエサル様がいなくて寂しいんじゃないですか？夜の営みもご無沙汰みたいですし…」

ロゼリアーヌの肩に乗っていたサジがそう冗談交じりに言うと、

「…おや、何なら切り刻んで性交前の酒のつまみにでもなってみる

かサジ？」

作り笑いとししか見えない不適な笑みを浮べてロゼリアーヌがそう言った。

「とにかくだ、俺の軍隊が城の衛兵共を食い止めている間に王を殺せ。お前が戻ってきたら兵を撤退させて、最後に城を船で砲撃して全てを消し飛ばしてやる。…これで城に潜むらしい我が秘密を知るグルス殺しの犯人も木っ端微塵にしてやる」

二人のやり取りに興味の無いヴォルガノンがそう真面目な話を無理矢理割り込ませる。

「わかってるってヴォルガノン。気が向いたらわたしが姫やグルス殺しの犯人とされる二人も探し出して殺しておくよ」

ロゼリアーヌは欠伸をしながら二つ返事でそう答える。

「ちっ…相変わらずいい加減なやつだ。お前さんが何を考えているのか俺には理解できんよ」

ヴォルガノンはそう言うのと、展望室を後にしてどこかへと行ってしまった。おそらくは作戦の確認でもしに自分の部屋に戻ったのであろう。

するとサジがそれを待っていたかのように肩の上からロゼリアーヌにこう耳打ちする。

「ロゼリアーヌ様…あの…その…」

「心配するなサジ、イチのことはなんとかするさ。仮にいつかは殺さなくちゃいけないとしても最後に一度くらいは会いたいもんな。…わたしとしても、もう少し様子を見たいと思っていたところだ。何もここで殺す必要はないだろうよ」

サジが質問しようとした内容を、まるで彼女が何を言いたいのか最初から分かっていたような口調でロゼリアーヌはそう回答した。…さすがに15年以上の付き合いと言っか、意思の疎通はかなりできているようである。

「はい、ありがとうございます！」

「礼を言うのはまだ早いさ。その笑顔はイチとの再開に取っておき

な」

「そうさせていただきますよ。…それにしてもロゼリアー又様はよくいつもそうやって格好良い台詞が出てきますね。…あ、もしかしてそうやってカエサル様も口説いたんですか!？」

「…ったく、このお喋り妖精はすぐに調子に乗るんだからな」

「ねー、教えてくださいよロゼリアー又様」

「あーあーうるさい。わたしはこれから少し寝るんだから静かにしな」

そう言つてロゼリアー又は肩に乗ったサジを振り落とすと駆け足で展望室から駆け足で逃走する。

「あつ、ひどい!私をお邪魔虫扱いするなんて!待つてくださいよロゼリアー又様あゝ!」

サジもそれを必死に薄い羽を羽ばたかせて追いかけていった。

…こうして展望室は再び元の静寂に包まれるのであった…。

《奇襲》

「…イチ…おい…起きろつてばイチ!」

突然の大声と体を揺さぶられる振動でイチは目を覚ます。

「う…ん…あ、おはようエンドラーズ…つて、まだ暗いじゃん。何?夜這い?」

「だーっ!そんなわけあるか!…つて、ふざけている場合じゃねえんだよイチ!外を見てみるよ外を!」

エンドラーズの異様な慌てように、イチがベッドから飛び起きて窓の外を見てみると…彼女の目には真っ赤に燃え盛る城下町と城の前に着陸した巨大な飛行艇が飛び込んできた。

「え!?!何…今の状況は何!?!」

「俺にもさっぱりだが、どうやら帝国側の奇襲らしい。爆発音に驚いて飛び起きたらこの様だ。城の外は敵兵と魔物がうじゃうじゃいやがる」

「何だつて！？あ、リリアは？」

「それが部屋に行ってもいないんだ。このままだと逃げ遅れちまう。俺はリリアを探しに行くがお前は どうする？」

「もちろんばくも一緒に……」

そこまで言いかけて、イチはとある人物の存在を思い出す。

「ごめん、ぼくには他にやらなくちゃいけないことがあるんだ。悪いけど、別行動にさせてもらうよ」

「……そうか、わかった。脱出したら町のはずれの丘の上で落ち合おう。気をつけるよ、こいつはせんべつだ」

そう言つてエンドラースは小さな果物ナイフをイチに渡した。

「えー、これだけ？」

「仕方ないだろ、寝起きで着替えるのがやっとだったんだから。……」

お前もそんな薄い寝巻きじゃ風邪引くぞ」

「わかつてるつて、ちゃんと着替えるよ子供じゃあるまいし」

「だといいけどな。……じゃあな、神のご加護を」

「うん、エンドラースも気をつけてね」

会話を終えたエンドラースは走つてイチの部屋を出ていった。……本来ならば色々聞きたいこともあっただろうが、今の状況ではそうはいかない。彼は彼なりの考えでイチを信じて別行動することを決めたようだ。

「……さて、オニキスを助けなくちゃ」

イチは素早くいつものパンツスタイルに着替えると、果物ナイフを片手にオニキスのいる地下牢へと向かった。

「ダメよお父様！早くここから逃げましょう！この状況では私たちに勝ち目はないわ！」

城の上階、謁見の間でリリアがこの場に留まろうとしている国王を必死に説得していた。

「わかっておるさ。…だがわしはこの国の王だ。民を置いてはいけない」

「そんなこと言っている場合じゃないでしょ！お父様がいなくなったら誰がこの国を立て直すんですか！？」

「…リリアよ、お前ももう子供じゃないんだから分かっておるはずじゃ。わしが生きている限りヴォルガンはいつまでもわしを追い続けるじやろう。そばにいれば危険がお前にまで及んでしまう。だがお前さえ生きていてくれれば帝国を倒し、再起を図れるかも知れない」

「お父様…」

「すまないリリア、こんな勝手なわしを…父と呼んでくれてありがとう」

…親子はそう言って涙を流しながら抱き合った。

「…はあ、はあ…こんなところにいたのかリリア」

そんな謁見の間にエンドラズが息を切らして入ってきた。

「エンドラズ！」

「何呑気に家族で談話してるんつか！？さあ、王様も早くここから逃げますよ！」

「…残念だがそれはできない。少年よ、どうかリリアを連れて逃げてくれ、頼む…！」

「え、あ…わかりました。王様がそう仰るのなら…行こうリリア、イチはもう脱出したかも知れないし…さあ早く！」

王様の意図を瞬時に察知したのか、エンドラズは半ば強引にリリアの手を掴んで引く張った。

「嫌！離して！お父様あつ」

泣き叫ぶリリアを、エンドラーズは痛む良心を必死に堪えながら無理矢理に謁見の間から引つ張り出しそのまま廊下を走っていった…。

「…そうじゃ、これで正しかったんだ…」

…砲撃の音と地響きが伝わる謁見の間で、アラカイト王は唇を噛み締めた。

「…おやおや、とつくに逃げ出したかと思ってたのに…偉く度胸の据わった国王じゃあないか」

突然、エンドラーズと入れ替わるかのように黒いドレスを身に纏った長髪黒髪の美しい女性がゆっくりと謁見の間に入ってきた。

「ロゼリアーヌ…！」

カタルは眉間にしわを寄せて鋭く彼女を睨みつける。

「へえ、わたしを知っているなんて光栄だね。さすがに秘密事項には詳しいようだなカタル」

「貴様こそ下調べをだいぶしてきたようだな化物め。…だが、お前の思い通りにはさせんぞ！」

カタルは腰の剣を抜くと猛然とロゼリアーヌに切りかかる！

…しかし、それはあまりにも無謀であった。

「やれやれ、どうしてそう死に急ぐのかね」

そう言つてロゼリアーヌはカタルの振り下ろした剣の刃を右手一本で簡単に受け止めてしまったではないか。カタルがどんなに剣に力を込めてもまるでビクともしない。

「今の世の中、銃の一つでもなきや勝ち目などあるわけないだろう戯けが」

ロゼリアーヌは手の空いている左手の鋭い爪をカタルの右腕に思い切り振り下ろした。彼の右腕はまるで紙の様に引き裂かれ真っ赤な血が噴き出す！

「ギャアアアッ！」

たまらずカタルは後ろに倒れ込み、悲鳴を上げながら無くなった腕

の切り口を左手で押さえる。

「…さて、もうお前に用はない。最期に言い残すことはないか？」
ロゼリアーヌが剣を持ったままのカタルの右腕を投げ捨てながら聞いた。

「ぐあ…黙れ、お前のような化物はくたばるが良いわ」
痛みを堪えながらカタルが薄笑いを浮べそう答えた。

「そうか、それは残念だ」

そう言った次の瞬間にはロゼリアーヌは両手の爪を十字にカタルへ振り下ろしていた。彼の体はバラバラに引き裂かれ、肉片と血飛沫がまるで爆発したかのように辺りに飛び散る。…数秒後には血の海と鉄臭い空気が辺りを包んでいた。まさに地獄絵図のような戦慄の光景が広がる。

「調子に乗るなよ人間、わたしは化物ではない。もっと次元の上な存在だと思いいわるが良いわ。…さて、こんなことで憤慨していても仕方が無い。まだやることがあったのを忘れるところだった」
そう言って、返り血で真っ赤に染まった顔を服の袖で拭いながら彼女は謁見の間を後にした…。

《救出と脱出》

「あわわ…なんだなんだ！？さっきから一体何が起こってるんだ？」
周囲の異様な様相に地下牢のオニキスは牢屋の中を右往左往していた。無論、城内にまだ敵の姿はなかったが獣人属である彼女の鋭い五感はいくらに迫る危機を確実に察知していた。しかし、この監禁された状態では小さな彼女にはどうしようもない。段々と銃撃音と悲鳴が近くへと迫ってくる。

「ふえーん、こんなことだったら鶏肉泥棒なんてするんじゃないかって。冷たい牢屋の中でなんか死にたくないよう。もう悪いことなんか絶対しませんからお願ひ神様許してー！」

オニキスが半ベソをかきながらそう叫んだ時であった、彼女は階段の上の方から誰かが慌しい足音と共に降りてくるのを感じた。最初は武装した恐い兵隊が降りてきたのかと思って背筋が寒くなったが、目を凝らしてよく見てみるとどうも背も低いしどこかで見た感じの人物がこちらに走ってくるではないか。

「はあはあ…あゝ、間に合って良かった！お待たせオニキス、迎えに来たよ」

息を切らしながらイチがそう笑顔で言う。

「な、遅いよこのアンポンタン！待ちくたびれてケツが痛くなっちゃったじゃんか！」

さつきまでの弱気な心は何処へやら、オニキスはそうジャンプしながら怒鳴った。

「あははは、ごめんごめん」

「それよりなんだよこの騒ぎは！？戦争でも勃発したのかいな！？」

「そのまさかだよオニキス。早く脱出しないと兵隊に蜂の巣にされちゃうよぼくたち」

「おいおいマジなのか…それじゃあ早くここから出して頂戴よ」

オニキスがそう言うと、イチはしばらく間を置いてからこう言い出した。

「えつとお…どうやって開けようかこの牢屋の扉？」

「はあ！？お前さん、鍵もないのにここまでノコノコ来たってわけ！？？」

「えへへへ…ごめんねオニキス、そこまで頭が回らなかったよ。今考えるからもうちょっと待ってて」

「かーっ！！何でぼくっ娘ってのはこんなバカばっかしなんだよもう！イチの考えが浮かぶ前にあたいは迫撃砲で狐のグリルになっちゃうよ！」

あまりのお粗末振りに、もうオニキスは頭を抱えてぐしゃぐしゃに掻き毟ることくらいしか出来なかった。

…そんな時であった、

「おや、どうやらお困りのようだねイチ？」

あまりにも突然に後ろから声がしたので、イチはびっくりして思わず振り向きざまに果物ナイフを構えた。そこには見覚えのある、赤目で長い黒髪の女性が立っていた。

「まあ落ち着け、わたしだよ」

「あ…アゲ八さん！」

アゲ八の姿を見て、安心したのかイチは構えたナイフを下ろした。

「え？は？何、あんた達知り合い？」

「うん、そーだよー」

オニキスの質問にイチが答える。

「でも、どうしてここに…？」

「う…ま、まあ気にするな」

オニキスの質問を何故かアゲ八はそう曖昧な答えで誤魔化した。

「石壁に…檻は鉄製か。何のことはない。すぐにお前達の問題は解決するだろうよ。悪いが獣人よ、できる限り壁際に寄ってはくれないか？…さもなければ本当にグリルになるが」

「…あんまり妙なことしないですよ？」

アゲ八が威圧的な態度でそう言うので、オニキスは納得できないまでもしぶしぶ言う通りにした。…オニキスは彼女から漂う不自然な血の臭いがずつと気になっていったが、今はそんなことはどうでもよかったのである。

「んじゃ、風穴でも開けるとするかな」

アゲ八がそう言って、左手をオニキスのいる牢屋に向かつてかざす。そして一瞬、目の前に赤い線光が走ったと思った次の瞬間には凄まじい轟音と地響きと共に真つ赤な光線が牢屋と反対側の壁を貫いていた。立ち込めた砂煙が治まると、オニキスのいた牢屋の鉄柵は溶けて無くなり壁には人一人が通れるくらいの大穴が空いていた。もしこの時オニキスが壁際に寄っていなかったら、それこそ間違いなく狐のグリルになっていただろう。

「あわわわ…な、何すんだよ危ないじゃんかよっ！もう少しで死ぬ

かと思つた……」

目と鼻の先をビームが通つたオニキスが顔を真っ青にして喚く。

「そう吠えるな犬。ほれ、よく見てみる」

アゲハがそう指差す先には、大穴の先にわずかに覗く薄暗い光の円があつた。

「このトンネルを抜ければ城の敷地の外に出られるはずだ。この先身を隠すならハーゲンが良いだろう。遺跡と芸術、それに宗教の町だ。あそこはアラカイトの領地でも端の方だから、軍もすぐには来ないだろうよ。少々遠いが……まあ、マートレーのときみたいに車の一台でもパクれば問題なかるうに」

と、彼女はそう助言した。

「ほえ、すごい威力！アゲハさんって魔法使いなんですか？」

「いんや、違うが……聞いてたのかイチ？」

「え……あ、すいません。あんまりにも驚いてたもんで……」

イチはそうすまなそうに苦笑いした。もつとも、彼女に難しいことをいっぺんに言つても覚えられるはずも無いのだが。

「やっぱリイチはバカだな。大丈夫、あたいが全部聞いてたから。

分かつたらとつとここから出るよ」

そうオニキスが足をトンネルの入り口に掛けながら言う。

「わかつてるよ！オニキス！……ありがとうアゲハさん、このご恩は一生忘れませんね」

「お礼を述べている場合かイチ！……アゲハと言つたな、礼は言つておくけどタイミングの良すぎる登場の仕方とこのあたいを犬呼ばわりしたことは納得できないね。それと、次に会うときにはちゃんと血の臭いは何とかしておくんだな。……行こうイチ、早くここから出よう」

そう言つてオニキスはイチの腕を掴んで半ば強引にトンネルの中に引き込む。

「あつ、待つてよオニキス！」

こうして二人は吸い込まれるようにしてトンネルの奥へと慌しく消

えて行きました。

…オニキスの迅速な行動は、まるでアゲハからいち早く遠ざかりたいと言う気持ちからのようにも思える。実際、彼女はアゲハの異様な感じを恐れていた。

「…どうやらイチにはまだわたしの正体が理解できていないようだな。これからどの程度関わるかは微妙なところだが、もう少しくらいは遊ばないと面白くない。彼女にはこのゲームの敵役になってもらわないとね。あの勘の良い獣人が余計なことを告口しなければ良いのだが…まあいい、なんだか面白くなってきたそうだ」

そう意味深な言葉を嬉しそうに呟くと、ロゼリアーヌは静かにその場を後にした…。

出会いの章 第八部 悲哀の奇襲（後書き）

少しずつですがロゼリアーヌの身辺の様子も明らかになってきましたね。彼女についてはノスタルジアと照らし合わせながら読んでいくと面白いと思ってます。新しい仲間も加わったようですし、次回からは新しい章が始まるでしょう。ここまでは旅立ちと出会いをテーマに書き進めて参りましたが、次章からはいよいよ本格的な冒険が始まります（次回はその準備段階的なお話になると思います）。キャラクター各々の考えや行動に注目しつつ、物語がどう動いていくのか…これからの展開を楽しみにしてくだされば幸いです。

それでは、次回もまたお会いしましょう。

導きの章 第一部 導かれし者達（前書き）

この話から新しい章に入ります。今回は前段階的な内容で主に過去と現在、世界の成り立ちについてなどを述べております。まだ登場してないようなよく分からない名前も多数登場しますが、いずれそれも明らかになると思います。段々内容が複雑化してくるので、少しずつ整理しながら読み進めると良いと思います。ハッキリ言って作者自身も混乱しそうです。何とか頑張ります、はい。それでは、ごゆっくりどうぞ！

導きの章 第一部 導かれし者達

「…で、どうだったのさエンドラズ？リリアの様子は？」

オニキスが怪訝そうにエンドラズに聞く。

「ダメだね。ノックしても呼びかけても反応無し…昼飯は置いてきたから、また昨日みたいに勝手に食うだろうよ」

そう溜め息混じりに首を横に振るのであった。

四人が何とかハーゲンの町にたどり着いてから数日が経っていた。今宿泊しているこの安宿の二階に落ち着いてから、リリアはずっと部屋に籠もりっぱなしである。原因が先日の悲劇であることは言うまでもない。

「困ったね、リリアの気持ちは分からなくもないけど…これからどうすれば良いんだろう、ぼく達は？」

イチがそう窓の外を眺めながら言った。

アゲハの言うとおり、ハーゲンの町は平和そのものであった。あまり大きくない町の中にいくつかの教会とアトリエが並び、幸いにも全く持つて軍の存在は影を潜めていた。空も綺麗に晴れ渡り、皮肉なことに彼女達の現在の気分とはまるで正反対である。

「はあ…なんであたいこんなことになっちゃったんだろ？いつもだったらこんな日は森でベリー狩りでも楽しんでいるだろうに」

椅子の上のオニキスが後ろ足で耳を掻きながらそう言う。

「あのな、元はと言えばお前の食い意地の悪さが原因だろうが」

「う…で、でもあたいはお腹が空いて死にそうだったんだぞ！人間がもつと森や川を大事にしてくれていればこんなことにはならなかったんだ。最近じゃあ、あたいみたいな獣人にとって住み心地の良い所なんてほとんどありやしない」

エンドラズにオニキスがそう吠えるように言った。

「確かにそうだよ、最近じゃ何処に行って戦争に環境汚染…良い話題なんて滅多に聞かないもん」

イチが納得したように頷く。

「おいおいイチまでそんなこと言うのかよ。…まあいいや。それよりもさ、ちよつと買ひ物を頼まれてくれないかなイチ？もう食ひ物が何も残つてないんだ。ついでにオニキスも連れて行つてくれよ、おつりは好きに使つていいからさ」

そう言つて、エンドラースはイチにお金の入つた袋を手渡した。安宿だから、食べ物はもちろん自前と言うわけだ。

「なんだよ、人を邪険にしやがつて。何ならお前が行けばいいじゃないかよ？」

「どうせ暇なんだからいいだろオニキス。…リリアがこんな状態である以上、今俺がここを離れるわけにはいくまい」

愚痴るオニキスにエンドラースがそう説明した。

「うん、わかつたよー。観光も兼ねて色々見て来るけど、夕方までにはちゃんと帰るね」

「ああ、頼んだよイチ」

素直なイチはニコニコしながらエンドラースのお願いに素直に応じた。

「行こうオニキス、おつりで何か美味しいお菓子でも買つて食べよう」

「まったく、しょうがないなあもう」

どうやら流石のオニキスもイチの無邪気な笑顔でそう言われたら断れないようで、渋々イチと一緒に買ひ物に付き合つことにしたようだった。

《ハーゲンの町中》

「……まったく、あの魔法使い腹立つわー！こんな重たい荷物をか弱い女の子に持たせるなんて。そのくせに姫には優しいときた、あれは

絶対に気があるね。そもそも、あいつの考えていることはだな、ブツブツ……」

「ちよつとやめてよオニクス、さっきから町の人がジロジロ見てるよ」

大声で愚痴をこぼすオニクスをイチが恥ずかしそうに宥める。

二人が町中に繰り出してから一時間ほどが経過していた。石畳とレンガ造りの建物が並ぶレトロな町並の中にある小さな食料品店で両手に抱えるほど大量の食料を買ったイチは、その重さのせいでとても散策どころではなく二人は宿への帰路を急いでいた。

「それは仕方ないよ、町に住んでいる人が獣人を見ることなんてまづないもん」

オニクスが人々が自分達に向ける不思議な視線の理由をそのように説明する。

「ふーん……昔は獣人もたくさんいて人間と仲良くしてたって本に書いてあったんだけどね」

「そうさ、でもここ数百年で状況は大きく変わっちゃった。自然は荒らされ、多くの獣人が住みかを追われ……そして殺された。あたいはこんな性格だからあまり気にしてないように見えるけど、本当は人間が恐くて憎くて仕方ないのかも知れない」

「オニクス……」

すると何を思ったか、イチは道端に荷物を置くとオニクスの頭に手を置きながらこう言った。

「大丈夫だよ、確かに人間には悪い人もたくさんいるけど……少なくともぼくは君の味方オニクスでいるよ。だってそうでしょ？ 誰かと仲良くすることに理屈なんてないんだから」

「……お前……って、そんな調子の良い言葉には乗せられないからなっ。だけど……イチは良い奴だからもう少し仲良くしといてあげるよ」

ニコニコ笑うイチに、オニクスがちよつと怒りながらも照れくさそうに呟いた。

「……ホント？ じゃあ尻尾触ってもいいよね！？」

「だーめ！あたいの尻尾を触って良いのは自分と神様だけって決めるんだから」

「えー、牢屋から出したら触らせてくれるって約束だったじゃん才ニクス」

「はて、何のことかな？知らないなー。さあさあ、ちゃっちゃんと荷物を持って、宿に帰った帰った！」

「ぶー！才ニクスの意地悪」

イチは頬を膨らみしながらも渋々置いてあった思い荷物を持つ。そして再び二人は宿への帰路へと付くのであった。

…心成しか、二人の足並みは以前よりも揃って見えた。

《伝説と現実》

「…あー…結局今日も眠れなそう。なんだか最近あんまし眠れないんだよね、何故だろう？」

イチが宿を出てすぐの所で夜空を仰ぎながらそう自問自答する。

日付が変わる頃、イチは眠れないのを理由に夜道を少し散歩をすることにした。どうせベッドの上で起きていても無意味だからだ。どうして自分が眠れないのかは彼女自身でもよく分からないようだったが、何となく『何か落ち着かない』と言った感じだろうか。とにかく、モヤモヤと曇った気分を晴らさない限りは安眠できそうにない。

「そう言えば武器とか買わないとなあ、さすがに果物ナイフじゃあ心細いよ」

そんな独り言を言いながら、彼女はまだ散策していない町のはずれを目指した。冷たい夜風が吹く中、静まり返った町の通りをひたすら進んでいくとやがて急に目の前が開けた。雑草が生え放題の一見するとただの草原だが、よくよく辺りを見回してみると石柱の一部

など所々に壊れてはいるが人工の建造物が建っていた痕跡がわずかだが見られる。その壊れ具合の様子から少なくとも数百年以上前の物である事はイチにも察しが付いた。

「こんな町の近くに遺跡があるなんて……やっぱり聞いてた通りなんだ」

イチは先日のアゲハから聞いた言葉を思い出しながらそう呟く。

「かつて、ここにはどんな人達が暮らして何をしていたのだろうか？　なんで滅びちゃったのかな……村人総出で夜逃げでもしたのかも」

そんな公園を散歩でもするような気楽な気持ちで彼女は崩れた建物の残骸をゆつくり見て回る。苔生しかかつての家だったであろう壁の一部からは、ここがかつて栄えていたことなど想像もできなかった。万物は何れ必ず滅びる……彼女の脳裏^{イチ}をかつて読んだ本のそんな一節が過ぎる。

そうやって彼女が辺りを散策していた時であつた、彼女の目に一人の老人の姿が飛び込んできた。座るのに丁度良さそうな石の上に腰掛けたその白髪の老人は、どこか寂しげな表情で一点を見つめている。

「あれ、こんな真夜中に何をしているんだろうあのお爺さん？……つて、ぼくも人の事は言えない気がするけど」

不思議に思つたイチは、怪しいと思いながらも慎重にその老人へと近づいていった。

「あの……こんな所で何をしているんですか？」

イチがそう恐る恐る老人に尋ねると、

「……これは驚いた。お前さん、もしかこのワシが見えるのかいのう？」

老人は何やらそう不可解な言葉を返してきた。

「へ？見えちゃまずいんですか？」

「いやいや、別に気にする必要はないんじゃない。お前さんはどうやら人とはちと違うようじゃの」

老人はそう微笑みながら言う。

「はあ……?」

「お前さん、名前は何と申す?」

「ぼくですか? ぼくはイチと言います」

いまいち老人の発言の意図が分からないイチであったが、とりあえずそう名前を答えた。

「イチか、良い名前だのう。…して、イチはどうしてこんな寂れた遺跡なんぞに來たのじゃ?」

老人はそうイチに問いかける。

「いやその…ちよつと散歩に…」

「本当にそれだけかいの? ワシにはもつと深刻な顔に見えるのじゃが」

図星だった。確かに散歩に來たことは間違いない。しかし、根本的に眠れない原因をイチは老人に見透かされているような気がした。

「ぼくにも何が深刻なのはハッキリと分からないんです。…でも、何となく自分が今何処に向かっているのがよく分からなくて…不安で仕方ないんです」

ここ数日のシビアな出來事のことであつてか、珍しくイチは言い知れぬ不安を抱えていたようだ。意外なことに彼女^{イチ}が人に心境を打ち明けることは滅多にないのだが、何故かこの老人には話しておこうとゆう氣になつたようである。

「なるほどの…じゃがそれは奇遇じゃ。ワシも同じようなことを考えていたところなんじゃよ」

「お爺さんも何か悩み事があるんですか? …例えば年金がちゃんと支払われていないとか?」

「ふおつふおつ、確かにそれは困つた悩みじゃな。じゃが、生憎ワシは年金には加入しておらんのじゃ。…ワシが今考えているのはな、個人の悩みではない。これからの世界の行く末をもつとこの場所^で心配しておるんじやよ」

老人はそう答えた。

「世界の行く末?」

「そうじゃ。…かつて邪神アネリが最初にこの世界を滅ぼそうと企てた時、この世界の最高神ガイア様と戦闘になった。それはもう凄まじい戦いじゃった…三日三晩の間続いた戦いでようやくアネリは封印され、世界は破滅から救われた。じゃが、その戦いで傷ついたガイア様は何処かに姿を消してしまわれた。それから言うもの世界の均衡は崩れ、数々の災いが頻発するようになったんじゃ。…少なくとも今までにアネリの件も合わせて二度、世界は滅びている。イチが今いるこの世界は数千年前に月の文明が生み出した超人^{アーティファクト}生命体、ルナが滅ぼした世界の後にできた歴史上三番目の世界とされておるんじゃよ」

「え、えつと…つまりだ、今ある世界も絶対安泰ってわけじゃないってことだよな?」

イチが長い昔話に混乱しながらも、自分なりにそう話をまとめる。
「そう、この世界も滅亡への道を突き進んでおる。人々は自らの力に溺れ、神の存在を忘れた。自然との調和も無視して自分達の事だけしか考えておらん。…どんなに文明が発展しても、結局はその歪みが産んだ産物で滅びてしまうんじゃよ」
老人は少し口調を強めてそう言った。

「なるほど…確かに言われてみると納得しちゃうね。ぼくも自然を大事にしない人は嫌いだもん。…あれ?でも今ここにぼくとゆう人間が存在するってことは、世界は…人類は完全には滅びなかったってことだよな?」

イチが不思議そうに首を傾げる。

「確かにその通りなんじゃイチ。どんな強大な敵が現れてもそれに打ち勝つ存在は必ず現れるもんなんじゃよ。少なくとも、ルナを封印したのは勇気ある人々じゃったことは確かじゃ。…じゃがな、そう毎回都合よく勇者が現れるとは限らないのだよ。今この世界だっていつ滅びるかかわからないくらい不安定なのに、それを救う者は一行に現れんではないか」

「環境破壊に異常気象、戦争に飢饉…確かにこの世界はどうかしち

やつてるかも知れない。でもそれを救う手立ては無いみたいだし…お爺さんの言うとおりです。ねえ、このまま世界は滅びちゃうんですか？」

イチが不安気に老人に尋ねると、

「仕方ないことなんじゃ、いずれ世界は滅びる運命じゃからの。…でも、お前さんのような人間がいればもしかしたら…あるいは運命を変えられるかも知れんの」

彼はそうニツコリと嬉しそうに微笑んだ。そしてさらにこう続ける。「もし自分が今、何をするべきかを知りたければここからしばらく東に進んだところにあるレイテの森に行くとよからう。その石版を見れば先が見えてくるじやろうて。…最後に、今日はお前さんに出会えて本当に良かった。希望の光を持つ者よ…」

そうお告げとも取れるような言葉を残して、イチの目の前から老人はまるで霧の様にスーッと消えていきました…。

「…消えちゃった…。あのお爺さんは何者だったんだ？幽霊？妖精？それとも…？？」

わけの分からなくなったイチはふと夜空を仰ぐ。

漆黒の夜空では、お星様が何事もなかったかのように瞬いていました…。

《新しい旅の始まり》

「もう朝か…夜中で退屈だったからあんまり意識してなかったけど、意外と遺跡から宿まで距離あったんだね」

イチが少々疲れた顔でそう言った。

彼女が宿の近くに来る頃には既に東の地平線が白くぼんやりと明るくなり始めていた。もうあと一時間もすれば、夜の帳から解放された人々が目覚め町は再び活気を帯びるであろう時間帯であった。

…が、周りはまだ静かなのにも関わらず宿屋の玄関先だけが妙に騒

がしいことにイチは気が付く。気になって慌てて駆け寄ってみると、意外な光景が彼女を迎えた。

「あっ！ やつと帰ってきたわね。勝手に何処に行ってたのよ、心配したんだから！」

そうリリアが威勢よくイチを迎える。

「え、ああ… ちよつとね。大丈夫なのリリア？」

ここ数日塞ぎ込んでいたリリアからは想像できないパワフルさに、イチは少し困惑気味のようだ。

「まあね、さすがにあれだけ何日も泣いていれば気も晴れるわよ。

…ごめんなさいね、心配かけちゃって。でも、私はもう大丈夫だから」

リリアが軽く笑いながら言う。そう言われて見れば、確かにリリアの目は少し腫れているようにも見えた。

「… あ、帰って来てたのかイチ。何処に行ってたんだよ」

「真夜中にあたいに無断で出て行くなんて、良い度胸してんね」

イチとリリアが話していると、宿の中からちよつと眠そうなエンドラーズとオニキスが出てきた。

「リリアのやつ、昨日まで引きこもっていたと思ったら突然早朝に俺達を叩き起こしてさ。何でも同じところにいるのは危険だから移動するんだとよ。全く、元気になったと思ったらお姫様の気まぐれには困ったものだぜ」

エンドラーズが欠伸をしながらそう事の経緯を説明する。

「う、うるさいわね… 良いじゃない別に、立ち直ったわけだし。それより、あなたはどつするの獣人？ このまま私達と一緒に旅をするメリットはないと思うけど」

そうリリアがオニキスを見ながら言う。

「まあ、確かにそうだな。あたいはただの被害者だし… そもそも人間はあんまり好きじゃないし」

オニキスも納得気にそう頷く。

「えっ、オニキス… 行っちゃうの？」

そんな会話を聞いていたイチがオニキスをつぶらな瞳で見つめる。

「そんな悲しい目であたいを見るなよイチ。…ちつ、しょうがねえな。命の恩人に恩返しもしないで別れられるほどあたいも非情じゃないよ。だから、もう少しだけ一緒に居てやるよ人間共め」

イチの思いに根負けしたのかあるいは心中の裏返しなのか、照れくさそうにオニキスはそう強い口調で言い放った。

「ホントに！？ありがとうオニキス、これでまた一緒にいられるね！」

イチはそう言っと思っていきりオニキスを抱きしめる。

「こ、こらっ！よせつたらイチ、くすぐったいだろぅが！」

口は悪いが、イチに抱きしめられたオニキスも満更はなさそうである。

「素直じゃないなあ、ホントはイチと一緒に居たいくせに」

「う、うるさいっ…って、頼ずりはNGだよイチ…」

イチに頼ずりされながらオニキスはエンドラーズに照れくさそうに言った。

「それじゃあ決まりね。さ、イチもオニキスを放してあげなさい。

…とりあえず行き先とかは町を出てから決めましょ？異論はあるかしら？」

リリアがそう問うと、

「ないよー、良いから早く行こうよー」

「ま、なんとかなるだろうよ」

「あたいは何処でもOK」

そう三人の性格を表すような返事が返ってきた。

「やっぱりね、私も同じこと考えてたわ。じゃ、行きましょか！」
そんなリリアの指揮の下、四人は町を後にすることにしました。

気が付けば朝日は完全に昇り、町中を淡いオレンジ色で染めていました。風も穏やかで、どうやら彼らの新しい旅立ちには相応しい一日となりそうです。

…そう、旅の目的も考え方も違う4人が織り成す不思議な物語はこ
こから始まるのです…！

導きの章 第一部 導かれし者達（後書き）

オニキスが仲間に加わり、ようやくメインキャラクターの4人による旅が始まります。旅の道中ではこのオニキスが活躍する（予定……）ですので、お楽しみに！

それでは、オニキスのキャラクター紹介をしてお別れのご挨拶と代えさせていただきます。また次回も読んでくださると幸いです。本日はこの小説を読んでくださって真にありがとうございます。

オニキス

性別：♀

身長：90cm

種族：獣人
フエネツク

好物：はちみつ

小さな獣人の女の子。大きな三角形の耳にフサフサの尻尾など見た目は可愛らしいが、性格はかなり強気で捻くれ者。素早く敏捷な動きと、鋭い爪と牙が最大の武器で戦闘能力は意外と高い。魔力を持っているのでちょっとした魔法の類も使えるようだ。

番外編 付き人の一日（前書き）

こんにちは、ロゼリアー又様の付き人をさせて頂いているサジです。今回はどうゆう経緯かは知りませんが、主人であるロゼリアー又様のとある一日の暮らしぶりを私が紹介させて頂く事になっております。えゝゝ上手くは言えないんですが、とにかく最後まで飽きずに聞いてくださると嬉しいなあゝなんて。そ、それではどうぞ本編をお楽しみください。

番外編 付き人の一日

《午前7時・起床》

「…うーんっ。良く寝た…のかな？」

まだ眠い瞳を擦りながら起き上がる。どうやら今日は良い天気なようで、閉まったカーテンの隙間から陽光が微かに差し込んでいた。しかし、すぐ近くでは私の主人がまだぐっすりと眠っている。

「やれやれ、相変わらず無節操な…仕方ない、今日もバリバリシャキシャキ働きますか」

そう私は自分に言い聞かせると、小さなバスケットを改造したベツドから洗面所へと飛び立つ。そこで手早く着替えや洗顔などの身支度を済ませる。…もたもたしている和不機嫌なロゼリアー又様がお目覚めになって大変なことになっちゃう。

「さてさて、お次は…掃除と洗濯と朝食の準備…あー忙しい」

忙しいとは言ってもそこは流石に私とて妖精の端くれ、全て魔法任せである。と言うか、この30cmほどの体ではいくら羽があつて飛べるからと言って人間サイズの道具を扱うことはできない。台所に行つて魔法を掛ければ道具達が勝手に料理を作ってくれるし、ほうきやぞうきんは自分達で家中を綺麗にしてくれる（広いから時間は掛かるけど…）。とりあえず、一通り道具達に魔法を掛けたらあとは自動的にやってくれるから心配はいらない。お茶やコーヒーを飲みながら朝のニュースや新聞を見てちよつとだけ休憩。…私にだつて休む権利くらいはあつても良いと思う。

「むむ、また人間と獣人属の間で戦闘か…物騒な世の中で困るよ。あつ、もうこんな時間！そろそろロゼリアー又様を起こしに行かないと…今日は機嫌が良いと助かるんだけどなあ…」

そう、一日の中である意味もつとも気の悪い仕事に私はこれから行かないといけないのである。

《午前9時・苦勞の始まり》

「…ロゼリアー又さまあ、起きてくださいよー。いくら休みの日だからって寢坊はダメですよ」

なるべく刺激しないように、私は優しく声を掛けながらベッドに無防備にも下着一枚で寝転がる彼女をそつと揺さぶる。…と言っても、何せ体が小さいから力いっぱい押さないと彼女の体はビクともしないわけだが。

「うゝん…何だよサジ、もうちょっとくらい寝かせてくれたって良いじゃない」

そう言つて彼女は背中を向ける。こんな風に駄々を捏ねるのはいつものことだ。

「ほおら、もう朝食だつて出来てますよ。昨日の注文通りレモネードもちやんと作っておきましたから」

そう言いながら私は耳元を飛び回る。そつ、聴覚の鋭い彼女にとつてはこれが一番効果的な起こし方なのである。

「んん…分かったよ。分かったから耳元で飛び回るのは止めてくれ、羽音がうるさくてたまらん」

案の定、彼女は眠たそうに渋々起き上がるとシャワーを浴びに風呂場へと覚束無い足取りで向かつていった。…二十歳過ぎにもなつて下着一枚で。まあ、スタイル抜群な彼女だからまだ許されるかも知れないが…一応既婚者であることを忘れてしまつては困る。今日は夫のカエサル様は出張とか何とかでいらつしやらないけど、きつと彼女と結婚できたのはカエサル様だからこそなのだろうと私はつくづく思うのである。

「はあ…カエサル様、早くお帰りにならないかなあ…私じゃあロゼリアー又様を制御できそうにないです」

そつついつい愚痴が出る。何はともあれ、朝食の準備が整つたダイ

ニングキッチンで彼女がシャワーから出てくるのを待つことにしよう。朝食が済んでしまえば、あとはゆっくりできる…はず。

《午後1時・書斎にて》

さてさて、私の主人は^{ロゼリアーヌ}大変な勉強家である。…とてもその乱雑な言動からは想像できないくらいにね。朝食を食べ終わると彼女はすぐに自分の書斎に向かう。片付けは疎かでお世辞にも整理された場所とは言えないが、それでも大切な本が保管されている本棚だけは綺麗に生理整頓されているから不思議だ。そもそも、彼女は自分の執筆した著書から得る印税で生計の大部分を賄っている。歴史・神学・宗教・人間学・心理学・自然科学…その分野は多彩で、何度か受賞もするほどの文豪である。これも彼女が勉強好きだからこそ成せる業なのである。

…しかし、これは表向きの話。彼女の本職は政府お抱えの暗殺者^{アサシン}である。政府、と言うか生みの親であるコロツサル様の命令で都合の悪い人間や団体を抹殺するのが彼女の専門。無論、このことを知る者は少ない。私もその数少ない人物の一人だ。これは最高機密であり、夫の力エサル様でさえ彼女が人間ではないことは知っていても彼女の本職が人殺しなんてことは未だに知らない。…まあ、流石に10年以上の付き合いで培った信用は大きいようでおそらく私以上に彼女の事を知る人物はいないでしょう。

え…暗い話はさておき、少し彼女の勉強風景でもお話させて頂きますでしょうか。

基本的にあのお方は誰の講義も受けませんしノートも書きません、ただ単に自分の好きそうな書籍を読み漁るだけなんです。…御幣がありましたね、先程「勉強家」と言いましたがむしろ「趣味」と言った方が正しかったのかも知れません。本物の勉強家なら自分の苦手な教科も積極的にこなしますが、彼女は嫌いな数学や物理などに

関しては一切触れることはありません。そして本を読むときには必ず立ち読みです、椅子がないわけでもないのに座って読むところを私は見たことがあります。いや、もしかしたら私の見ていないところで座っているのかも…でもそれはないでしょう。何故ならばいつ彼女にコーヒーや紅茶のお代わりを催促されても良いよう、今もこうしているように常に私は同じ書齋で待機しているからです。その間、私は編み物をしたり書齋を見て回ったりしてしています。主人に本の内容を聞いたりと話しかけることもあります、今は何やら難しそうな地理と歴史に関する本を真剣に読んでらっしゃるようなのでやめておきましょう。

…要は特に買い物などの用事がなければ私は四六時中彼女と一緒にいるわけです。

《午後4時・ティータイム》

「全く、最近の若者はなつとらんよ。ファッションだとか恋愛にばかり夢現を抜かしやがって。もつと面白いことに精を出せないのかね？」

主人はそう言つて紅茶を啜りながら理不尽と言つかよく分からない愚痴を私に言う。まあ、普段から家着がTシャツとジーンズの人にファッション性云々を語れる資格があるのかどうかは分からないが…何を着ても似合う彼女の抜群のスタイルを持っていれば一理あるのかも知れない。

基本的に彼女は昼食を取らない（私はお腹が空くから食べるが…）。その代わり、テラスなどで午後三時くらいからお菓子やお茶を嗜むのが習慣となつている。当然私も同席するわけだが、とにかくこの時の彼女はよく喋る。もちろん良い話も沢山あるわけだが、大抵は私のような常人には理解しがたい理念を延々と語る。…今日は今の若者と社会の在り方に対しての不満に関する講義だ。

「大体だな、社会の教育が悪いよ。みんな自分勝手な理論ばかり展開して協調性がないからいつまでたっても世界が平和にならないんだ」

「まあそりゃそうかも知れませんが…考え方なんて人それぞれでは？」

「そうゆう甘えがダメなんだよサジ。それが分かっているなら少しでも相手と考えを同調させられるように努力しなきゃ」

確かにその通り。でも、それは彼女にも同じことが言えるのでは…？ああ、それでもまだ死にたくないから黙っておこう。主人に向かって『お前こそ頑固で強情でワガママで自己中心的性格極まりない野郎だ』なんて口が裂けても言えない。

「ああ、嘆かわしい世界だよホント。いつそ核戦争で滅びちゃえばいいんだ」

いやいや、そんな結論はダメでしょ。

結局、私はこんな内容の話を一時間以上聞かされ最後には無理矢理納得させられる。いや、例え反論しても素晴らしいマシンガントークでねじ伏せられるのは分かっているから逆らわない方が利口だ。最近では、特にストレスも感じることなく彼女と会話できる自分が怖いと感じるのは果たして気のせいだろうか？

《午後6時・秘密の外出》

「じゃ、悪いけど後のことは頼んだよ。一時間くらいで戻るから」そう言つて主人は愛車の赤いスポーツカーに颯爽と乗り込むと夜の帳が下りたばかりのインベリスの町へと繰り出していった。

「ロゼリアーヌ様、今日は何をお買いになるのだろうか…」

通常、休日であれば彼女は夕食までの時間を書斎かお庭で過ごされる。しかし、何か欲しいものがあるときは大抵夕刻くらいにインベリスへ車で行かれるのだ。それと言うのも、彼女がよく行くインベ

リスの旧市街にある闇市場は夕方以降にしか営業していない店舗が多いからである。そこでは違法な商品やら何やらが世界中から集まっている。麻薬から機密文章のコピーから人間の死体まで、表世界から見たら有り得ない物が当たり前のように売買されている。何度か彼女と一緒に訪れたこともあるが、あそこだけはいつまでたつても慣れる気がしない。…だってさ、妖精のホルマリン漬けとか見ちゃった日にはまさに悪夢以外の何物でもないよ。

そんな違法な闇市場が政府に黙認されているのも同然なのは、実は主人が裏で色々と根回しをしているからである。コロッサル様繋がりで色々と政治に介入しているのだ。彼女としては、こんな面白くて素晴らしい場所を無くすなんてとんでもないと言ったところだろうか。事実、彼女は闇市場でよく非合法の書物を大量に購入しているし、今日もおそらくそんな感じの目的で向かったはずである。…権力とはつくづく恐ろしい。

さて、おそらく上機嫌で帰ってくるであろう主人のためにも急いで夕食の支度をしなければ。今日の夕食の席では闇市場の珍しくて面白い話がいっぱい聞けるので私も楽しみだ。…ただ、先日のように食事中にも関わらず人間の胎児のミイラについて熱く語るのはやめて欲しいが。

《午後8時以降・夕食後〽就寝まで》

主人の夕食後の行動は日によってまちまちである。昼間のように書斎にこもって読書にふけることもあれば、今日のようにお酒を飲みながらリビングで私と一緒にテレビを見ることもある。

「ははは、バカだねえ。こんなに上手く段取りがいくわけないじゃんかバァーロォ」

…ワイングラスに満杯の赤ワインを一気に飲み干しながら、恋愛ドラマの1シーンについて貶すのは彼女の特技だ。

まあ要は普通の人が夜寛ぐのと同じようなことを主人は夜中までやるわけで、それが一段落すると入浴タイムだ。彼女は大変な風呂好きだから二時間は浴室から出てこない。時々私も一緒に入る（そのくらい仲の良い間柄なんだよ）のだが、その度に逆上せて酷い目に会う。さすがは炎属性と言うか、暑さに関しては滅法強いみたい。大抵、私が風呂から出てバルコニーで夜風にあたって体が冷めるころには日付が変わっている。

「ささ、もう寝る時間ですよロゼリアーヌ様」

「えー、まだ眠くないよ」

「ダメですよ、夜更かしは美容と健康の大敵なんですから！さつさと着替えて寝てください」

…夜型の彼女をベッドに寝かせるまでには相当な苦勞が伴うのは言うまでもないだろう。それでも強制的に寝かせないと、ただでさえ大変なのに明日の朝起こすのが余計に大変になるから仕方ない。

「はあ、分かった分かった。もう寝るよ、寝ればいいんでしょ」

そう言っただけでベッドにもぐりこむのはいつもの事。私も寝巻に着替えてバスケットを改造したベッドに入る。

「…なあサジ、お前は今の自分の人生を幸せだと思うか？」

ベッドに入って早々、彼女はそんなことを言った。眠れない主人のために、就寝前にちよつとだけ雑談をするのが私達の約束事みたいになっている。

「ええ、もちろん幸せですよ。あなたのもとで何不自由ない楽しい生活を送ってます」

…今までの経緯から想像される感情とは真逆に思われるかも知れないが、その言葉に偽りはない。私はこの人と一緒にいることを心底嬉しく思っているし、それ以上に誇りに思っている。

「そっか、わたしもだよ。お前と出会えたし、結婚も出来た。何も困ることなんてない、今の生活が最高に幸せさ。…だから、もしこの生活が脅かされるようなことがあればわたしは全力でそれを阻止するだろう。今となつては何一つ失いたくないんだ」

たまに、彼女は不安気そうな言動をすることがある。誰にでも怖いものはあるもの、力を持った彼女だからこそ別の恐ろしいものが見えてくるのかも知れない。

「大丈夫ですよ、誰も私達を邪魔することはできませんから。如何なる時でも私達には安泰が保障されてますよきつと。だから心配しないで、もう寝ましょう…おやすみなさいませロゼリアー又様…」

「ああ…おやすみサジ…」

その後は特に会話もなく、そのままゆっくりと眠りへと落ちていく。…こうして私達の一日は幕を閉じるのである。

今思えば、彼女無し我的生活なんて私には最初から有り得なかったのかも知れない。もしあの時、まだ幼くて髪が赤かった頃の可愛らしい彼女に命を救われなかったら…そう考えると夜も眠れない。私の人生は彼女によって引き伸ばされたようなもの、その伸びた分の時間は彼女のために使おうと心に決めている。だから例え如何なる天変地異が起ころうとも、私は彼女のために存在し続ける。そう、これからもずっと…。

番外編 付き人の一日（後書き）

いかがでしたか？とりあえずロゼリアー又様がかなり特殊なお方であることだけは分かって頂けたかと思えます。：え？私が付き人になった経緯はつて？うーん、あんまり明るい内容じゃないんですよねえ…話すと私自身の辛い思い出話になっちゃいますし、このエピソードはまた別に機会にお話することにしましょう。

導きの章 第二部 レイテの森（前書き）

追っ手から逃れるように東へと進む一行ですが、ここで新たな刺客が登場します。今回はオニキスが大活躍するので注目です。

導きの章 第二部 レイテの森

「…お呼びですかヴォルガノン様？」

夕刻、マートレーの砦のヴォルガノンの部屋に一人の男が呼び出されていた。軍服に身を固めた短髪黒髪で、その金色の瞳にはどこか鋭さを感じられる若者だ。

「バイパーか。お前に新たな任務を与える」

ヴォルガノンがそう唐突に言い放つ。

「任務…ですか？」

「そうだ、数日前にアラカイトを侵略したのはお前も知っているだろう。…不覚にもその時にアラカイト国王妃とその仲間を取り逃がした。奴らは俺の秘密も知っている」

「グルスの件ですか…厄介ですね」

「密輸の件は俺やロゼリアーヌしか知らない。非法な交易がコロツサル様に知れたら…何としてもナタリアの中央政府よりも先に奴らを捕らえるのだ。殺してでも構わん。好きにするがよい」

「仰せのままに…」

男はそう言つてヴォルガノンに深く頭を下げた。その口元はどこか不気味に笑っていた…。

《イオウの村》

ここはハーゲンの町からさほど離れていないイオウの村。普段は静かな場所だが、数日前にアラカイト国の首都ポーリーがナタリア帝国に侵略されたと言うニュースで村中が大騒ぎだ。

「市民の多くは無事だけど、城や中にいた王と兵士は殺されたんだって、惨いわね」

「見たことも無い兵器や魔物で攻め込まれてどうしようもなかった

んだって…恐ろしい」

「これで西方もナタリア帝国の物になったも同然か。対抗できそうな大国はもうないだろう」

「この辺の町や村にも近々帝国のお役人が入るらしい…みんな帝国の支配下か」

「でも、姫様が行方不明で西方を管轄しているヴォルガノンが血眼になって探しているって聞いたよ」

…村人はそんな噂話をあちこちでしている。

そんな村の中を、人目を忍んでコソコソと行動する4人の姿があった。

「おお、ぼくたちすっかり有名人みたいだね」

白金の髪の少女が村人の会話に聞き耳を立てながら言う。

「アホ、俺達はお尋ね者ってことだよイチ。…全く、村を救ってもらった恩がなけりやあとつくに逃げ出してやるよ俺は」

エンドラースがそうイチに半ば呆れながら説明する。

「なんとかここまで逃げ延びてこれたけど…私達のことがこの村に伝わっている以上長居はできないわね。車の燃料も補給したし、さつさと他の町に行きましょう」

リリアがそう指示する。

「あたいさつきから気になっているんだけど…なんで東に逃げてるのさ？この場合、敵国^{ナタリア}から離れた西に逃げるほうが得策じゃないの???」

オニキスがリリアにそう尋ねた。

「確かに普通はそう考えるわねきっと。だからこそその裏をかくのよオニキス。まさか逃亡者が自国の領地内をしかも首都に向かって逃げるなんて想像できないでしょ？少なくとも当事者のヴォルガノンの管轄する極西地方から抜け出すことはできる。…でもなあんか引つかかるのよね…なんでこうもつと大掛かりな搜索をしないのかしら？何か秘密裏にやらなくちゃいけない理由があるのかそれとも…ぶつぶつ…」

リリアにはどうやら気になることがいくつもあるようだ、確信には至っていないのか最後のほうは何を言っているのかオニキスの獣並みの鋭い聴覚でも分からなかった。もっとも、リリアの勘は正しいのだがその真実を知る余地はもちろんない。

「とりあえず、レイテの森に行きましょうか。イチがどうしても行きたいって言うし…森を抜ければアンソルギーって言うちよつと大きな町があるからそこに向かいましょう、イチの新しい武器とか物資を調達しないと…資金は限られているから節約しなくちゃ」

リリアが自分の財布を覗き込みながらそう言った。彼女の財力がこの旅を支えていることは言うまでもないだろう。

「え…今から行くの？ばくお腹空いちやったし…晩ご飯食べてからにしない？」

「あたいもさんせー。いつそのこと町を出るのは明日しようよ。なあに、一日くらい大丈夫だって、捕まりやしないよ」

イチの提案にオニキスが賛同する。無論、ついこないだまで牢獄に入っていたオニキスにそう言われても説得力無い気もするのだが…

「だってさリリア、どうするよ？」

エンドローズがリリアに指示を仰ぐと、

「まあ、確かに先走っても逆に危険かもね。よし、今日は一泊して明日の朝一番に村を出ましょう」

リリアがそう言った。

「じゃあ明日のためにもいっぱい食べて元気を付けないかね」

イチが嬉しそうに笑う。

こうして、結局当初の予定通りとはいかずイオウの村に一泊することになった一行であったが、これが先の運命を大きく変えることになるとはきつと夢にも思わなかっただろう…

「うう…人間はよくもこんな速いのに乗って平気だなあ、あたいな
んか馬でも嫌なの…おえつぶ…」

「大丈夫オニキス？顔が幽霊みたいに真っ青だよ」

古びたバギーの後ろの席で車酔いに苦しむオニキスを隣のイチが背
中をさすってあげる。早朝村を出た一行は数時間ほど車を東に走ら
せた小道にいた。無論、舗装などされていない凸凹道だからオニキ
スが酔うのも納得できる。砂煙と共にタイヤが時折音を立てて小石
を中に弾き上げる。辺りには低木と背の低い草が生い茂る乾燥した
草原が広がっていた。日も高くなり、予定ではもうすぐ草原から森
林地帯へと入ることになる。

「もうすぐ着くはずなんだけど…おかしいわね、地図が古いのかし
ら？ここら辺一体は森林のはずなんだけどなあ」

リリアがハンドル片手に地図を見ながらそう言う。確かに、地図上
ではこの道沿いに森林の存在を示す地図記号^{マーク}が延々と示されていた。

「なあに、気にすることはないさリリア。数年前は森林だった所が
砂漠になることも不思議じゃないさ、近代の発展を過剰に求め続け
た人間活動が自然界に及ぼした負の影響は計り知れないんだからよ」
エンドラースがそう皮肉を込めて言う。事実、ここ最近の環境破壊
の話題は尽きない。

「西方はまだまだ大丈夫みたいなのを学校では教えていたが、も
うそんな悠長なことを言っている場合じゃないのかも知れんな。科
学技術を極めようとしている帝国の影響がまさかここまで出るとは
…恐ろしいご時世だよ」

「そんな絶望的なこと言わないでよエンドラース。ぼくは楽しみだ
よ、東方がどんな所か早く見たくてワクワクしてる。もちろん西方
も好きだけど…東方の科学とやらにも触れてみたいな」

悲観的なエンドラースにイチが持ち前の明るさでそう言った。この
状況下にあっても、あくまで好奇心を満たすための旅路であること
をイチ自身は曲げてはいないようである。

「あ、あたかも東方には興味あるよ。昔っから文明の発祥は東方が

起源だつて言われてるし…きつと何か分かるはずさ。…あー、気持ち悪っ」

少しは気分が回復したのだろう、オニキスがそう口を挟む。

「ま、あんた達がどう思おうと勝手だけどね…とりあえず逃げ延びなくちゃ何も始まらない事をお忘れなく」

リリアがそう釘を刺す。全てを奪った東方の文明なんぞ彼女にとってはどうでもよかったのかも知れない。今の彼女はどうやって追ってから逃げ切るか、どうやって国を滅ぼされた復習を働くか…そんな憎しみにも似た感情でいっぱいだった。…自然とハンドルを握る手に力が入る。

「…」

その傍ら、助手席のエンドラースにはそんな彼女の心情をなんとなく理解していた。そして怒りや憎しみに駆られ支配される危険性も…でも、彼には何を言っているのか分からない。今はただ彼女を黙って見つめるしかなかった。

「あつ、ところでさ…ドラゴンとワイバーンって何がどう違うの？絵本なんかで昔読んだんだけどさっぱりで」

「そりゃあアレだよイチ、ドラゴンには翼のあるのと無いのがいて手足が4本以上あるけどワイバーンは翼が大きくて足が2本…」

イチの突然の質問に物知りなエンドラースが答える、いつものほのぼのとした空気が戻ったと思った…次の瞬間、急に下方方向に落ちるような感覚が一行を襲った。

「うわっ!？」

「きゃっ!」

それは車一台を飲み込める大きな落とし穴だった。バギーはそのまま深さ2mはあろうかとゆう穴にすっぽりはまってしまった。…幸い、車が席を上にした通常の状態で落ちてくれたので車の下敷きにはならず済んだ。

「いつつ…み、みんな無事か？」

「ええ、何とかね…」

「ぼくも大丈夫そう… ってあれ？オニキスは？」

エンドラーズの呼びかけにリリアとイチが答えるが、何故かオニキスの姿だけが見当たらない。

「…おゝい！みんな生きてるかー？」

イチ達のいる穴の底から遙か頭上、落とし穴の上からオニキスが覗き込むようにしてそう呼びかける。実は、車が落とし穴に落ちる直前にオニキスは素早く後方席から外にジャンプしてこの難を逃れていたのである。

「おーい、助けてよオニキスー」

イチが穴の中からそう叫ぶ。

「助けるって言われてもなあ… それにしても畜生め、誰がこんな悪質な悪戯を…？」

オニキスのその疑問はすぐに解けることになる。背後に何者かの気配を感じて彼女が振り返ると、そこに若くて鋭い目付きの男が立っていた。

「原始的な罠とは言え、まさか逃れるとは運の良い獣人だな」

腕組みしながら男がそう言う。褒め言葉にも関わらずその口振りはどこかオニキスを軽蔑しているようにも聞こえた。

「お前… 一体何者だ？」

オニキスは男を睨み付ける。

「答える義理はないが… まあいい教えてやろう獣人の娘。俺はバイパー、ヴォルガノン様の命令でその穴に落ちている連中の始末をしに来た」

「ちゃんと名前で呼べよ偉そうな人間め、あたいはオニキスだよ。

…イチ達を殺すのか？」

「それでも構わないとの命令だ。お前はどうかやう関係無いようだし、ここで黙って手を出さなければ危害を加えるつもりは無い。… 獣人が人間の手助けをする義理などあるまい？」

バイパーのその問いにオニキスは迷うことなくこう答える。

「… 確かにその通りさ。でもね、あたいは彼女に^{イチ}借りがあるんだ。

悪いけど黙って見ているわけにはいかない」

「そうか…それは残念だ。ではまずお前から殺さなくてはなるまい」
「へっ、人間ごときがこのオニクス様に勝てると思っただら大きな間違いだよ」

オニクスは手の鋭い爪をチラつかせながらバイパーを牽制する。

「悪いが直接殺り合う気はない。…お前と戦うのはコイツさ」

そう言つてバイパーが指を鳴らすと、地響きと共にオニクスの目の前の地面が盛り上がり中から大きなモグラの化け物が姿を現した！その黒い巨体は車ほどもあり、鋭い爪が生えたシャベルのような前足はオニクスの身長に匹敵した。

「うわ…お前、魔物モンスターを操れるのか!？」

「ふふ、今更謝つたつて遅いぞ？行けつ、ジャイアントモール！」
バイパーの命令と同時にジャイアントモールがオニクス目掛けて突進してきた。至近距離に達したところで鋭い爪の付いた大きな前足を振りかざしてオニクスに攻撃を仕掛けるが、彼女は軽い身のこなしでそれを避ける。ジャイアントモールの攻撃は空を切り地面に大きな前足が叩きつけられ砂埃が舞った。気が付けば既にオニクスはジャイアントモールから離れた位置で身構えていた。どうやら、素早さが自慢の彼女にとっては動きの緩慢なジャイアントモールの攻撃をかわすことなど難しいことではなかったようだ。しかし、事はそう簡単ではない。

「くっそー、あのモグラが落とし穴を掘ったんだな。あんなのくらっただら生きて帰れないぞ」

オニクスの額から汗がにじみ出る。それが暑さのせいでないのは言うまでもない。一筋の汗が頬を伝わるのが自分でも分かった。

「うおーい！何がどうなっているんだオニクス!？誰かそこにいるのか!？」

穴の中から状況を把握できていないエンドラーズがそう叫んだが、
「うるさいよ！今はそれどころじゃないんだよっ」

オニクスはそう一括するのがやっとであった。いくら動きの緩慢な

相手とは言え、あの一撃をまともに受けたら彼女などひとたまりもないだろう。

「モグラは太陽の光に当たると死ぬと言われているがそれは間違いだ。ご覧の通りちゃんと生きてお前を食い殺そうとしている」

バイパーがそう余裕とも取れる発言をする。ジャイアントモールの細長い顎にはたくさんの鋭い牙が並んでおり、せわしく鼻を動かして臭いを嗅いでいるように見えた。

「（モグラは視力が弱い…だから常に臭いを頼りにしてるんだ。そう簡単に素早いあたいに攻撃を命中させるほどの能力はない。でも、一回でも噛み付かれたり爪の一撃を受けてしまえば確実にこっちの負け…さて、どうしたものか…）」

意外なことに、オニキスは動植物や魔物に詳しかった。所詮、相手がモグラであることを確信した彼女はとある作戦を思いつく。

「へっ、解説ありがとう。でもな、図体ばかり大きくても所詮は小動物なんだよ！」

オニキスはそうバイパーに吐き捨てると、韋駄天のごとく素早い足運びでジャイアントモールの風下に回りこんだ。どうやら、モグラの最大の武器である嗅覚を封じる作戦に出たようだ。予想通り、激な動きに追いつけないジャイアントモールの至近距離にオニキスは一気に近づくことに成功する。

「それでも喰らいやがれ糞野郎っ！」

素早い動きで飛び上がったオニキスはジャイアントモールの顔面に連続キックを繰り返す。顔を蹴られたジャイアントモールがたまらず怯むと、今度は着地と同時に背中に回りこみ背中にジャンプキック！

「フギーー！！」

背中から強く蹴られたジャイアントモールは悲鳴を上げてそのまま地面に倒れこんでしまった。そして何を思ったのか、ものすごい勢いで穴を掘り始めた。シャベルのような強大な前足でみるみるうちに大穴が掘られ、あっという間にジャイアントモールはその穴へと

姿をくramしました。…そして、もう姿を現すことは無かった。

「ちっ…ジャイアントモールめ、勝手に逃走しやがって！」

バイパーがそう舌打ちする。そう、あの大きなモグラはオニキスの攻撃に対して怯えたのか命令を無視して勝手に逃走したのである。

「思ったとおりだ。大きくても所詮はモグラ、地上での臆病な性格に変わりはない。こっちはちよいと攻撃を加えてやれば良かったのさ、モグラにしてみれば地上で戦うよりも地下に逃げ込んだ方が得策だからね。…とは言え、まさかこんなに上手くいくとは思わなかった。へっへーん、ざまあみろ！」

オニキスが余裕綽々でそう言う。彼女にしてみれば形勢が一気に逆転したと思っていたのだろうが…相手が人間と言う最悪の動物であることを忘れていた。

「ぐ…調子に乗るなよ獣人ごときが。この俺を見縊るなよ？」

そう言つてバイパーは懷から何か黒いものを出した。…それはオートマチック式の銃であつた。そう、紛れも無く人間が作り出した忌まわしき武器の最もたるものである。

「なっ…！？き、キサマずるいぞ！」

オニキスは慌てふためく。

「ふふ、死ぬ前になぜ獣人が人間に勝てないのか教えてやろうか？それはな、お前ら獣人が人間と違つて愛だの義理だのに誠実だからなんだよ。…本当、バカな奴らさ」

バイパーがそう暴言を吐くが、銃口を向けられたオニキスにはどうすることもできない。やがてバイパーが引き金を引こうとした…その時だつた、

「させるか！バーニングボールっ！！」

突然、オニキスの頭上を通つて火の玉がバイパー目掛けて飛んでいく！

「！？」

バイパーは寸でのところで火の玉をかわすが、その拍子に銃を落としてしまう。火の玉は少し離れたところに着弾して火柱を上げた。

「…黙って聞いてりやあ偉そうによお。お前みたいな野郎がいるから無益な争いがおこるんだろうが」

エンドラーズの声に驚いてオニキスが振り返ると、そこには穴からなんとか這い出してきたイチ達の姿があった。そう、さっきの火の玉はエンドラーズの魔法攻撃であつたのだ。

「大丈夫オニクス！？…獣人を否定するなんてひどい！この世界は人間だけのものじゃない」

イチがオニクスに駆け寄りながらそうバイパーを睨み付ける。

「どうやら形勢逆転のようねバイパーとやら。…武器ならこっちにもあることをお忘れなく」

リリアが小型のボーガンをバイパーに向ける。…車のトランクに積んであつたものだ。鋭い金属製の矢が不気味に光る。

「…ふん、今回はしくじつたが次はこうはいかんぞ。お前らが生きている限り逃げ道などないのだからな」

バイパーはそう言うのと地面に煙玉を投げつける。あつという間に紫色の煙が立ち上り、それが晴れる頃には彼の姿はもうどこにもなかった。

「逃げたか…あいつ、獣人をバカにしやがって許せない。今度あつたらあたいがフルボッコにしてやんよファッキンめ！…てゆーか、助けに来るのが遅いんだよこのアンポンタン！危うく死にかけたじやんかよ！」

オニクスが飛び跳ねながらイチ達にそう怒鳴りつける。

「何だよ、それが助けた恩人に返す言葉かいな。相変わらず騒がしい野郎だぜ」

「まあまあ、エンドラーズも必死だったんだし、許してあげてよオニクス」

オニクスとエンドラーズをイチが仲裁する。

「今回はオニクスのお手柄ね、あなたが敵の気を引いてくれたおかげで無事に気付かれずに穴から出られたんだし。…とにかく早くここを離れましょう、相手側も想像以上に躍起になっているみたいだ

から」

「うっ、あたいはおとりかりリア。…で、離れるって車は？穴の中から引つ張り出すのは無理なんじゃ…」

「ああ、それなら心配ないよ。ほれ、この通り」

そう言うエンドラースの手の平には小さなバギーが乗っていた。

「エンドラースが魔法で小さくしてくれたんだ、これなら持ち運びやすいしね。魔法って便利だよな〜」

イチが感心しながらそう説明を付け加える。

「それなら安心だよ。…あたいはもう疲れたよ、早いところバギーで寝たいからさっさと行こう」

「はいはいオニクス、本当マイペースなんだから。じゃ、行きましよう。エンドラース、バギーを元に戻して」

「レイテの森へレッツゴー！」

「お前は本当に元気だなイチ…俺はこの先もつと疲れそうだよ。バギーを元のサイズに戻すのも楽じゃないんだから…」

イチとリリアの元気すぎる掛け声にエンドラースがため息混じりに言った。女性陣3人の前にエンドラースはまるで頭が上がらないのは言うまでもないだろう。

…何はともあれ、刺客を退散させた一行は目的地であるレイテの森へと再び向かうのであった。

《レイテの森の石版》

「…なあ、ここなんだよなリリア？」

「ええ…地図上だと間違いなくここなんだけど…」

一行が困惑するのも無理はない。目の前にあったのは森とは名ばかりの小さな林のような場所だったからだ。中心にある泉からは透き通った青い水が滾々と湧き出ているのが見て取れた。その泉を中心に周囲には木本がまばらに生えており、辛うじて林を形成していた。

仮に例えるならば、乾燥した大地にポツンと浮かぶオアシスと言ったところか。

「環境の変化か何かで森が消えちゃったのか…自然なんて儚いものだよ」

オニキスがそう皮肉たつぷりに言った。日没も近く、夕方の冷たい風が木々の葉や枝を揺らす。

「でもきつと何かあるはずなんだ…根拠はないのにさっきから何かを感じる…あつ、何か変なのがある」

辺りをキョロキョロ見渡していたイチが泉の畔に何か見つけたようだ。

「なんだろう…石版か？」

一行が近付いて確かめてみると、エンドラーズの言ったとおりそれは古びて苔むした石版であった。石版には何か文字のようなものが書いてあったが、それは現代で広く使われている文字ではないようだ。

「相当古い文字みたいね。残念だけど私には読めないわ」
リリアがそう言った。

「あー、俺に見せてみ？ふむふむ…相当古い文字だけど学校で習ったことある文字だな、多分…」

「いらないうんちくは良いから読めるなら早く読めよエンドラーズ」
「分かってるよオニキス、ちょっとは待てて！えーと何々…世界に散らばりし四つの聖なる武具を集めよ。されば願いは叶うべし…だよ」

エンドラーズがそう翻訳する。

「願いが叶うの？それってすごいことじゃん！」
イチが興奮気味に言う。

「バーロオ、ただの伝説かも知れないんだぞ？ん、下に地図みたいな図形が書いてあるな…おそらく武具の在り処を示した図みたいだが…聞いたことのない地名ばかりが書いてあるぞ」

エンドラーズが石版の下のほうに目をやると確かにそこには世界地

図のようなものが書いてあって、4つの星印が各所に打たれていた。
「へえ、どの印もここから東にあるわね。要するにこの印のところに行けば願いが叶うんでしょ？」

「おいおいリリア…まさか本気じゃないよなあ？お前だけは常識人だと信じてたのに」

「あら、良いじゃない面白そうだし。どうせ東に向かうんだからちよつとくらい寄り道したって変わらないわよ。ただ逃げるためだけの旅路なんて退屈だし…ねえみんな」

「あたいは構わないよ別に、寄り道は嫌いじゃない」

「ぼくも賛成だよ。なんか神秘的でわくわくするしね」

リリアの提案にイチとオニクスが共に賛同する。この時、エンドラ―ズは初めて彼女達が興味本位で生きていることを自覚させられたのは言うまでもないだろう。

「お前らなあ…分かった分かった、好きにしるよもう」

エンドラ―ズの口から思わずため息が漏れる。

「じゃ、決まりね。今日はもう日が暮れるしここで野営しましょうか。…と言うわけで、私達はキャンプの準備をするからエンドラ―ズは地図の写しをよろしくね」

「はあ！？何で俺がそんなこと…トホホ」

こうしてイチやリリア達がテントの準備に取り掛かる中、エンドラ―ズは紙にペンで地図を写すとゆうなんとも地味で面倒くさい仕事を押し付けられることになってしまう。

頑張れエンドラ―ズ、君の努力はみんな知っている…はず？

《願いは何？》

「4つの武器を集めれば願いが叶う…かあ。なんだか想像しただけでわくわくするよ」

その日の真夜中、泉の中に映りこむ半月を座って眺めるイチの姿が

あつた。

「…なんだよイチ、まだ起きていたのか」

そんな彼女の背後からエンドラースが呼びかける。オニクスとリリアは疲れて熟睡中だが、エンドラースはなかなか寝付けずにいた。

「あつ、エンドラース。いやあ、さつきからわくわくしちゃってなかなか眠れないんだよ」

後ろを振り返りながらイチがニコニコしながら言った。

「あのなあ…」

「ねね、エンドラースって何か願い事とかあるの??」

イチが興味津々にエンドラースに聞く。いつもの事とは言え、内容が内容なのでエンドラースはその問いにすぐには答えられなかった。「そうだなあ…強いて言えば最強の魔法使いになりたいって感じかな?」

イチの隣に腰掛けながら彼は言う。

「へえ…やっぱし」

「なんだよその予想してました的な顔は…そう言うイチの願いは何だよ?」

「ぼく?ぼくの願いは…えへへ、な・い・しよ!」

「あつ、こいつ…ずるいよう」

可愛い顔でそんな風に言われてしまつてはこれ以上エンドラースにはどうすることもできなかった。すると、次にイチはこんな自論を言い出す。

「でもね、願い事の8割は自分自身で何とかしなくちゃいけないって思うんだ。基本的に願いつてのは自身でしか叶えられないし叶えなくちゃいけないもの。それでもどうしても無理って部分が2割くらいはあるから、それを他の人の協力や他の力に頼る。…最初から全てを任せて願いを叶えたって、それにはきつと何の価値も無いと思うんだ」

「お前…本当に何者なんだ?」

エンドラースがそう苦笑いする。突然にそんな哲学的なことを言わ

れたら誰でも驚くだろうが、イチの場合それを自身が自覚していないからもつと驚きだ。

「それにしても静かな夜だねえ…ぼくはこうゆう静かな場所が好きだ」

「あのな…急に話の内容が変わりすぎだろう。ま、確かに俺も同感だ。たまにはこうゆうのも良いよな」

「あはは。…今日は流れ星見つかると良いなあ…」

2人はそのまましばらく静かに夜空を眺めていました。

月明かりが照らし出す銀色の雲の隙間を流れ星が横切った時、2人は果たして何を願ったのでしょうか？

…それは自分だけが知る秘密の願い…。

導きの章 第二部 レイテの森（後書き）

旅の目的もだいが深くなつてまいりました。この旅がどのようなに進んでいくのか：登場人物の心情も合わせてお楽しみ頂ければ幸いです。

それでは、次回もお楽しみに！

導きの章 第三部 斬れない柵（前書き）

これまでイチ達が旅してきたのは大陸の西端の方でしたが、いよいよ本格的に東へと旅の進路を意識し始めます。それぞれ異なった目標を胸に秘めながらも、協力し合う4人の旅路はこれからが本番です。

導きの章 第三部 斬れない柵

「…今日は随分と激しかったですね姉さん。あ、久しぶりで欲求不満なんですか？」

「ば、バカ野郎…仮にも夫婦でそんな会話があるかカエサル。てゆーか、何回も言ううただけでもうとくに夫婦なんだからいい加減その呼び方やめろよ」

ここはインベリス郊外、真夜中のロゼリアーヌ邸。ベッドの上で裸のカエサルとロゼリアーヌは性交渉の後の心地よい倦怠感の余韻に浸っていた。

「ところで姉さん、こないだプレゼントしたペンダントどうしてます？」

「ん？ああ、あの赤い首飾りのことか。あれならちゃんと持つてるよ、仕事中はしてないけどね」

「そうですか。…明日からまた家を空けるそうですね？」

「悪いが今回は大きな山でな、西方で人探しに協力せにゃあかん。だから少々帰ってこれそうにない。とりあえずサジと一緒に連れて行く予定だから心配するな。…すまん、こんな夫をほったらかしにするような妻で…」

「良いんですよ、姉さんのことは何かとよく分かっていますから。僕はいつも通り事務の仕事をしながら姉さんの帰りを待ちますよ」

「ああ…できる限り早く帰れるように努力するよ」

そう言って二人は優しく抱き合う。カエサルの優しい言葉がロゼリアーヌの心の葛藤を揺さぶった…。

《アンソルギーの町》

「おお、やっぱり素材が違つと重さも全然違つや。これならもう

少し切り返しも素早くできそう」

そう言いながら、鞘に収まったままの細身の剣を軽く素振りする白金の髪の少女とその仲間達が通りを歩いていった。

「コラコラ、いくら鞘に収まっているとは言え振り回しちゃダメでしょイチ」

リリアがそうイチに言う。

「えへへ…ごめんごめん、あまりにもフィットするものだからついイチは舌をちよっと出しておどけてみた。

一行はアンソルギーの町にいた。比較的大きな町で人もたくさんいるが、自治が強く帝国の影響が少ないのでお尋ね者の4人には最適な場所でもある。今は午後の買い物時の商店街の人ごみに紛れながら、今日の宿を探している最中だ。午前中に立ち寄った武器屋でイチは特殊金属で加工された細身で軽い剣をリリアに買ってもらって上機嫌の様子。

「それにしても、どうして銅の剣を置いてこなかったのさ？店主は引き取ってやるって言うってたのに」

エンドラーズは刃毀れた上に曲がって歪んだ銅剣を未だに大事に抱えているイチを少し不思議に思ったのか、そう彼女に尋ねる。

「ああ、これね…これは僕にとってお守りみたいなものだからね、

『大事なことを忘れないためのもの』って感じかな」

イチはあえて『幼馴染^{バル}がくれたもの』とは言わなかった。それが意図的な表現だったのか、あるいはただの気紛れなのかは分からない。

「まあいいんじゃないの？信じるものは人それぞれだし」

そう言うオニクス、どうやら彼女にとって他人の信仰心は興味の外的ようだ。

「さあさあ、遊んでいる暇は無いわよ。これから向かうのはあのアンダルシア地方なんだから、必要なものはできる限り買っておかないとね」

リリアがそう言う。アンダルシアとは大陸の中央の広範囲の地域を指す。いちおうナタリア帝国領ではあるが、内陸ゆえに自然環境が

厳しく人があまり住んでいないため未知の部分も多い。昔から『神々の住む場所がある』とか『理想郷ユトピアが存在する』とか色々と神話紛いの言い伝えの残る場所である。しかし実際にエルフやドワーフ、そして獣人など人間以外の文明を持った者達のお多くが現在まで暮らしていると言われている。イチ達のようなお尋ね者にしてみれば村や町の集中する海辺沿いを進むよりもアンダルシアを突っ切った方が好都合ではある。そして何よりも、彼女達が探すことにした武器の在り処がこのアンダルシア地方に集中しているのである。

「地図上で武器の在り処を見ると…一番近いのはアンダルシアの西の端だな。確かエルフの村があるとかどっかで聞いたな…ここからはそう遠くないよ」

エンドラースが地図の印を見ながらそう言った。

「エルフかあ…物語でしか聞いたこと無いけど一回会ってみたかったんだよね！」

「やめときなよイチ、連中は見た目は格好良いけどプライドが高くて気難しいんだ。あたい達のような獣人は野蛮呼ばわりされていて仲が悪いし」

イチの台詞にそうオニキスが指摘する。

「へえ、そうなんだ…余計に会ってみたくなったよ」

どうやら好奇心旺盛なイチにオニキスの静止を促す言葉は逆効果だったようだ。

「はあ、相変わらず呑気ねイチは。ま、細かいことはその時に考えるべきなのかもね」

リリアがため息を吐きながらそう言う。

とりあえず、当分の目的は決まった4人ではあったが…この後何を買うべきか相当悩んで苦労したことは言うまでもないだろう。

…ヒュッ！ヒュッ！

「…んん…何よこんな真夜中に…」

草木も眠る丑三つ時、不自然な風切音にリリアは目を覚ます。リリア達はアンソルギーの町の片隅にある一軒の民宿に泊まっていた。和風の平屋造りで、その音はリリアのいる個室に面した中庭から聞こえてくる。気になったリリアが寝巻きのまま中庭に出てみると、見覚えのある白金色の髪をした少女が細身の剣で何やら空を切っている。剣の鍛錬のつもりなのだろうか、その機敏で身軽な剣捌きはまるで見えない相手を翻弄するかのように見事なものであった。

「やぁリリア、起こしちゃったんだったらゴメンね。この剣、軽くて使いやすいんだけど脆いから切り込む角度が難しくて…」

そう言いながらイチは剣を鞘に収める。どのくらいの時間を鍛錬に費やしたのだろうか、イチはかなりの量の汗を掻いているように見えた。それでもリリアを見つめるその顔はいつも通りの笑顔だ。

「え、あ…もしかしてイチって剣の道の人なの？」

「はは、まさか。ぼくにとってこれは護身用のちょっとした趣味だよ。他にも弓矢とか吹き矢とかライフルとか…要するにだいたいの武器とかその類の道具は使えるよ。村にいた頃は狩猟とかもしていたからね」

リリアの質問にイチはそう答える。意外かもしれないが、どうやらイチはリリアの想像以上に才色兼備な人物のようだ。このことをエンドラーズやオニキスが知ったらきつとりリアと同じように驚くことだろう。

「ああ…そ、そうなんだ。運動神経が良さそうなのは分かってたけど、それだけ剣を扱いこなせてればグルスを倒したってのも嘘じゃないか」

リリアは心底イチの剣捌きに感心しているようだった。

「ねえねえリリア、アンダルシアってどんな所なの？」

「私も行ったことはないから詳しくは知らないよ。そうねえ…言ってみれば未知の世界ってところかな。最近は色々と異常現象が起き

て大変だつて風の噂で耳にしたことはあるけど」

イチの問いにリリアが答えると、イチがさらにこんな質問をする。

「それじゃあ、アンダルシアの次にはどこに行くの？」

「そんなのまだ決めちゃあいないよ。…少なくとも、私の目的は国を滅ぼした連中に復讐することだから…」

リリアは拳を硬く握り締めながらそう答えた。

「そっか…それも立派な目的なのかも知れないね」

イチはそうとだけ言うと、タオルで顔の汗を拭う。それから剣を持つて自分の部屋に戻り際、一言振り向くこともなくこうリリアに言った。

「復讐なんてやめた方が良くもリリア。そんなことしたつて後には何も残らない。…例えばどんな名刀でも柵しがらみや過去まで切り捨てることはできないんだよ」

そう言い残してイチは足早に自分の部屋へと戻つていった。

「イチ…」

リリアは何も言い返せなかった。

その夜、リリアは眠ることが出来なかった。あの時、振り向くことすらしなかったイチの表情や心情はどんなものだったのだろうか？彼女は自分に何を伝えたかったのだろうか？そればかりがリリアの頭に浮かんだ。

「柵しがらみや過去まで切り捨てることはできない」

あの言葉…果たしてどんな意味を持っているのか、それはイチにしか分からないのかも知れない。

導きの章 第三部 斬れない柵（後書き）

物語り全体の複雑な人間関係や思惑が見え隠れするようになってきました。これから旅を進める中で新しい人物との出会いやイチ達の成長があると思います。まだまだ序盤ではありますが、長い目でこの物語を見守ってくださいれば作者としても幸いです。

導きの章 第四部 樹海のエルフ（前書き）

旅の目的に「伝説の聖なる武器」を集めることが加わり速くも1つ目の武器のすぐ近くにまで到達することになったイチ達ですが、ことはそう簡単には行かないようです。帝国側の刺客、バイパーの魔の手が迫ります。果たしてイチ達はヴォルガン達の追跡から逃れられるのでしょうか？アングルシア地方に踏み出した旅の一行、いよいよ未知の世界へと旅立ちます。

導きの章 第四部 樹海のエルフ

「むむむ…さつきから魚は寄ってくるのにどうも調子が悪いなあ」

ピクリとも動かない釣竿を見つめながら白金の髪の少女がそう言う。

「まあ仕方ないよ、自然が相手だもの。エンドラーズとリリアが焚き火用の枝拾いから帰ってくるまでに釣れてれば良いんだけど…」

オニキスが空っぽのバケツを覗き込みながらそう言った。かれこれ一時間、食料調達係のイチとオニキスの釣果は未だゼロだ。

イチ達4人はアンソルギーの町からだいぶん離れたアンダルシアの西の端に来ていた。東へと内陸に進むにつれてどんどん人の生活の気配から遠ざかり、やがてうつそうと生い茂る森へと辿り着く。森の中に道があるはずもなく川沿いに車で上流へと遡るような形でここまで進んできたのだが、いよいよ川幅も狭くなりこれ以上の上流には車で行くことは不可能な状態である。先に進む良いアイデアも浮かばず、結局のところ今日はこの川岸に面した森の端で野宿することになったのである。目的地がそれほどはつきりしていないとはいえ、要するに足止めをくらった形となった。既に日も傾き始めていたが、明日の予定はまだ決まっていなかった。

…そんな状況下で呑気にも釣りに勤しむ2人を林の影から監視する二つの緑色の目があった。

「人間に獣人…こんな辺境の地にいったい何の用事かしら」

林の影からイチとオニキスを見ていたのは一人の少女だった。精悍な顔つきをしており、瞳と肩まで位の真っ直ぐな髪の毛はライトグリーンで耳の上の方が尖っている。動きやすそうだが小奇麗で高そうな布地を使った服装、そして弓を片手に背中には矢の入った筒を背負っていた。

「てゆうか、あいつら何勝手に私達の土地で魚なんか釣ってるのよ。他の種族がこの土地にいただけでも気に食わないのに…よし、ちょっと脅かしてさっさとここから立ち去ってもらおう」

そう言つて、少女は背中の筒から矢を一本取り出した。それを手際よく弓に掛け狙いを視線の先の2人から少しだけ離れた地面に合わせながら弓を引く。風が一瞬やんだ瞬間、彼女は矢を射った。矢は迷い無くまっすぐと飛びイチのすぐ隣の地面に小石を跳ね上げながら突き刺さった。

「わわっ！？？なんだなんだ？？」

急に飛んできた物体にイチは驚いて飛び上がった。矢を射た少女の思惑通り、これで2人がここから立ち去ってくれると思いきや…

「てめえっ、なんのつもりだこの野郎！！！」

小さいながらに気性の激しいオニキスが逃げるどころかいきなり少女に向かって飛び掛つてきたではないか！

「きゃあ！ちよっ…待っ…痛っ」

オニキスに懷に突つ込まれた少女は思わず地面に押し倒されてしまった。オニキスの鋭い爪が彼女の白くて綺麗な腕に食い込み激痛と出血が彼女を襲う。そこはさすが獣人、小さくても鋭い猛獣の眼に睨まれた少女には成すすべが無い。オニキスが少女の喉笛に牙を突き立てようとした…その時、

「待つてオニキス！乱暴はダメだよ！」

間一髪のところではイチが止めに入った。

「なにさイチ、こいつはあたい達を殺そうとしたんだよ？ここで甘やかしたらろくなことない」

「それは違うよオニキス、こんな近距離で矢を外す下手な弓手もそうはいないよ。…ね？そうなんでしょ？本当はちよつと驚かしてやるうとしただけなんだよね？」

イチがそう優しく少女に話しかけると、

「うっ…ひっく…えっぐ…ひどいよお、私はただ縄張りで勝手に釣りをしていたあんた達を追い出そうとしただけなのに…」

そう言つて泣き出してしまった。よくよく見てみればオニキスとの格闘のせいで腕は血まみれ体は泥まみれ、それはもう酷いと言うか可愛そうなくらいの状態である。

「あーあ…これは酷いや、まずは止血して消毒しないと。オニキス、悪いけど荷物の中から治療に使えるような物を持ってきてくれる？」
「おいおい冗談でしょイチ？そんな奴を助ける義理なんてあたいた達にはないし」

オニキスがそう断ると…

「…いいから、早く持つてきて頂戴」

普段は穏やかなイチが珍しく恐いくらいに強い口調と威圧的な態度で言い返した。

「うつ…わ、分かったよ。分かったからちょっと待ってよ」

オニキスは慌てて荷物の中から清潔なタオルやら包帯やら消毒液やらを探し出す。無理も無い、あんな恐いイチを見るのは初めてだったから。

「ありがとうオニキス。それじゃあ手当てするから動かないでね、えーと…」

「…ノエル。エルフ属のノエルよ」

落ち着きを取り戻した緑色の瞳の少女は座りなおしながらそう名乗った。

「えっ、ノエルってエルフなの？すごいやすごいや！ぼく、エルフを見るの初めてなんだ〜！ぼくはイチ、よろしくね」

「はあ…まあ、よろしく」

急にハイテンションになったイチにノエルは戸惑いを隠せないようだ。もちろん、イチが異種族であり弓で撃とうとした自分を助ける理由が理解できなかったこともあるが。とりあえず、イチが手際よく血まみれの腕を消毒して包帯を巻いてくれるのでノエルは黙って成り行きを見守ることにした。

「ちえっ！なんだよ、面白くないの…」

なんだか急に蚊帳の外になってしまったような感じを受けたオニキスはその寂しさを紛らわすかのように再び釣りを始めた。皮肉なことにすぐに魚が針に食い付く様になり面白いように釣れたが、オニキスは何にも嬉しくなかった。

…水面に映った自分の顔を見て、なんだかちょっとだけ泣きそうな気分になつた。

《エルフと獣人と人間》

「へえ、俺とリリアがいない間にそんなことがあつたとは…」

エンドローズが焼いた魚に嚙り付きながらそう言う。

「あまり言いたくはないけど、我々エルフを含め様々な種族がどうゆう目で人間を見ているかは知ってるよね？まあ…あなた達は私達にとつては良い人の集まりみたいだけど」

ノエルがちよつと複雑そうな表情で言つた。

ノエルがこの人間達と出会つてから数時間、まさかこれほどまでに仲良く話せるようになるとは彼女自身が一番驚いているのかも知れない。オニキスの釣つた魚と本当は果実摘みに森に来ていたノエルが持っていたブルーベリーやキイチゴも加わつて総勢5人の夕食は会話もはずんで豪華なものになつていた。

「こいつらは根っからのお人好しだよ、あたいが断言するね」

オニキスがちよつと皮肉を込めて言う。

「えー、オニキスだつて人のことは言えないでしょ？今までだつてぼくのことを何度も助けてくれた」

イチが屈託の無い笑顔でオニキスに言つた。

「そつ、それはイチには牢屋から出してもらつた借りがあるし…べ、別に人間が好きなのじゃないんだからな」

オニキスは照れくさくて顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうにそつぽを向くが、内心はきつと嬉しかったに違いない。それは遠まわしに昼間のことをイチが正当化してくれたことを意味するからだ。

「異種族間でこれだけ話し合える機会もそうそうないわよね。もつとも、今は人間と話することなんて危険すぎてお尋ね者の私達にはで

きないけれど」

リリアがそう苦笑いする。

「だいたいの話はイチから聞いたよ。あのナタリア帝国を敵に回すなんて…流れとは言え正気の沙汰とは思えないよ」

「うんうん、全くその通りだ。あたいがいなかったら今頃みんな死んでるね、うん」

ノエルにオニキスが深く頷きながら賛同した。

「まあ、強ち間違いじゃないけどさ、そいつはちよつと大げさだぜオニキス。…ところでノエルだっけ？ちよつと聞きたいことがあるんだけどこの場所を知らないか？」

そう言いながらエンドラースが聖なる武器の在り処を示した地図のこの辺りに最も近いと思われる場所の星印を指差しながらノエルに見せる。

「あー…知っていることには知っているけどやめた方が良くよ、この場所には私達でも絶対に近付かないの」

「え、どうして??」

イチがノエルにそう尋ねる。

「昔からその場所には魔物が住むと言われているの。詳しいことは私にも分からないけど、何でも数百年も生きている吸血鬼の類が古い城の跡に住み着いているらしいよ。確かに、宝物とかがあるみたいなのは聞いたことあるわ」

ノエルがそう答えた。

「吸血鬼ねえ、そう言えば小さい頃に昔話で聞いたことあるかも…森の奥深くに住む蚊の妖精のお話」

「蚊の妖精?なんかあんまりパツとしないな…」

リリアの昔話の内容にエンドラースが少し苦笑いする。

「そうそう、話は変わるけど明日にでも私達の村に来ない?確かに私達は人間とか獣人は嫌いだけど…色々世話になった恩人^{エルフ}にはそれなりの感謝を示すのもまた私達の流儀。もともと私が蒔いた種でこうなちゃったわけだし、村長様は穩健派だからきつと大丈夫なは

ず。村長様に聞けばあなた達の探している物の情報も手に入るかもよ」

ノエルがそう提案してくれたので、

「エルフのみんなってどんな暮らししているのかな？？？ご馳走も出たりする？」

イチが嬉しそうにはしゃぐ。

「あのさ、あくまでもけっして仲良くない種族同士なんだからもう少しその軽い考え方は改めた方が良くないか？あたいは思うんだけど」

オニキスがそう釘を刺す。

「まあまあ、ノエルが誘ってくれてるんだから良いじゃないか。ダメだったらダメでそれは立ち去れば良い話なんだし、俺は賛成だぜ」
「そうそう、少なくとも帝国関係者に見つからないだけありがたいと思うよ」

エンドラースとリリアがそう言った。どうやらエンドラースとリリアにとって歓迎されるか否かはあまり関係無いらしい。

「うう…ま、イチがそれを望むならあたいはそれに着いていくまでだよ」

ノエルと仲良く話すイチを横目で見ながらオニキスが怪訝な表情で言う。

結局、明日にエルフの村に行くことが決まってから5人は特に堅苦しいことは抜きに他愛も無い話を夜が更けるまで楽しんだ。しかし、終始オニキスの表情は複雑そうであった。それは警戒心の薄いイチ達への不信感と言うよりは、これほどまでに誰とでも心を通わせてしまう彼女達の心の広さへの不思議さを忌み嫌われる獣人としての立場から感じていたのかも知れない。

「ふーん…で、要するにこの連中を生け捕りにして差し出せと。お前はそう言いたいわけ？」

黒と白の斑のコントラストを持った長い髪の毛を右手で撫でながら、左手に持った数枚の写真を見てその女は言った。

「ずいぶんと物分かりが良い様だなアノフェレス」

黒髪短髪で金色の瞳を持つ男がそう薄笑いを浮かべる。

ここはアンダルシアの西の端、とある深い森の奥の古城。壊れた壁から差す月明かりの下で何やら話す2人の人影があった。親しいものの同士の会話ではなく、初対面の者同士の商談のようなどこか腹の探りあいのような雰囲気漂っていた。

「別にまだ承諾したわけじゃないんだけど。こんなことをして何の得が私にあると言うのバイパー？」

アノフェレスが怪訝そうに聞く。

「そうだなあ、エルフの土地をくれてやるよ。お前がエルフ嫌いなのは知っている、何せもともとあそこもお前の土地だったからな。この件が成功した暁にはエルフを一人残らずお前の土地から消してやる」

「へえ、ずいぶんと自身あり気なのねバイパー。人間の割には度胸があるじゃない。…いいでしょう、その代わりもし約束を破ったらあんたの血を全て抜き取るつもりだからお忘れなく」

バイパーの提案にアノフェレスは不気味な笑みを浮かべながら首を小さく縦に振った。

「ああ、ちゃんと覚えておくよ。…生憎だが俺はもう人間とは決別したからな、あの薄汚い獣のような嘘はつかん」

交渉の最後にバイパーはそう意味深な言葉で返答した。

…イチ達の知らないところで魔の手が確実に迫っていた。まるで見えない暗闇を音もなく近づく蚊のように…。

導きの章 第四部 樹海のエルフ（後書き）

影を覗かせる新たなる刺客の恐怖、その姿は次回明らかになるでしょう。この旅を通して人間と異種族との関係も少しずつ明らかになっていきます。イチが垣間見るのは果たして人間のエゴだけなのかそれとも…？これから先、世界が抱える様々な「負の部分」が彼女達を翻弄していくことになるでしょう。それに対してどう立ち向かうのか…今後の展開もお楽しみに。

導きの章 第五部 モスキート・クイーン（前書き）

《ここまでのあらすじ》

極西の地で育った少女イチが日常の繰り返しから抜け出す目的で旅を始め、近くの村で魔法使いの少年エンドラズと出会う。そしてひょんなことから村を牛耳っていた魔物を倒してしまい、背後に渦巻く東の大国ナタリア帝国とその裏で糸を引く魔族の陰謀に巻き込まれることになる。一度はエンドラズと別れたイチだったが旅先でアラカイト国の姫であるリリアと出会い、ナタリア帝国に立ち向かうように誘われるがその矢先にエンドラズと共に帝国の軍人ヴォルガノンによって砦に捕らえられてしまう。間一髪、謎の女性ロゼリアーナの計らいで何とか砦を脱出しリリアの母国アラカイトに逃げ込むイチ達。しかし、ヴォルガノンによる帝国軍の侵攻でアラカイトは占領されイチ達は国を追われてしまう。ここでも謎の女性ロゼリアーナの助けで何とか逃げ延び、同時に城に捕らえられていた獣人オニクスが仲間に加わる。帝国の追っ手から逃げる日々の中、神の助言もあってイチ達は願いを叶える伝説の武器の存在を知る。それぞれの願いを叶えるため、イチ達は4つの聖なる武器を集めることを決心するのであった。

導きの章 第五部 モスキート・クイーン

「なるほどな、お主達の気持ちは分かった。この先、車で通れそうな道も教えるし必要な物はできるだけ提供しよう。…じゃが、この村に留まるのは一日だけにしておくれ。昔ほど隔たりがないとは言え、我々エルフとて未だに人間と分かり合えるような状況ではないのだ」

そう白髭を蓄えたエルフの長老が言う。

「ありがとうございます長老。…分かりました、用事が済んだらすぐにでも村を出ます」

リリアがそう言いながら頭を深々と下げる。

「隔たりか…まあ、人間のエゴが酷いのは俺らも承知つてか」

リリアが愛想良くしているその隣でエンドラーズは小声で皮肉を呟くのであった。

先日出会ったエルフの少女、ノエルの好意でイチ達は森の奥深くにあるエルフの村にいた。村について小一時間、リリアとエンドラーズは村長に挨拶と協力をお願いをしていたところである。

「あー、ところでリリア？イチとオニキスは？」

「たぶんノエルと一緒に村の探索でもしていると思うわ。あの二人はこうゆう大人の話し合いは苦手だって。あ、でもあなたはダメよエンドラーズ。あなたにはこれから私と一緒に物資の調達やら今後の予定を立てたりやらしてもらうんだから。…めんどくさいからって勝手にどっか行ったらブン殴るわよ？」

「へいへい、分かりましたよお姫様。…は、人使いの荒いやつ」
エンドラーズはため息混じりに肩を落とした。でも、イチやオニキスに任せられないのだから仕方ない。せめてもの救いはきつい性格はともかくリリアの容姿が綺麗なこくらいだろう。

《さらわれたイチ》

「ねえねえ、どうしてこの村の人達は変な目でぼく達を見るのかな？…ぼくってそんなに変な顔してる？？」

イチが自分のほつぺたを触りながらそう言った。

ここは村はずれの草原、難しい話が嫌いなイチはオニクスとノエルと共に村の中を歩き回っていたのだがエルフの村人達のただならぬ視線が気になったので人気の無いこの場所に落ち着くことにしたのである。三人は爽やかな風を浴び穏やかな空を眺めながら色々話す。「なんでそうなるかな？あのね、異種族間の眼差しなんてこんなもんだよ。人間が獣人を見たときのようにね。あんたのように何に對しても対応が変わらないのは珍しいよイチ」

オニクスが半分呆れて言う。無理もない、今のこの世界では人種差別はともかく異種族間の対立は根深いからだ。そしてその歴史的背景も現状も基本的にはこの世界の住人ならば誰もが知っているような常識であった。もともと、それ以前にイチが神がかり的な世間知らずであるのも事実だが…。

「イチのような人間の手前、言うべきじゃないかも知れないけど…かつて人間と異種族は激しく対立してたの。要するに戦争の類で結果的には人間側が勝ったもんで他の種族はみんな住み良い土地からは追い出されちゃった。…私たちエルフやオニクスのような獣人もね」

ノエルがちよつと寂しげに言った。

「そつか…そんなことがあるなんてぼくちつとも知らなかったよ。

…なんかゴメン」

「い、いや、イチが謝ることはないさ。今はそれこそ終息化しつつあるし人間側のバックには魔族の連中が付いてたって噂もあるし…何にせよイチは良いやつだよ、あたいが保障する！」

落ち込むイチをオニクスが励まそうとそんなことを言うつと、

「魔族？それってあんまり聞いたことない単語だね？？」

急に目を輝かせてそうオニキスに詰め寄る。：「どうやら好奇心旺盛なイチにとつて知らない単語は格好の獲物だったようだ。彼女の態度の急変に戸惑いながらもオニキスはこう説明する。

「あ、ああ：魔族つてのは要するに人間と魔物モンスターの特徴を半分ずつ持った連中だよ。もともとは外の世界から来たとか何とか：詳しいことはあたいにも分からないよ」

「ただ、もつぱら良いイメージはないわね。人間以上に他種族を迫害し自分達が世界の征服者だと思い込んでる危ない連中つてことになつてるし」

オニキスの説明にノエルがそう捕捉を加える。

「ふーん、そうなんだ…」

今までの話に飽きたのだろうか、イチは空をただ見つめながらそうとだけ言った。

「イチは暇さえあればいつも空を見てるなあ。何か思い入れでもあんの？」

イチの視線が常に空にあることが気になったオニキスが話題を変えがてらそう聞く。

「うっん、別にそうじゃないよ。ただね、この空を飛べたらどんなに素晴らしいだろうって。物心ついた時からずっと空を飛び回るところを夢見てきたんだ。地上のくだらない柵を忘れて自由に好きなところに飛んで行きたい気分になんか」

それまでの話を踏まえてイチがそう言ったのかは定かではない、けれどもオニキスとノエルにはそれが昨今の世の中に対する皮肉に聴こえてならなかった。

そんなちよつと切なくなるような話をしていた時であった：突然、風が強くなったと思ったら3人の後ろから物凄い騒音が響き渡った。驚いた3人が振り向くと目の前には見たこともないような巨大な影があつた。

「!!!？」

3人の背後で凄まじい風と騒音をもたらした犯人：それは軽自動車

ほどもある大きなガガンボだった。不意をつかれ3人が驚いたり反応する間もなく、巨大なガガンボはその細長い6本の脚でイチの体をがっしりと掴むとそのまま宙に浮き上がった！

「わぁっ！！なに！？空飛んでるのぼく！？？」

急な出来事にイチは半分パニック状態のようだ。彼女がジタバタもがいてもガガンボはその脚による束縛を緩めてはくれない。

「くそっ、こいつ！イチを放せっ！って、うわぁー！」

イチを助け出そうとガガンボに飛びかかるうとしたオニクスであったが、体重の軽い彼女はその高速で羽ばたく羽が生み出す風圧で数メートル離れた草地まで吹き飛ばされてしまった。ノエルも吹き飛ばされはしなかったが、やはりその凄まじい風圧で身動きが取れない。2人が救出の手を拱いているうちにガガンボの化物はその脚にイチを抱えたまま大空の彼方へと飛び去ってしまった…。

「だ…大丈夫オニクス？」

ノエルが吹き飛ばされたオニクスに急いで駆け寄る。

「いてて…あたいは平気だけど、今のお化け虫は一体何なんだ！？」

「たぶん吸血鬼の手下だよ、だってあんな化物この森にいないもの。きつとイチをさらって彼女の生き血を吸う気だよ！」

オニクスの質問にノエルが顔を真っ青にして答えた。

「なんだって！？くっそ、命の恩人を吸血鬼のディナーにさせてたまるかってんだよ！行くぞノエル、一度村に帰って助けを呼ぼう」

「う、うん分かったよオニクス！」

これは大変なことになった、そう直感したオニクスとノエルは一目散に村へと引き返していった。

《蚊の妖精と森の奥の古城》

…暗い天井、冷たくて硬い床…自分が今いる所が小さな牢屋の中であることに気が付くのに目覚めてから随分と時間が掛かった。鉄格

子の付いた窓から僅かな月明かりが差し込む、どうやら連れ去られてから長いこと気を失っていたようである。

「うーん…ここはいつたいどこなんだろう？なんでぼくはここに？」

背伸びして格子の間から窓の外を眺めながらイチは考える。目下には薄暗い森の樹冠が月明かりを浴びて深緑色の海を作っていた。

「あら…どうやらお目覚めのようなね、よく眠れたかしら？」

見知らぬ声にイチが振り返ると、牢屋越しに一人の女性が立っていた。女性の右手に持たれた蠟燭の明かりが彼女の不適な微笑と白黒だけで彩られた体軀を照らし出す。

「まあね、気分は悪くないよ。…まさか人生初飛行があんな形になるなんて、きつと神様も分からなかっただろうね」

そうイチが苦笑いしながら返事を返す。

「あはは、面白い娘。武器も取り上げられた状態でよくまあそんな余裕な態度が取れるのねあなた」

そう言つて女性がイチの気を失っている間に没収した剣をチラつかせると、

「それを必要とする時はぼくにとつての最終手段の時だよ、いずれにしろ今は必要ないから手元になくても問題ない。それよりもぼくはあなたが誰で何をしたいのかに興味がある」

イチは相変わらずそうニコニコしながら答えた。どうやらこの状態では武器があつてもなくても現状が変わらないのと、相手が自分に對してさほど殺意を抱いていないことをイチは本能的に察知したようである。

「へえ、なかなか肝が据わつてるじゃない。私はアノフェレス、まあいわゆる蚊の妖精よ」

そうアノフェレスが自己紹介する。イチは彼女が言つた蚊の妖精とゆうその言葉に聞き覚えがあつた。

「それって確かノエルが言つてたっけ？吸血鬼がどーのこーのって」

「人々は私のこと吸血鬼って言っけど、蚊が血を必要とするときは」

子供を産むときだけだよ。生憎、私は妊娠中じゃない。あんたを捕らえたかったのは別の理由だよイチ」

「えっ、どうしてばくの名前を？ばくってそんなに有名人かなあ」

「まさか違うよ。ちよいと頼まれたんだ、あんたとその仲間達を生け捕りにして突き出せばエルフの連中からこの広大な土地を取り返してくれるってな」

アノフェレスがイチの疑問に対してそう語った。

「誰に頼まれたの？」

イチがそう尋ねると、

「それは言えないよ、いちおう機密だからね」

アノフェレスが当たり前のように答える。

「悪いこと言わないからやめた方が良くと思うよそうゆづの。ばくがあなたの立場だったらそんな口車には乗らないと思う」

「なんだい、小娘の分際でこの私に説教するのかい？」

イチがなんだか哀れみの眼差しで自分を眺めるのでアノフェレスは少々ムツとしたようだ。

「うー…まあ確かにばくにそれをやめさせる権限はないよね。ばくをどうしようと勝手だけど友達に手を出すのはちよつと勘弁して欲しいな、どうせ目的の無い先の見えない旅の途中なんだしばくが死んでもそう世界は変わらない」

彼女の台詞にアノフェレスは少し驚いた。この何かを悟ったような感じの発言は今まで会ってきた人物とは少し違った不思議な印象を受ける。アノフェレスの心は何か得体の知れない未知の力によって大きく揺さぶられた。

「ふーん…あんたって本当に面白い娘ね。野郎に引き渡す前に色々話してみたくなつたよ」

しばらくまじまじとイチを見ていたアノフェレスであつたが、何を思ったか服の袖口から鍵を取り出すとそれを使ってイチの拘束されていた牢屋の扉を開けた。

「！」

「勘違いしないでよ、変な真似したらただじゃ済まないから。夕食がてら、ただ退屈凌ぎに色々話したいだけ」

急な展開に驚いた様子のイチにアノフェレスがそう念をおして言った。自分でもなんでこんなことをしているのかアノフェレスは自分で自分を理解できなかったに違いない。それでも自分相手に全く物怖じしないこの娘に少なからず驚きと興味関心を抱いてしまったことは間違いなかった。

「一緒に夕食を食べれるの！？わーい、楽しみだなあ」

そう言つて牢屋から出て無邪気にはしゃぐ彼女を見て、アノフェレスも満更ではないようだ。どうゆう理由か、アノフェレスにはどうしてもこの娘が放っておけなかったのかも知れない。

《感じるもの》

「いやあ、良い湯でしたねロゼリアーヌ様！」

「ただのホテルの部屋付属の風呂で大袈裟だよサジ。…ま、退屈な長旅に入浴は欠かせんがな」

深夜、港町ポートリスのちよつと高級なホテルの一室でロゼリアーヌとサジが何気なく会話していた。無論、2人がこの町に来たのはちゃんと理由があつてのこと。

「それにしてもどうして軍用機を使わなかったんですか？いくら西方とは言え仮にも帝国の領地だと言うのに」

「もちろんわたしだって使いたかったさ。…ただ、この件は色んな意味で極秘だ。軍の名義で動くわけにはいかないんだよ。じゃなきゃこんな列車と車を乗り継いで数日間の小旅行もどきなんてしていない」

サジの質問にそうロゼリアーヌが口を尖らせる。簡単に言えば単なる人探しなわけだが、何せ事が複雑になり過ぎた。

「全く…まさかグルス殺しの犯人と逃亡した亡国の王妃が一緒にい

るなんて。酷い運命の悪戯だなこりゃ」

ロゼリアーヌがため息混じりに言った。グルスの件についてはヴオルガノンと極秘に絡んでやったことなので本国に密輸のことを知られたくはない。王妃^{リリア}については軍が正式に動いているが、それとは別働隊として自分と他にも数人が極秘に動いていることをコロツサルからは聞かされていた。要するに自分が一番先にイチ達一味を捕捉するなり消すなりしなければならことになる。

「とりあえずアンダルシアに入った情報は得たが、どうやって探し出すかな」

「アンダルシアって一口に言っても広大ですからねえ」

「全くだ、広大な内陸の未開拓の土地の何処を探せば良いのか検討もつかん」

ロゼリアーヌが大きなため息をつく。

「まあ…こんなこと言ったら変かも知れませんが、私としてはこのままイチが見つからないで何処か静かな場所でひっそりと幸せに暮らしてくればそれで良いのですが…」

サジがそう本音を漏らす。一度ならず二度も助けた少女を自ら捕らえに行くのにはやはり抵抗があるようだ。

「…お前の気持ちは良く分かる。ただ、三度目はもう無しにしないか？このまま彼女^{イチ}を生かしておいてもお前の重荷が増えるだけだ。

もちろん、私も無理に彼女を殺す気は無い。…ただ…」

「ただ？ただ何です？」

「いや、気のせいかも知れんが…あの娘は普通じゃない気がするんだ」

ロゼリアーヌがそう声のトーンを落として言う。

「私も始めてあの娘に会った時、何か特別なものを感じた覚えがあります。今となってはそれが何だったのか…いやいや、きっとそれでも気のせいですよ。あの娘はちよつと変わっているだけなんです」
サジは台詞の後半笑ってそう言った。

「ああ、そうだな。きっと考えすぎに違いない。…もう寝よう、明

日からはまた長い一日が始まる」

ロゼリアーヌのその言葉を最後に2人は眠りについた。

2人がイチに感じた不思議な感覚…この時はまだそれが単なる気のせいだと信じていた。しかし、この『違和感』が気のせいではなかったことを2人が知るのはもっとずっと後になってからのことなのです…。

導きの章 第五部 モスキート・クイーン（後書き）

《様々な人種》

今まで登場したワードだけでも「人間」「エルフ」「獣人」「魔族」など様々な種族がこの世界には暮らしています。基本的にはそれぞれの種族は仲が悪く、特に人間は過去の勢力争いに関係して他種族から嫌われています。物語では他にも様々な種族が登場しますが、特に人間と魔族の關係に注目して話が進んで行く事が多いようです。

導きの章 第六部 大魔導師の杖（前書き）

いよいよ本格的に世界中を旅することになったイチ達、きっとこれからたくさんの場所で色々な人や種族に出会うことになるでしょう。今回もそんな旅路のページです。最初の伝説の武器の登場やイチのまだ見ぬ秘密の一端など見所満載でお送り致します。

導きの章 第六部 大魔導師の杖

《アノフェレスのアジト》

「ふう、ご馳走様。とっても美味しかったよ」

空の皿を前にイチがそう満足気にテーブル越しに座るアノフェレスに言う。

ここは古びた城の中にある一室、小さいが高級そうなテーブルを中心にアノフェレスとイチの二人が食卓をイチの旅の話も交えて囲んでいるところである。少し遅めの夕食と言うこともあったのだろうが、イチはその華奢な体軀からは考えられないような大量の料理をペロリと平らげていた。きつと田舎育ちのイチには味の濃いレトルトカレーやインスタント食品は珍しかったのだろう。

「まあ、レトルトやインスタント食品で喜んでくれるなんて安上がりで有難いねアンタ」

そんなイチの様子を見てアノフェレスがワインを飲みながらそう話しかける。彼女^{アノフェレス}は本当はとても優しくて気前の良い奴だから、イチのような天真爛漫な年下の少女に悪くしたくはないようであった。まるで年下の後輩と食事に行ったかのように振る舞いイチのワイングラスに赤ワインを注いでやるところから見てもアノフェレスがイチに好感を抱いていることは確かである。

「いいの？ ぼくを捕らえて引き渡すのがあなたの仕事なのに…」

アノフェレスがあまりにも優しいのでさすがのイチも少々不安になつてきた様子。とは言え、グラスに注がれたワインを飲み干す姿を見るとさほど危機感を感じていないようだが。ちなみにイチはアルコールの類には滅法強いからまるで子供がジュースをがぶ飲みするような感覚でワインを胃袋に流し込んでいた。

「まあ…それはそうかも知れないけどね。食事中のあんたの旅の話聞いていたらすっかりそんなことはどうでもよくなっちゃて。イ

チは良い仲間に恵まれたね、独りぼちの私と違って」

アノフェレスはそう苦笑いしてみせる。でも、その瞳は何処かとても寂しそうだ。独りでこの城に住む彼女にとって、仲間達と旅をするイチはきつと羨ましかったに違いない。

「そんな顔しないで。あなただってきつと独りじゃない」

「はは、あんたのように異種族にそんな優しく自然に接することができるやつなんて本当に珍しいよ。…私も長いことこの地でエルフ達と対立してきた身だ、世の中じゃみんな自分の種族が一番だって思っている。だからいつまで経っても世の中が平和にならんのだ…そんなことを言っている間に同種族からも見放されて今じゃ独りぼちになっちまった、情けない話だよ」

アノフェレスがそう半笑いしながら皮肉を言うと、珍しくイチが声を荒げてこう言った。

「違う！あなたは間違ってるんじゃない！もし…もし、あなたが本当に自分が独りだと思っているんだらばくがそうはさせない」

「お前…本気で私のことを…」

まだ会って数時間しか経っていない異種族の赤の他人に対してここまで本気で接してくる人物をアノフェレスは今まで見たことがなかった。それ故にイチの言葉がとても優しく、でも深く心に刻まれた…それからしばらくの間があったが、ここでアノフェレスがあることを思い出す。

「そう言えば…さっきイチは伝説の武器を探しているとか言っていたな？」

「え…あ、はい」

突然会話の内容が変わったのでイチは反射的にそう頷くのがやっとの様子。

「確かそんな肩書きの武器がこの城の物置にあったはずだ。付いて来い、見せてあげるよ」

「えっ！？伝説の武器が物置につて…なんだかなあ」

テンポの速い展開にイマイチ納得のいかないイチだったが、細かい

ことを気にしても仕方がないのでアノフェレスの言うがままに彼女に付いて行くことにした。

部屋を出て暗くて曲がりくねった廊下をひたすら進み、階段をいくつも降りる…イチが城の何処にいるのかすら分からなくなつた頃、とある部屋の前でアノフェレスが足を止める。

「私がこの城に住み着く以前からここには誰もいなかったみたいだな、この物置にも以前の住民の所有物なのか色々わけの分からん物がたくさんおいてあるんだ」

そう苦笑いしながらアノフェレスはその部屋のドアを開ける。彼女の持つランプが部屋の中を明るく照らし出すが、埃と蜘蛛の巣だらけで何が何処に置いてあるのかちよつと見ただけでは分からないほど中は散らかっていた。

「えーっと、確かこの辺りに置いてあつたはず…これでもないしあれでもないし…あつ、あつたあつたこの杖だな」

埃まみれになりながらアノフェレスがそう一本の杖を部屋から持ち出す。その白い杖はイチの身長と同じくらい長く、複雑な形状の先端の部分はいくつもの宝玉や貴金属の縁取りで美しく装飾されていた。

「ほえー、普通のお店で売っている杖とは全然違うね！」

そのあまりの神々しい輝きにイチはただただ感動している様子。

「ライブベアラーはかつて名のある大魔導師がその一生を賭けて作つたといわれる魔法使い用の杖の最高峰…つて、本には書いてあつたよ。まさかこんなものが家にあるとは夢にも思わなかったけど」
そう言いながらアノフェレスがライブベアラーをイチに手渡す。その大きさに見合わない非常に軽くて手に馴染む感じにイチは驚いた。その洗練されたシルエツトからもこの杖が特別な物であることはすぐに分かった。

「ま、これは元々人間の作つたものだからな…あんたにくれてやるよ、私には必要無いものだし」

「えっ！？いいの？」

アノフェレスの申し出にイチがそう聞き返すと、

「構わないよ、あんたが話してくれた面白い旅の話で退屈が紛れたしそのお礼だよ」

アノフェレス
彼女はそうウインクしながら優しくイチの方を叩いてくれた。それから少し間を空けて、何かを決心したかのような口調で静かに彼女はこうも呟く。

「…それじゃ、そろそろ行かないとな。もたもたしていると奴が来てしまうからな」

《エルフの村》

「だーかーらっ！何も一緒に鬼退治に行ってくれなんて頼んでないの！ただ場所が分かんないから道案内さえしてくればあとは私達がイチを誘拐した犯人をブチのめすって言うてるじゃない！」

そんな物凄い剣幕でリリアがエルフの村長に詰め寄る。イチがさらわれてから半日、辺りはすっかり暗くなっていた。明るいうちに助けに行ければよかったのだが、どうもエルフ達はイチの救出には積極的でない。どうやらイチをさらった犯人とは昔から因縁があるようであまり関わりたくない様子だが、そんなことはリリアには関係無い。

「無茶言わないでよりリリア！夜の森はとても危険なんだ、せめて夜が明けてからじゃないと…」

詰め寄られて焦りのあまり上手く言葉を発せられない村長に代わってノエルがそう代弁する。確かに夜の森が危険だということくらいリリアだって知ってはいた。しかし、何よりもイチの安否が心配だったしそれはエンドラースやオニクスも同じ気持ちだった。

「今はそんな悠長なことを言ってる場合じゃないだろう、明日行つてからじゃ手遅れになるかも知れないんだぞ」

平静を装ってエンドラースがそう言うが、心中は穏やかではなかつ

た。

「そつだそつだ！相手が誰だろうとこのあたいが木っ端微塵にしてやるんだからっ」

オニキスはピヨンピヨン飛び跳ねて敵に殴りかかる真似をする。でも、そんなことをしてもただ虚しいだけであつた。

「いや、でもなあ…相手は数百年も生きている魔物だつて言つし…俺達じゃとても無理だよな」

村長の家に集まつていた村のエルフ達の中からチラホラそんな弱音が聞こえてくる。…そんな状態が続いていた時だつた、一人の村人が慌ててこちらに走ってくる。

「みんな大変だ！さらわれた女の子が戻ってきたぞ！」

「！」

「…本当に良いの？」

「何度も聞くな、私は自分のしたいようにするだけだ」

エルフの村の入り口、そこでイチに尋ねられたアノフェレスはキツパリとそう答えた。イチからして見れば誘拐犯とそれを救出する人物が同一人物であるわけだから不思議に思つのも無理はない。

「イチ！無事だったのか！」

村の奥の方から血相を変えたエンドラーズが息の上がるような全力疾走で真つ先にイチのもとに駆け寄る。

「大丈夫か！？怪我はないか！？何か変なことされなかったか！？」

よつぱど慌てていたのか、ゼエゼエ言いながらエンドラーズはイチの両肩を掴んで前後に揺らす。

「わ、わっ！ちよつと落ち着いてよエンドラーズ、ぼくは無事だし何もされてないよ。それよりもお土産まで貰っちゃった。はいこれ、伝説の武器の一つライブベアラーね。きっとこれは魔法使いのエンドラーズに似合うと思うんだ」

そつ言つてイチは不自然なほど自然にライブベアラーをエンドラー

ズに手渡した。

「へ？え？あ、はい…あ、ありがとう…؟؟？」

マイペース過ぎるイチにエンドラースはなにがなんだかさっぱり分からない、ただ言われるがままにその妙に手にフィットする美しく大きな杖を受け取るしかない。

「ホント、心配してたのが損みたいにケロっと帰ってくるんだから」後から来たリリアはそんなことを言いながらイチに歩み寄った。

「イチー！無事でよかったぁー！」

オニキスは駆け寄るなり半ベそをかいてイチの胸に勢いよく飛び込んだ。友人が目の前で浚われたのだからその心配具合も人一倍だったはず、きつと緊張が急に解けたのだらう。

「あはは、痛いよオニキス！ごめんね心配させちゃって」

イチもそう喜びを表現するかのようにオニキスを優しく抱きしめた。しかし、すぐにみんなの視線は隣の見慣れない人物に向かい急に雰囲気が悪くなるのは必至である。

「…それで、貴女はどちらさまかしら？」

リリアがアノフェレスにそう尋ねる。もともと、勘の鋭いリリアのことだから相手が何者であるかは大体予想がついていたのであろうが。

「私はアノフェレス。ああそうさ、私がイチを連れ去った本人だよ。でもちゃんと無傷で返してやったんだから文句はないだらう？」

「て、てめえなんだよその態度！覚悟はできているんだらうな！？」開き直ったような態度のアノフェレスに対してエンドラースが怒りの感情を露にする。そうこうしているうちに、ノエルや騒ぎを聞きつけた村人たちが続々とその場に集まってきた。

「あっ、お前は森の魔物！俺達の村に入ってくるとは良い度胸だな、今日こそ決着を付けてやる」

「自惚れもいい加減にしやがれエルフ。昔から気に食わない種族なのは変わらないな」

そんな感じでアノフェレスと村人達との言い争いが始まってしまっ

た。この世の中じゃこんなことは珍しくない、他の種族と仲良くすることなどありえないのが常識の世界。アノフェレスにしろエルフにしろ、この土地に余所者がいること自体が気に食わないのである。戦乱の時代が度々続いた背景があるからどの種族も気が立っているには違いない。

エンドドラーズもリリアもオニキスもその様子をしばらくの間遠巻きに見ていた。そうするしかなかった、こればかりは自分達のようなそれこそ余所者には口出しできる問題ではないと認識していたからである。…ただ一人を除いて。

「もうっ、いいかげんにしてよ!!」

その怒鳴り声の一言で今まで騒々しかった周囲が一瞬で静まり返る、それと同時にその声の主がああ温かなイチであつたことに誰もが驚いた。呆氣にとられる人々を他所に彼女^{イチ}は荒々しい口調でさらにこう続ける。

「異種族だからとか世界の常識がそうだからとかそんなくだらないことで争わないでよ!こんなだからいつまでたっても本当の平和が訪れないんじゃないの!?…なんて愚かで醜い、自信を正義だと思いつけるのが最も忌むべき悪だと言うのに」

この時、イチの豹変ぶりに驚く一行の中でも冷静なエンドドラーズはその変わり様が普通ではないことに気が付いていた。

「(何だ…話し方も雰囲気もいつものイチとは全く違う。まるで別人じゃないか)」

普段は黒い彼女イチの瞳がほのかに金色を帯びていたことにも彼は驚いた。単なる二重性格やキレた状態とは明らかに違う。しかし、彼女のその異常な状態はすぐに収まることになった。

「だめ…今はアナタに出てもらったらばくが困る。頼むからおとなしくしてよ」

そう目を閉じて片手で頭を押さえながらイチがそう独り言のように、しかし誰かに話しかけるように言う。それが終わるといつもの穏やかなイチの表情に戻っていた。

「い、イチ…大丈夫？」

そうオニクスが声を震わせながら恐る恐る尋ねる。

「…うん、もう大丈夫。ごめんね驚かせちゃって、少し興奮し過ぎたかな」

イチが冷や汗混じりの苦笑いで何かを誤魔化すように小さい声で言った。さっきの豹変ぶりからは想像できない彼女の穏やかなオーラがこの場にいた誰にも感じられたが、あまりのことにしばらくその場にいた全員が黙ってしまった。ただ、夜風の吹き抜ける静かな音だけが聞こえるほどに。

何故か不思議と誰もイチの言葉に反論する気になれなかった。別にイチの言葉が正しいとかそうゆうことではなく、何かこうもつと根本的な不思議な力に反論する機会を奪われてしまったとゆうかそんな感じだ。彼女の持つ不思議な力なのか、それは分からないがその可能性を否定できないのも事実である。

「と、とにかく。ここは一旦みんな落ち着いて。イチも無事に帰ってきたことだし今日はもういいんじゃない？」

そうノエルが勇気を出して黙り込んでしまったエルフ達に言った。

他に言うべきことが思いつかなかったのは言うまでもない。

「そ、それもそうだよな…」

さっきのことでエルフの村人たちのボルテージも急に下がったのか、群衆からそんな投槍な言葉が次々と聞こえてきた。同時にアノフェレスに対する敵意もすっかり冷めてしまった様子。

「やれやれ…良かったわね、イチに感謝なさい。あなたの罪が無くなったことにもね」

緊迫した状況を脱して、リリアがホツとしながらアノフェレスに向かって言った。心の中ではイチの豹変振りと言霊の力に驚いていたが、今はこの場で争いが起こらなかったことに感謝するだけで精一杯だった。

「そうだな…本当にあの娘は不思議な娘だ。人を動かすというかわすというか…そんな力が秘められているのかも知れないな」

イチの不思議な力を一番感じていたのは実はアノフェレスだったのかも知れない。そうでなければきっとこの場に彼女を連れてくることなどありえなかっただろう、結果的にイチに動かされたことにアノフェレスはこのとき初めて気がついたのである。

「まあね、これで一件落着。丸く収まったわけだ、これもあたいの活躍のおかげだね」

大して活躍してないオニキスがそう総括を述べてみる。確かにこれで丸く収まるのは事実なのだが。

…しかし、その場に突如として招かれざる客が飛び込んでくる事となる。

突如として凄まじい突風が巻き起こり砂埃の中から不気味な咆哮巨大な影が姿を現した。その黒くて大きな羽をした蛾のような魔物の赤くて大きな複眼が群衆の頭上からこちらをまるで威圧するかのように見つめている。何より、背中には一部の人には見覚えのある人影があった。

「探したぞアノフェレス。こんな所に小娘を連れだすとは、まさかこの俺を裏切るつもりじゃないだろうな？」

魔物の背中の上に立った眼光の鋭い男がそう叫んでいる。

「あーっ！お前はあの時の細目野郎！」

その男の姿を見るなりオニキスは指を指しながらそう驚きの様子で叫んだ。その独特の鋭い雰囲気は忘れたくても忘れられるものではない。

「え、何？この人と知り合いなのオニキス？」

「何を言ってるのさイチ！この間あたい達のバギーをお化けモグラを操って落とす穴に落とすやがった野郎だよっ」

イチの呑気な問い掛けにオニキスがそう声を大にして答えた。

「そう言えばこないだは姿は見ていないけど確かに声は聞き覚えがあるわね。…こんな所まで追ってくるとはしつこいやっ」

リリアが軽く舌打ちしながらそう皮肉る。何より、その巨大な蛾の

おぞましい姿に鳥肌が立った。

「う、うわー！！化け物だ！」

魔物の姿を見るなりエルフの村人達は我先へと村の奥へと逃げ込む。それが当然の反応だが当事者のイチ達やノエル、そしてアノフェレスは逃げないし逃げるわけにはいかなかった。

「やいやいこの野郎！ここで会ったが100年目、こないだの仕返しはきつちりさせてもらうよ！」

「はっ！威勢だけは良いなこの狸め。このバイパー様に喧嘩を売るとはいい度胸だ」

「あたいは狐だよっ！きーっ、ム力つく！！」

バイパーに完全に馬鹿にされてオニキスは悔しそうに地団駄を踏む。しかし、空中に浮かぶ魔物の背中から言われてしまっでは手も足も出ない。

「悪いなバイパー、私は気が変わったんだ。この娘は渡せない」
イチ

アノフェレスがそう大きめの声で空中のバイパーに自らの意思を伝えた。もちろん、これを聞いたバイパーが黙って大人しく帰ってくれるわけがない。

「ああ、やっぱりそんなことだろうと思ったぜ。安心しな、最初から穩便に済ます気など無いのだからな。ここにいる連中を皆殺しにしちまえば速い話が任務達成なのだから」

そんな確信犯的な暴言をバイパーが吐く。どうやら彼は最初から用が済んだらアノフェレスを証拠隠滅も兼ねて殺すつもりだったらしい。

「おいこら、バイパーとか言ったな？要はお前の目的は何なんだ？いい加減に痺れを切らしたのか、エンドラーズが不良のような顔でそうバイパーに尋ねた。

「はは、なあに簡単なことさ。ヴォルガノン様の秘密を知った輩と王国から逃げ延びた姫君、そして俺に喧嘩を売った不愉快な狸と俺を裏切った蚊トンプを殺すってな」

「なんですって！？それじゃあ、あなたはヴォルガノンがよこした

殺し屋……」

「まあそうゆうことだ。正確には殺るのは俺の操る可愛い魔物モンスターだな」

リリアの問いにバイパーは不気味に舌なめずりしながら答えた。

「この土地で好き勝手しないで！」

ノエルがそう叫ぶと、

「黙れ小娘、エルフなどとう傲慢な種族は滅びてしまえばいいのさ！」

まるで嘲るようにバイパーが心無い台詞を容赦なく浴びせる。ノエルはあまりのことにもう半べそ状態だ。

「ちよつと！それはいくらなんでも言い過ぎだよ、そんな高いところから偉そうに言わないでよ卑怯者！」

バイパーの暴言にイチがそう拳を振り上げて異を唱えた。もつとも、自分が狙われている当事者であることはあまり自覚していない様子だが。

「うるさい！貴様ら全員生かしては返さぬぞ！殺れっ、ナイトパピヨン……！」

「ギシャー……！」

バイパーがそう言つて手を振りかざすと、彼の乗っていた巨大な蛾モンスターの化物が大きな翅を激しく羽ばたかせ始めた。強風と共に砂煙と毒鱗粉が巻き上がり目の前の広い範囲を襲う……！

「きゃあ！ちよつと、何も見えないじゃない」

リリアがそう悲鳴をあげた。まずイチ達は強風のせいでまともに動けない、立っているのがやつとの状態である。そして砂と鱗粉が目や鼻の粘膜を刺激して非常に不快な感覚に襲われた。

「この野郎！同じ虫を相手にするのは気が進まんが仕方ない。こつちも反撃しろロングレッガー！」

アノフェレスが強風の中、何とかそう叫ぶとすぐさま黒くて大きな虫が凄い羽音と共に飛来する。それは昼間イチを浚ったあの巨大なガガンボであった。

「ピギュー！」

ロングレッガーは飛んできた勢いのままナイトパピヨンに体当たりした！

「ギシャー！」

その体当たり攻撃にナイトパピヨンの体は一瞬よろける。しかし、大型トラックよりも大きな巨体に致命傷を与えるには至らない。

「お、おのれ！まずはこの邪魔な虫けらから殺つてしまえ！」

バイパーに命令されたナイトパピヨンは鋭い棘の生えた脚でロングレッガーの上から覆いかぶさるように襲い掛かる！ロングレッガーも必死の抵抗を試み、2匹の巨大昆虫モンスターの凄まじい取っ組み合いが始まった。

「けほっ、目が痛いよ〜」

イチがそう涙の止まらない目を必死にこする。この場にいた誰もが同じ状態だった。

「と、とりえあずこの隙に何とか逃げましょうよ！」

ノエルがそう喉の痛みを我慢しながら今にも枯れそうな声で叫ぶ。

「馬鹿言いなさいノエル！ここまでやられて黙って帰れないわよ！

エンドラーズ、あんた魔法使いなんだから何とかしなさいよ！」

同じく涙と鼻水で凄いいことになっているリリアがエンドラーズにそう言った。彼女の負けず嫌いは半端じゃない。

「そんな無茶言ふなよりリア！あの手の飛行タイプには魔法が当たり難い上に、あんな巨大な相手を一撃で倒せる魔法なんて使えないよ」

そんなやり取りをしている間にナイトパピヨンはロングレッガーを翼で叩き落とし、再びこちらへ向かってきた！

「くそっ、この化物め！」

とつさにアノフェレスが背中に畳んでいた翅を羽ばたかせてナイトパピヨンの顔面に体当たりする。しかし、逆にナイトパピヨンに跳ね返され彼女は激しく地面に叩きつけられてしまった。

「うわぁっ……ぐ……」

叩きつけられたショックでアノフェレスはその場から動けなくなっ
てしまった。そこに容赦なくナイトパピヨンの巨体が今にも襲い掛
かりそうな様子。

「ふふ、残念だったなアノフェレス。この俺に逆らったばかりに命
を縮める羽目になるとは」

空中のナイトパピヨンの背中からアノフェレスを見下すようにバイ
パーが言い放つ。明らかに絶体絶命の局面であった。

「待ってアノフェレス、今助けるからね！」

「ちよつと待ちなさいバカ！女の子一人の力でどうにかなる相手じ
やないでしょ！」

とつさに飛び出そうとするイチを慌ててリリアが羽交い絞めにして
静止する。

「だって、このままじゃあアノフェレスが…」

イチはもう今にも泣き出しそうであるが、確かにリリアの言う通り
今の自分が突っ込んで行ったところで返り討ちにされるのは目に見
えている。そんな時、彼女の視線にあるものが入ってきた。それを
見た彼女はこう言い出す。

「お願いエンドラーズ！その杖であの蛾をやっつけて！」
ライブベアラー

「おいおい無茶言っなって！確かに魔法なら遠隔攻撃できるぶん安
全かも知れんが…」

「勝手なのはわかってる。でもアノフェレスはこうなることを覚悟
でぼくを逃がそうとしてくれた…どうしても助けてあげたいんだ」
そうイチが懇願する。

「し、しかしなあ…」

そんないまいち自身の無さ気なエンドラーズを見かねたのか、リリ
アが優しく方を叩きながらこう言った。

「あなたならきっとできるわ、いつでもその魔法で私達を救ってき
てくれたじゃない。自分と杖の力を信じてとりあえずやってみたら
？」

「そうだよエンドラーズ、あんたの強さはこのあたいが保障するよ」

オニクスもリリアと共にそう励ましの言葉を彼にかける。

「私からもお願いします！…同じ森に生きるものとして見殺しにはできませんから」

ノエルがそうエルフを代表するかのようにつた。もはや種族の違いなど関係なかった、ただ目の前の同士を救いたいその気持ちはみんな同じである。

「つたく…一発で殺れる保証は無いぜ？だが、できる限りの技は尽くしてみよう」

そう力強く杖を握り締め、杖先を標的に向けながらエンドラズが言う。全員の命が懸かっていた、失敗は許されない…そんな重圧に押し潰されそうになりながらも彼は呪文を唱えありつただけの魔力を杖先に集中する。すると杖の能力チカラによってか彼の魔力は何十倍にも増幅され杖先に送られ、直径が1m近くもある巨大な青白い玉が凄まじい電光を放ちながら光り輝く！

「くたばれこの虫野郎！ライトニングブレイク！！！」

エンドラズが杖に最後の魔力を送り込むと同時に電撃を帯びた青白い玉が高速で飛んでゆく。あっという間に玉はナイトパピヨンに直撃し、もの凄い光と爆発が巻き起こった！閃光と爆風で一瞬なにがなんだかわからなくなった後、地面にはナイトパピヨンのわずかに残った羽の残骸だけが落ちていた。

「す、すごい…これが伝説の武器の力なのかよ…」

どうやら一連の出来事に攻撃を仕掛けたエンドラズ本人が一番驚いている様子だった。あれだけの短時間であれだけの威力を持つ魔法を発動するのがどれだけ難しいことか彼は知っていたから当然である、改めてこの杖の力ライフベアラーを身を持って実感した。

「大丈夫アノフェレス！」

イチが慌てて倒れているアノフェレスのところに走り寄る。呆然と杖を眺めているエンドラズを除くリリア達も急いでその後続いた。

「いつつ…一体何が起こったんだ？」

何が起こったのかまるで理解できないアノフェレスがそう辺りをキョロキョロ見渡す。

「よかった…無事だったんだね」

そんなアノフェレスの様子を見てイチは安堵の表情を浮かべた。

「あれ、そう言えばあの男は…」

ノエルがそう言い出した矢先、砕け散った魔物の残骸の下からバイパーが何とか這い出してくる。彼は体中に軽傷を負ってはいたがそれほどダメージは受けていないようだ。

「ぐざぎざ…一度ならず二度までもこの俺を負かすとは…貴様ら覚えておけっ」

そう吐き捨てるバイパーは素早い身のこなしで暗闇の中へと姿を眩ました。逃げ足の速さは天下一品のようである。

「あつ、待てこの野郎！」

「深追いするのはやめなさいオニキス。あの様子じゃしばらくは襲ってこないわ」

そう言っただけバイパーに食って掛かろうとするオニキスをリアが冷静に宥める。無駄な争いは避けたい。

「そうだね、これ以上ばく達が村に留まるのは危険だし…夜明けを待つて出発しよう」

イチがそう言った。きっと彼女なりにエルフ達に配慮したつもりなのだろう。

さっきまでの騒ぎが嘘のような静けさが辺りを包み込む。冷たい夜風の中、イチ達は静かに夜が明けるのを待つことにしたのであった。

《エルフの村の夜明け》

「本当にもう行っちゃうのイチ？まだ何もお礼とかしてないのに…」
「うん、旅路に長居は無用だよノエル。村長さんや村の人達による

しくね」

申し訳なさそうなノエルにイチはそう優しく言った。

バイパーとの戦闘からまだ数時間しか経過していなかった。イチ達はノエルとアノフェレスの出迎えのもとバギーカーが走行可能な道の所まで来ていた。早朝に村を出た時には朝霧に包まれていた森も今はすっかり晴れている。

「道中気をつけてなイチ。またいつでも立ち寄って構わんからな」
「ありがとうアノフェレス、きつとまた来ると思うよ」

そう言ってイチとアノフェレスは硬い握手を交わした。それから別れの儀式もほどほどに彼女はバギーの後部席へと元氣よく飛び乗る。
「よし、準備は良いようだな。じゃあな、世話になった。また来るようなことがあればその時はよろしくな」

エンドラースがそう淡々と台詞を述べる。

「私達がいなくなってもちゃんと仲良くするのよ？そうじゃなきゃイチの努力が水の泡だからね」

お節介なりリアがそう冗談交じりにノエルとアノフェレスに言った。

「あたい達のこと忘れんなよ。旅は一期一会なんだから」

ちよっぴり別れが寂しいのか、オニクスがそう別れを惜しむように言う。

「それじゃあねっ！みんな元気で」

イチのその言葉を合図に運転席のエンドラースはバギーのアクセルを踏む。離れていくバギーの後部座席からしばらく手を振っていたイチとオニクスの姿はやがて木々もまばらな林の小道へと消えていきました…。

「行ってしまったな…本当に不思議な娘だった。もしかしたらあれは神の化身じゃないかってくらいに…って、それは言い過ぎか」

「いいえ、あなたの言う通りかもよアノフェレス。そうじゃなきゃ今、私達がこうやって並んで立っているわけないもの」

そう言って二人は顔を見合わせて笑う。もちろん『イチが神の使い』ってのが大袈裟なジョークだってことはお互いによく分かっている

のだが、何故かそれが良い意味で無性に可笑しかった。

「で、どう？せっかくだし村で朝ご飯でもご馳走するよ。信頼を作るためには食事が一番ってね」

「ああ、それ賛成。もうお腹ペコペコだよ。ノエルの…エルフのご好意に乾杯といこうか」

そんなことを話しつつ、二人はエルフの村への帰路についた。そこにもう種族間の隔たりなど微塵も無い、互いに良き友として共に歩いて行こうとゆうそんな感じを醸し出しているのでありました。

森に本格的な朝日が差し込む頃、木々の風に揺られる爽やかな音と小鳥のさえずりが聞こえてくる。森にまたいつもと変わらない平穏な日々がやってきた。

導きの章 第六部 大魔導師の杖（後書き）

エルフと言えば様々な物語で登場する有名な種族です。本作中でのエルフのイメージは姿は人間とよく似ていますが、プライドが少し高く人間とあまり仲良くない自然豊かな場所で暮らしている種族といった感じの設定です。本作には他にも様々な種族が登場します、その種族の特徴などを押さえながら物語を読み進めていくとよりいっそう楽しめると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7481b/>

ジャスティス

2010年10月12日06時15分発行